

IS一兎協奏曲一第二樂 章

ミストラル0

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あのハチヤメチャ兎達が帰ってきた！

これは第2学年へと進級した兎達と新キャラ達が巻き起こす新たな物語

前作

ISI兎協奏曲

<https://syosetu.org/novel/119389/>

目次

													設定資料
1 話	設定資料① 再始動	量産機											設定資料
2 話	入学式												設定資料
3 話	その頃の兎と再会												設定資料
4 話	オリエンテーション～兎参上～												設定資料
5 話	兎の皮を被つた災害（ラビット・デイザスター）												設定資料
6 話	実習と呼び出し												設定資料
7 話	食事会												設定資料
67	62	56	45	38	24	14	84	10	78	9	8	73	亡命少女
1 8 話	開幕！チームトーナメント												学年別チームトーナメント
1 7 話	一回戦①	一回戦②	一回戦③	一回戦④	一回戦⑤	一回戦⑥	16話	15話	14話	13話	12話	11話	8話
二回戦①	兆し												亡命少女
154	150	138	127	116	109	102	92						

スパロボ30編⑩ ゲリラとザンネン
兎

スパロボ30編 中断メッセージ集①

360 352

設定資料

設定資料① 量産機

鋼
ハガネ

雪華や打鉄シリーズをベースに開発した量産仕様 I S。

打鉄のような使い易さを主眼として開発されており、肩の積層構造のシールドスラスターを装備し、元の人としての腕の長さから違和感を減らしたガントレットパーツ等の打鉄本来の良さはそのままにシールドとしても機能する頑丈さを併せ持つ。

刀型の近接ブレード・蓮華やガンブレイドにアサルトライフル、先端を尖らせて刺突も可能にしたピアッキングシールド等を装備する。

近接仕様【村正】

元から装備する蓮華に加えて雛菊という近接ブレードを追加し、バツクパツクに瞬发型のブースターを追加。

ピアッキングシールドを小型の物に換装し、斬艦刀の運用データから対大型機・対艦用ブレードとして作成された斬機刀・村正を装備する。

狙撃仕様【種子島】

超長距離射撃用スナイパーライフル・種子島に強化センサーバイザーを装備し、索敵用レドームやその他中距離用火器を積んだ遠・中距離戦仕様。

装甲強化仕様【防人】

ピアッキングシールドを両手に装備し、左右の肩のシールドスラスターを大型の物に換装し、追加外装を装備した耐久性を向上させた装備。

式式の夢現をベースに改良を施した薙刀型の穂先にショットガンを装備した高周波ブレードの陽炎を装備する。

高機動仕様【隼】

バツクパツクや腰のサイドアーマーに高機動ブースターを追加し、機動力を強化した装備。

武装は雛菊や陽炎等を必要に応じて追加装備する。

【武神】

【村正】【種子島】【防人】【隼】の各種装備を全て装備したフルアーマー・フルウエポン形態。その分扱いは非常に難しく、エネルギー効率も悪いので滅多に使う者はいない。

【白銀】

鋼のバリエーション機。

主に学園の教官や部隊指揮官仕様として出力やセンサー類を強化してあり、装甲も一

部増設されている。

カラーリングが白いのが特徴。

【クロガネ
黒鉄】

鋼のバリエーション機。

更識等に支給された隠密仕様で、各装甲等を小型化したり軽量化しており、その分静音性や機動力に優れる。

その他にもジヤミング機能を有する専用パック【常闇】が存在する。

カラーリングはダークグレーや黒。

ラファール・リヴィアイヴⅡ（制式採用）

シャルロットや真耶機のデータからブラッシュアップが行われたりヴィアイヴⅡの制式採用版。

元々の豊富な使用可能武装はそのままに徹底した操作性の向上と整備性、リヴィアイヴとの互換性やⅡへ改修のしやすさ、今後の強化を想定した拡張性等を纏めたデュノア社の現最高傑作という仕上がりっぷりにあの兎師弟が感心したという。

オプションパックはいくつかの組み合わせで性質を変化させるという雪兔とシャルロットの使う二重武装や重複武装を元にした他とは違う方式を採用した。

グレール

電を意味する機動射撃オプション構成。

その名の如く両手とサブアームに持った武装から弾幕を展開しながらバツクパツク等の高機動装備で戦場を駆け巡る

エクレール

雷を意味する機動近接オプション構成。

近接オプションとして先行量産機ではオミットされたシールドバンカー「一角獣の紋章」を装備する。

クードヴァン

突風を意味する純高機動オプション構成。

バツクパツクのスラスターを2基増やし、元からの2基を含めた4基スラスターで高速移動を可能にした。

アルカンシェル

虹を意味する射撃・砲撃オプション構成。

グレールの射撃オプションに砲撃オプションを追加した純射撃オプションで、バツクパツクのサブアームには大型レールバズーカとビームキヤノン、撃つ際の姿勢制御アンカーや反動相殺用スラスターを装備する。

トルナード

竜巻を意味する純近接オプション構成。

追加のソードライフルにシールドバンカー やエッジウイング、ソードビットを装備しておらず、近付いたものを竜巻に巻き込まれたようにズタズタに切り裂くというコンセプト。

ミラージュ

蜃気楼を意味する回避・防御型オプション構成。

両肩のサブアームシールドによる防御と高機動スラスターによる回避運動を得意とする。

その他にもあるが、今回はこれで割愛する。

ブルー・アクシス

BTシリーズの稼働データと雪兎から齋された技術のハイブリッドとなるイギリスの新型にして3・5世代量産機。

イギリスからPFへの出向者が基礎設計を行つており、性能で言えば初期のブルー・ティアーズを上回るカタログスペックを誇る。

BTシリーズの最大の特徴である偏向射撃も強化型ハイパー・センサー やブルー・テイ

アーズ・ガブリエルの使用履歴等から扱い易さを格段に向上させており、偏向射撃の適性と訓練さえしつかり熟せば使用可能な程に改善されている。

基本武装はバックパックから腰のサイドアーマーに移設したBTビットと腕部内蔵型のレーザーブレード、オプション装備によつてカスタム可能なマルチカスタムレーザーライフル、脚部内蔵のマイクロミサイルと拡散レーザー砲。

オプションS

ブルー・アクシスの狙撃タイプオプションパック。

マルチカスタムレーザーライフルにスナイパーバレルと銃身下に実弾仕様のミニガトリングガンを装備し、肩に左右選択式のレドームシールド、バックパックに追加のBTビットコンテナを持つ。

オプションA

ブルー・アクシスの近接タイプオプションパック。

マルチカスタムレーザーライフルには銃身下に実体ブレードを追加してバヨネットとしており、脚部にレーザーブレードを応用したレッグブレードを追加。

バックパックは高機動ブースタータイプに換装する。

格納武装としてランパードランチャーを元に基盤設計者がとあるアニメから着想を得た槍型武装ガングレイブを持つ。

ガングレイブは某間違つた使い方で有名なあの武装が元ネタ。
オプションD

ブルー・アクシスの強襲タイプオプションパック。

マルチカスタムレーザーライフルにはレーザーキヤノンへと出力強化を行うキヤノンバレルを装着し、バツクパツクにクラスター・ミサイルコンテナを装備。
マルチカスタムレーザーライフルとは別にレーザー・アサルトライフルとグレネードランチャーの複合武装であるピアツシングレイを装備する。

ハイゼ

雪兔から齋されたデータとシユヴァルツエアシリーズをベースとした3・5世代量産機。

本体そのものは各種オプションパックとそれ以外に各個人で追加装備を付けさせる事を前提にハードポイント増設した機体で、他のオプションパックの装備も別のオプションパックに装備する事も視野に入れた設計となつている。

本体の武装はアサルトライフル、対ビームコーティングコンバットナイフ、ヒートブレード、グレネードランチャー付きシールドとシンブルに纏められている。

ハイズル

ハイゼ本体のシールドをシールドウエポンブースターを兼ねたミサイル内蔵型シールドに換装し、脚部に追加スラスターを装備。頭部にも顔の上半分を覆う強化センサーサーバイザーを装備したパック。

シールドウエポンブースターはパックパックに装備し、本来のシールドも装備する事が可能。

シールドウエポンブースターを更に2つ追加して両腕とパックパックでドライブースターという高機動形態にもなる。

ハイザ

レーゲンの大型レールガンをベースとしたレールカノンを装備し、それに合わせて脚部やパックパックを耐反動用に大型外装を追加したパック。

ミサイルポッドやレーザーワイヤー等を装備しており、レーゲンに近いコンセプトのパックである。

キハール

インレが装備していたキハールをそのままハイゼ用のパックとして再設計したパック。

長距離移動や偵察用のオプションパックで、巡航形態への簡易変形とセンサー兼追加装甲のレーダーアーマーを装備し、レーゲンと同じワイヤーブレードを装備している。

あくまで偵察オプションなのでそれ以上の武装追加はない。

フライルー

強襲用オプションパックで、肩に大型のシールドウエポンブースターを2基装備し、小型化したレールカノンを左右に装備する。

その他、装甲切換以外で使用するオプション装備としてアサルトライフルに装備するロングバレルとヒートブレードを複合したブレードバレルやハイズルで装備したシールドウエポンブースターの予備、バズーカランチャーチャー、腕部に装着するヒートサークルカッターワイヤーブレードで回転部を飛ばして有線チャクラムにもなる等を持つ

鉄竜

乱の鋼竜の正式量産機。

小型化した龍砲のビット・龍砲を4基装備しており、メインウエポンは青竜刀。

バックパックには龍の頭部を模した5基目の龍砲を持ち、こちらは大型化して出力を強化したバージョンで、収束と拡散も可能。

風翼

高機動パック。

竜の翼を模したバインダーブースターで機体を覆うように可動させればシールドに

もなる。

翼に龍咆を応用した圧縮空気砲のスラスターを持ち、長距離移動もエネルギー消費を抑えたコストパフォーマンスに優れる。

オプション武装として青龍偃月刀を装備する。

雷爪

近接強化パック。

腕に竜の爪を模した大型のクローガンドレットを装備した形態。

こちらにも小型の翼型バインダーブースターが4基付いており、龍咆球を接続して一気に加速したり、方向転換を行う。

高電圧縛鎖ボルテッカチェーンも装備している

炎牙

砲撃強化パック。

バックパックの龍の頭部を換装し、圧縮率を上げて炎熱と化した龍咆を放つ龍崩火を装備する。

また、腕部内蔵龍咆の崩拳甲龍のオプションにあつたものと同じタイプを装備した。

鋼竜

乱が専用とする鉄竜の先行試作機。

各出力が鉄竜より高めに設定されており、扱いが少しピーキーになつてゐる他、龍の尻尾を模した多段式スラスター兼サブアーム龍尾を装備している。

インパルスイーグル

ファング・クエイクを改良して3・5世代機に合わせた仕様にした機体。各部が大型化していたファング・クエイクに対し各部を小型化し、本体はシンプルな構造にする事で拡張性を高めており、オプションパックを装備すれば多方面に活躍出来る。

バツクパックに懸架したアサルトライフルを一本のサブアームで使用する等のアクションが可能。また、両手にライフルを装備してアサルトライフル四つによる射撃も可能。

アサルトイーグル

近接強襲オプションパック

ファング・クエイクの装備をオプション化したようなもので見た目はダウンサイジングしたファング・クエイクそのもの。

右腕にスタンガンナックル、左腕に高周波ブレードクローバーを装備する。

イーグルアイ

射撃・狙撃オプションパック。

鷹の嘴を模した強化センサーバイザーを装備し、実弾とレーザーの2種のスナイパーライフルを使つた狙撃を行う。

パックパックにミサイルポッドも追加している。

ストームイーグル

高機動オプションパック。

パックパックに大型ブースターを装備して脚部にも姿勢制御用に追加スラスターを内蔵した増設装甲を装備しており、高い機動力を持つ。

ヴエルデ・グリフオーネ

テンペスタとロツソ・アクイラのデータから作成された3・5世代機。

アームブレードや双銃剣【アクイラ】を標準としており、基本形態から機動力を重視した設計となつてゐる。

名前の通り、通常機はヴエルデ^緑なのだが、指揮官機はヴィオラ^紫と名前と色が変わることなく、アクリラに比べてミサイルポッドやシールド等のオプションを追加している。

基本装備パック。

ロツソ・アクリラに比べてミサイルポッドやシールド等のオプションを追加している。

バランスの取れたパック。

レオーネ

近接オプションパック。

ロツソ・アクイラのデータをそのまま流用し、蛇腹剣やヒートチャクラム等を装備する。ほぼロツソ・アクイラの量産バージョンという感じ。

アクイラ

射撃オプションパック。

【アクイラ】をアサルトライフルタイプのソードライフルにしたものを作成したり、ミサイルポッドの増設等の機動射撃を重視した装備をしており、一応はセンサーも強化しているのでナイパーライフルも装備しているが、他の量産機に比べて精度は高くはないが、機動射撃の精度は恐ろしく高く、戦場をかき乱す事を得意としているようだ。

1章 1話 再始動編

〈これまでのあらすじ〉

I S 正式名称インフィニット・ストラトス。

宇宙開発用に篠ノ之束が開発した宇宙空間活動用マルチフォーム・スーツ……なのだが、発表当初は各国から見向きもされず、「白騎士事件」と呼ばれる一件によつて漸く注目を浴び、本来の目的とは違う兵器・競技用パワードスーツとして世界に広まつた。しかし、I Sは女性にしか使えないとされていたが為に【女性権利主義】が広がり、女尊男卑という世界になつてしまつていた。

それが変わつたのは【織斑一夏】という初の男性I S適性者が発見されてからだ。

その後の調査でもう一人の適性者にしてI Sの開発者である篠ノ之束の弟子である【天野雪兎】が見つかり、二人は他の生徒が全て女子であるI S学園へと入学させられる事になる。

だが、天野雪兎は転生者であり、篠ノ之束の教えを受けたせいか学園で再会した友人や知り合つた者達を巻き込み『原作？そんなもん知るか！』とばかりに行動し、いつし

か「兎の皮を被つた災害」^{ラビット・ディザスター}という二つ名を得る。

そして、原作ブレイクのせいかIS学園に居着いた篠ノ之東と師弟揃つて好き勝手にIS開発に勤しみつつ……IS学園に入学して一年が経過した。

＊＊＊

四月。

IS学園校舎前。

「今日から僕もこここの生徒なんだなあ」

桜舞う中、『見慣れた』校舎を見つめ、薄紫色の髪をした少年、天野紫音^{あまのしおん}は今日までの日々を思い返していた。

「そんなところでどうしたの？ 紫音」

「まだ実感が沸いておらぬのだろう。何せここは他の学び舎とは異なる故にな」

「それに紫音自身も特別事情を持つていますからね」

そんな中、紫音に声を掛けてきたのは毛先だけが黒い水色のツインテールのレビイ＝ラッセル、白い髪のディアーチエ＝K＝クローディア、茶色の髪をしたシユテル＝スタークスの三人の少女だつた。この三人とあと二人、ユーリ＝エーベルヴァインとイス＝セブンフィールドという少女もいるのだが、彼女達五人は正確には人間ではなく、紫音の保護者の人であるとある『天災』の片割れが作り出した疑似人類、彼曰く「人

工知能に骨格強化した肉体を与えたハイブリッドヒューマノイド」というカテゴリーに入るそうなのだが、基本的なところは人間と変わらないそうだ。

「はは、ディアーチエの言う通りちょっと実感がね……ところでユーリとイリスは？」

「あの二人でしたらマスターの手伝いで先に講堂に行っています」

「そつか、なら僕達も行こつか」

講堂。

「マスター、こつちの接続は終わりました！」

「こつちも終わつたわ」

「ありがとさん、ユーリ、イリス」

教師達に混じつて入学式の準備をしていた雪兎達三人。その一人が先程話題に出たイリスである。彼女は最近ユーリ達四人と同じマテリアルズに加わった新メンバーなのだが、彼女だけ他の四人とは出自が異なる。

実は彼女は一週間程前に雪兎が訪問した異世界にて発見された石板型のタブレット端末に封じられていた人格データの複製体らしく。その人格データをマテリアルズのようにハイブリッドヒューマノイドのボディを与えた存在なのだ。

記憶メモリ等に欠損があり、「イリス」という名前しか自分の事を覚えていなかつた

が、何故か機械工学やテラフォーミング等の知識は残っていたので雪兎の助手の一人として重宝されている。

「(にしても “イリス” とはな)」

その正体を雪兎は知っていた。

その正体とは魔法少女リリカルなのはシリーズのゲームを原作にした劇場版3作目と4作目に登場するオリジナルキャラクターで、奇しくもマテリアルズに縁のある人物であった。

尚、記憶メモリの方は某ツンツン頭さんが脳細胞が死滅して記憶が戻らないように、メモリそのものが欠損しているせいで記憶が戻る事は無い。

そして、オリジナルの“イリス”的緊急時用のコピーであつたためか、内部データに劇場版3、4作目の黒幕の人格データも存在したが、イリスをチエックする際に雪兎が発見し削除済みである。

また、セブンフィールドという名は他のマテリアルズ達と同様に並行世界を描いた番外編のイリスから拝借している。

「雪兎く、準備終わつた?」

そこへ雪兎の彼女でクラスメイトでもあるシャルロットがやつってきた。

「ああ、二人が手伝つてくれたからな……会長も余計な手間を掛けさせやがつて」

「これをやるつて言われたの、『あつち』から帰つてきてすぐだつたもんね」「一週間でイリスのボディ作つてる最中にこれの準備させられたんだ、この借りは高くつくぞ」

「あはは……御手柔らかにお願いします」

噂をすれば何とやら、この準備を雪兎に依頼した生徒会長の更識楯無が申し訳なさそ

うな顔をして現れ、手の扇には『陳謝』と書かれていた。
「それじゃあ俺とシャルはもう行きますよ?」

「ユーリとイリスはそのまま入学式に?」

「はい」

「そろそろ他の子達も来るでしようしね」

そうして雪兎とシャルロットが講堂を去るのを見送ると、楯無は今年の新入生のリストを眺める。

「今年も紫音君にマドカちゃん、それから蘭ちゃんと将来有望な子が多いわね……他にも何人か面白い子がいるみたいだし」

紫音を含む四人の新男子適性者や新たな代表候補生。他にも個人的に面白いと思える人材が集められていた。

「それに、今年は去年までと色々違うから退屈はしなそうね……お姉さんもこの年に

入りたかつたくらいだわ』

そう、楯無が言うように今年は去年のアレコレがあつたせいか設備やカリキュラムが新生したとも言えるレベルで変わったのだ。しかし、楯無達3年生はいきなりこれまでの二年間を無視する訳にはいかず、最低限の変更点に抑えられてしまつており、年度末の説明会の際に「留年したらそつちのカリキュラム受けられますか!?」と声が挙がつていた程だ。

「その中でもこれが飛びつきりで違う点かしらね?」

“新設特化クラス”、去年の雪兎達のクラス再編に続く試みとして推薦された者や希望者だけが集められる専用の特殊なカリキュラムが組み込まれた特別クラスが新設されたのだ。

このクラスには紫音やマドカ、マテリアルズの五人等の雪兎に縁のある者が全体の1／3を占めており、「依怙蟲貝なのではないか?」という意見もあつたが、特殊なカリキュラム以外は他のクラスと変わらないという事もあって反対意見はほとんど出なかつた。というよりも「アレの関係者だし一纏めにしてもらつた方がいいのでは?」という意見の方が多かつたぐらいなのだ。

「それよりも私の後釜をどうしようかしら」
楯無はもう3年であるため今年で卒業だ。

以前、全生徒の前で雪兎にボツコボコにされた際に彼に生徒会長の座を譲ろうとしたのだが、「面倒なのでパス」と断られてしまっており、そのため楯無の任期が終われば生徒会長の座を狙つて熾烈な争いが始まる予想出来る。

「いつそのこと今のうちに私を倒して一夏君が会長を継いでくれないかしら？」

そこで楯無が考えたのは今では雪兎に次ぐ実力を身に着けた一夏が己を倒して会長に就任してくれないか、というものだった。

生徒からの人望もあり、実力は雪兎のお墨付きとあつて悪くない考え方だと楯無は思つてゐる。

「かいちよ、そろそろ打ち合わせ始めるそうだよ～」

「今行くわ」

同じ生徒会の本音に呼ばれ、楯無はステージ脇の会議室へと向かうのであつた。

＊＊＊

そうして講堂が開場となり、新入生達が期待と不安を胸に次々と集まつてきた。紫音も指定された席に座つて待つてゐると……

「おつ、ここか」

その隣に紫音と同じ男子の制服を着た少年がやつてきた。

「隣が男子で良かつたぜ、やつぱI-S学園つて女子ばつかだから本当にここにいていい

のか不安になつたよ」

「あはは、確かに知り合いとかがいないとキツそうだね」

「おつと、自己紹介がまだだつたな。俺は進藤しんどうレオン、レオンつて呼んでくれ」

「僕は天野紫音、僕も紫音つて呼んで」

「おう！……つて、”天野”？それつてあの有名なあの人と同じ!?」

「うん、僕は訳あつて雪兎兄に引き取られて義理の弟になつたんだ」

「そ、そうなのか……紫音も色々大変なんだな」

「へえ、君があの人の」

そこへもう一人金髪碧眼の男子がやつてきた。

「君は？」

「これは失礼。僕はルーク＝ファイルス、良ければ僕もルークと呼んでくれ」

「よろしくルーク。ファイルスつて事はナターシヤさんの？」

「ああ、彼女は僕の姉さんさ」

「ナターシヤ＝ファイルスつてアメリカの国家代表だつた人だろ？ルークの姉さんつて

すげーんだな」

「今は國家代表を辞してここで教師をしているけどね」

ルークも席が二人の傍らしく、そのまま三人は会話を続ける。

「そうか、君は母親に樂をさせたくて」

「おう、片親なのに無理して入院しちまつてな、だから恩返しがしてえんだ」

「母親かあ……」

しばらくレオンの身の上話を聞いていると、最後の四人目の男子が現れた。

「はあ、はあ……何とか間に合つた」

割とギリギリな時間にやつてきた最後の少年は黒髪の少年で、その顔は何故か少し油や煤で汚れていた。

「おつ、最後の一人だな」

「外部から来たにしてもモノレールの時間は余裕があつたと記憶しているが……」

ルークがそう呟くとその少年はゲンナリした顔で訳を話してくれた。

「実はそのモノレールでテロがあつてね」

「テロ!？」

「うん、なんでも女性権利主義の一派と思われる女性がモノレールのコントロールルームに爆破物投げ込んでコンソール破壊しちやつてね」

「うわ、そりや災難だつたな」

聞けば他にも新入生の乗客がいたらしく、そのせいで多くの新入生がギリギリになってしまつたらしい。

「ほんとね……犯人は巡回に来てたこの用務員さんが捕まえて警察に突き出したんだけどモノレールは直ぐに復旧しそうになくてね……それで、『その破壊されたコンソール直してた』からギリギリになつちやつて」

「そうなんだ」

「つて、ちょっと待て!? お前今コンソール直してたって言つたか!」

「うん、僕はそういうのが得意でね、時間も無かつたから用務員の人にお願いして直させてもらつたんだ。直したと言つてもちよつとした応急処置で動かせるようにしただけだけどね」

「雪兎兄みたいな事するね、君…………あつ、僕は天野紫音、紫音つて呼んで」

「これはご丁寧に…………僕は赤城優斗あかぎゆうと、僕も優斗と呼んでくれ」

「俺は進藤レオン。レオンでいいぜ」

「ルーク!! ファイルスだ。僕もルークでいい。よろしく、優斗」

こうして後に第二世代セカンド・フォーの四天カンドウと呼ばれる事になる天野紫音、進藤レオン、ルーク!! ファイルス、赤城優斗の四人は出会つたのであつた。

2話 入学式

それから程なくして入学式が始まった。

偉い人の挨拶等は手短に済み、最後に生徒会長・更識楯無からの挨拶となつた。

『皆さん、入学おめでとう。あんまり長く話しても皆退屈だろうし、私からはこれを挨拶代わりとさせてもらうわね』

そう言つて楯無が指を鳴らすと講堂が暗くなり、ある立体映像が映し出された。

それは過去の様々な行事での活動記録であつた。

始めはクラス代表戦、その次はタッグトーナメント、文化祭、キヤノンボール、体育祭、その名シーンを切り取つたものである。

そして、去年度の末に行われた専用機持ちによるトーナメント決勝戦……雪兎と一夏による戦闘の一部が流される。

「スッゲー…………」

「あれが噂の…………」

映像が終わると明かりが戻り、皆の視線が再び楯無へと戻る。

『今見てもらったのはほんの一部だけど、皆の先輩達がこの学園で行つてきた事よ。今

年からは少し今までと違う所もあつて色々戸惑うかもしれないわ。でも、ここで過ごす三年間はきっと貴方達の良い糧となるでしょう』

そう言つて樋無が扇子を開くと、『日々精進』の文字が見える。

『改めて入学おめでとう』

扇子を閉じてそう告げると、講堂の中なのに桜の花弁が新入生達の頭上を舞うが、その花弁には触れようとしても触れなかつた。

「これも立体映像か」

「現実拡張……話には聞いてたけどここまでA R技術があるなんて」

「雪兎兄達がしてた準備つてコレだつたんだ」

入学式を終えた新入生達はそれぞれ指定された教室へと向かう。

紫音は同じクラスと知つたレオン、ルーカ、優斗の三人と一緒に教室へと向かつていた。

「やっぱ俺ら全員同じクラスなんだな」

「男子の少なさを考えれば同じクラスにしてまとめて管理したいというのが学園の本音なんだろう」

「それはそうだけどよ…………」

「雪兎兄から聞いた話だと僕らのクラスは少しカリキュラムとかに違いがある特別クラスだつて話だよ」

「そのカリキュラムというのが僕達を集めた理由なんだろうね」

そんな事を話している紫音達の少し後ろを金髪のローツインテールに碧眼の少女・イクス＝シアハートは歩いていた。

彼女は前に入試に訪れた際に落とし物を紫音に拾つてもらつた事があり、改めてお礼を言おうと紫音を探していたのだが、気付けば紫音は他の男子三人に囲まれており、イクスは声を掛け辛い状況であった。

「うう…………せつかく同じクラスになれたのに…………いいえ、同じクラスならまだチャンスは」

「ねえ、君どうしたの？」

「ひやい!? な、なな何でしようか!?

「驚かせちゃつてごめん。私は紫陽日向しそうひなた、貴女のお名前は?」

「イ、イクス＝シアハートです」

「ならイクスちゃんつて呼ぶね、私も日向でいいから」

「は、はあ」

そんなイクスに声を掛けたのは紫陽日向。雪兎の中学校時代の後輩だった首元までの

短い茶髪に黒みかかつた茶色の瞳をした少女だ。

「話は戻すけどイクスちゃん、何をそんなに悩んでたの？」

「えっと実は……」

日向が悪い人では無いと信用したイクスは入試の時の事を日向に話した。

「な～るほど、それで彼の事ジツと見てたんだ」

「はい……」

「なるほど、そういう事でしたか」

そこへ更に二人の少女がやつてくる。

「あれ？ 貴女は前に雪兎先輩と一緒にいた人だよね？」

「知り合いだつたの？ ユーリ」

「ちよつと入試の時に……お久しぶりです、日向さん」

それはユーリとイリスの二人だつた。

「改めまして、ユーリ＝エーベルヴァインです」

「イリス＝セブンフィールドよ」

「じゃあ、私も改めまして紫陽日向です」

「イクス＝シアハートと申します」

「それで、イクスさんは紫音さんにお礼が言いたいのですよね？」

「はい」

「でしたら後で時間を取つてもらいますからその時にしましよう」

「だ、大丈夫なんですか？」

「いきなり時間を取つてもらうなんて出来るのか？と心配になるイクスだつたが、ユーリとイリスは顔を合わせて微笑んだ。

「心配しなくても大丈夫よ。私達と紫音は知り合いだから」

「その事についてはまたH.Rで説明があると思いますから」

「そう告げる二人にイクスと日向は首を傾げるが、その意味は直ぐにわかる事となる。

教室に着き、それぞれ指定された席へと座り担任教師を待つていると、そこへやつてきたのはかつて世界最強ブリュンヒルデの称号を持つていた織斑千冬と日本の代表候補生だつた山田真耶の二人であつた。

「あ、私はこの度新設された1年α組、特化クラスの担任となつた織斑千冬だ。色々と訳有りの生徒も多いが、去年の阿呆共のようにやらかしてくれない事を祈る」

「副担任の山田真耶です。皆さん、1年間よろしくお願ひしますね」

紫音達が集められたα組とは、入試の段階で高いIS適性を持つた者や代表候補生、そして千冬の言うような訳有りの生徒を集めたクラスで、その訳有り生徒をまとめられ

そうな教師と言う事で去年雪兔達問題児集団の担任だつた千冬とその副担任だつた眞耶に白羽の矢が立つたのだ。

無論、クラス対抗戦に配慮して他のクラスにも代表候補生は割り振られている。

千冬にとつて幸いな事に今年は千冬の名を聞いても黄色い声をあげる生徒が皆無だつたのは良いのか悪いのか……。

「とりあえず皆さんのお己紹介から始めましょうか」

「なら、初めは赤城優斗君からですね」

「えつと……赤城優斗です。趣味は機械弄りです。特技は機器のメンテナンスや修理等ですかね？」

トップバッターとなつたのは四人いる男子の新入生の一人である優斗だつた。

「そうか、報告にあつたモノレールの応急処置をしたのはお前だつたな」

「えつ？」

千冬の呟きに同じモノレールに乗つていたと思われる生徒達が驚く。

「あはは、偶々現場に居合わせただけですよ」

「謙遜するな。あの後お前の応急処置を見た天野……お前達の先輩になるあの馬鹿兎が感心していたぞ」

「えつ？ そうなんですか」

最早 I.S 学園で兎と言えば彼が連想されるくらいには天野雪兎は有名なのだ……色々な意味で。

「ここからは何人かの自己紹介をダイジエストでお送りします。
赤刎栞よ。趣味は読書、特技はお菓子作りかな?」

黒縁アンダーリムのメガネをした黒髪で三つ編みおさげの委員長タイプの少女。
「天野紫音です。趣味は読書で、特技は……特にないです」

雪兎の義弟の紫音。

「天野マドカだ。趣味は音楽鑑賞、特技は戦闘と危険物処理だ」

同じく雪兎の義妹となつたマドカ。

「伊集院渚よ。趣味はアウトドアで、特技はサバイバルね」

アウトドアグッズメーカーの社長の娘の茶色に近い金髪のローツインテールの少女。
「出雲寺瑠華だよ。アイドルやつてました!」

日本の人気アイドルだったが、「普通の青春もしてみたい!」と I.S 適性があつた事からアイドル活動を休止して入学した水色のショートカットの少女。

「ユーリ!!エーベルヴァインです。趣味はガーデニング、特技はプログラミングです」
マテリアルズの癒やし枠のユーリ。

「我はデイアーチエ!!K!!クローディア。趣味は料理、特技は家事全般だ」

マテリアルズが筆頭のデイアーチエ。

「クロエ＝クロニクルです。趣味は料理、特技は並列演算処理です」

束から「くーちゃんも学校に行つてみたら?・友達増えるかもよ?」と言わされて入学したクロエ。

「五反田蘭です!・趣味はショッピングで、特技は料理です」

マドカの親友にして弾の妹の蘭。

「オニール＝コメットです」

「ファニール＝コメットよ」

双子で瑠華と同様アイドル活動を休止してまで飛び級入学してきたコメット姉妹。

「イ、イクス＝シアハートです……趣味は園芸で、特技は花言葉、かな?」

紫音の席をチラチラと見ながら自己紹介をするイクス。

「紫陽日向です!・趣味は運動とカラオケ、特技は」

「進藤レオンだ。趣味はゲーム!・特技は色々なバイトしてたから色々やれる事だな」
中学時代は苦学生だったレオン。

「サラ＝スカイフィールドです。趣味は動物と触れ合う事、特技は動物と仲良くなる事です」

3年の姉を追うように入学した青髪のふんわりした少女。

「シユテル＝スタークスです。趣味は読書、特技は精密作業になります
マテリアルズが参謀シユテル。

「イリス＝セブンフィールドよ。趣味はガーデニング、特技は機械関係ね
マテリアルズのニュービーのイリス。

「橘紗代子。趣味は日光浴、特技は機械整備よ」

日光浴が趣味とあつて日焼けした肌の快活そうに見えてインテリな少女。
「ルーク＝ファイルスです。趣味はサッカー、特技は乗馬かな」

ナターシャ＝ファイルスの弟のルーク。

「凰乱音よ！台湾の代表候補生として来たわ。趣味は料理、特技は武術よ」
鈴の従妹にあたる台湾の代表候補生の乱。

「エクシア＝ブランケットです。趣味はお料理、特技は紅茶を淹れる事だよ」

去年の年末に雪兔達に救われたチエルシーの妹のエクシア。

「僕はレヴィ＝ラツセル！趣味はお散歩！特技は暗算だよ」

マテリアルが一番槍のレビ。

「アリス＝ローズウェルよ。趣味はショッピングと実家の犬の世話、特技は乗馬とピア
ノよ」

最後はアメリカで近年急成長している複合企業ローズウェルの社長令嬢のアリス。

緋色の背中まで伸びるロングヘアの少女だ。

他にも生徒はいるが、長くなりそうなので他はまたの機会に紹介するとしよう。

「はい、皆さんがこれから一年を共に過ごす仲間です。仲良くしてくださいね」

最後の生徒が自己紹介を終えたところで真耶がそう言って締め、再び教壇に千冬が立つ。

「さてと、ここでお前達には話しておかなければならないことがある」

「話しておかなければならないこと?」

「そうだ進藤。だが、次から質問する際は挙手するように」

「はい！」

「よろしい……話しておかなければならないことというのは先程話した訳有りの生徒についてだ」

多くの生徒が首を傾げる中、千冬はその生徒の名を呼ぶ。

「天野紫音、天野マドカ、クロエ・クロニクル、前へ」

呼ばれて教壇の隣に立つたのは紫音、マドカ、クロエの三人。

「この三名だが、とある違法研究機関によつて作られたクローンもしくはデザイナーチルドレンだ」

「えつ？」

突然の言葉にそう呟いたのは誰であつただろうか。

「その違法研究機関そのものは既に解体済みで研究者も逮捕済みだ。だが、その被験体だつた三名の内二名は苗字からわかるようにあの馬鹿兎馬鹿兎 雪兔が身内として保護している。クロニクルも篠ノ之東が個人的に保護した娘だ」

そして追加で投下されたのは世間では下手に接触するべからずと言われる兎師弟が保護者という情報だつた。

「あ、訳有つて養子にしてもらつたつてそういう事か」

多くの生徒があまりの情報に啞然とする中、レオンの反応はアッサリしたものだつた。

「ほう、貴様はソレを聞いてもそれだけの反応か」

そんなレオンにマドカは面白いヤツを見つけたという顔をしてそう言う。

「だつて、生まれはどうあれ、紫音は紫音だろ？」

「ふふ、お前も兄さんのような事を言うのだな」

「レオン……」

「一度ダチになつたヤツにその程度で態度変えるかつての」

そこからはレオンの言葉に賛同するかのようにクラスメイト達は紫音達を受け入れた。

「良かつたね、マドカ」

「そうだな」

席に戻ったマドカを親友である蘭が嬉しそうに出迎える。

「と、ここで終わりであれば良かつたのだが……もう一つ教えておかねばならん事がある」

と、そこで千冬がやれやれといった表情でまだ話が終わっていない事を告げる。

「ま、まだ何かあるのですか？」

「まだそんなもののジャブにすぎん」

紫音達の生い立ちという中々の衝撃情報が前座でしかないという千冬に一同は戦慄する。

「クローディア、スタークス、ラッセル、エーベルヴァイン、セブンフィールド、前へ」
続いて呼ばれたのはマテリアルズの五人。

「この五名だが……頭が痛くなるような情報ではあるが、普通の人間ではない」

「はい、それって天野君みたいな作られた人間つて事ですか？」

「そうであればまだ良かつた」

「えつ？」

紗代子の問いに千冬は頭を抑えながら違うと言う。

「スタークス、すまんがお前が説明しろ」

「はい。私達はマスター…………天野雪兎が作り出した人工知能に骨格を強化して人間と
変わらぬ肉体を与えたハイブリッドヒューマノイド…………解りやすく言うのであれば
ホムンクルスという存在です」

「は?…………はあああ!?」

「これには以前からマテリアルズの事を知ってるメンバーを除く全員が目が点になる。
「肉体的には少し頑丈なくらいで貴様らと何ら変わりはない」

「ちゃんと食べたりもするよ」

「いや、そういう問題じやないでしょ！」

「これには堪らずアリスが声をあげる。

「ホムンクルスって…………ああ、姉さんが『気を強くもつのよ』って言っていたのはこう
いう意味だつたのか」

「やつべく…………僕、そんな人に目付けられたの?」

ルークもナターシャから言っていた事を思い出し、優斗はそんなマテリアルズの生
みの親である雪兎に注目されていると知つて苦笑である。

「あはは…………先輩、相変わらず過ぎますよ」

「話した感じはほとんど人間と同じでした」

日向は雪兎のめちゃくちやつぶりを思い出し、イクスは先程のユーリとイリスとの会話を思い出しても元は人工知能とは思えなかつた。

「更に言えばこの五名にはそれぞれ専用機が存在し、手足の如く扱える……性能は去年のキャノンボールを見た者ならわかるだろう」

「この子達は紫音君やマドカさん、そしてクロエさんの出自から良からぬ者に狙われないよう保護するという目的もあつてクラスに入つていますが、基本的に一生徒として扱いますので仲良くしてあげて下さいね？」

「この学園はどうなつてゐるのよお～!!」

そのアリスの叫びが訳を知らぬクラスメイト達の総意の叫びだつた。

3話 その頃の兎と再会

紫音達のクラスが阿鼻叫喚となつていた頃、雪兎達2年1組はというと……

「皆さん、一年よろしくね」

「よろしくね～」

今年の雪兎達の担任はナターシャ＝ファイルス、副担任は天野雪菜の一人であつた。

「新任なのにいきなりこのクラスだなんて……」

「大丈夫、このクラスを一年務められたらきっと他のクラスなんて大した事ないと思えるから」

「それはそうでしょうね」

「まあ、このクラス濃いからなあ

〔貴方が雪兎その筆頭でしきうが！」〕

天野姉弟に振り回されるナターシャに対し、一夏達はなるべく困らせないようにしようと誓つた。

HRが終わつてから雪兎達はいつものように集まつていた。

「今年は蘭や日向が入ってきたんだよな?」

「日向?」

「中学時代の俺達の後輩だよ。雪兎にめっちゃ懷いてた」「やめる、不用意にアイツの話するんじゃねえ!」

「雪兎がこんな反応するなんて珍しいね」

「まあ、あの娘はちょっと特殊だつたからね」

「特殊?」

「雪兎の妹になりたいっていうソウルシスターの筆頭だつた子よ」

「あ〜」

あまりにも的確な表現に一同は日向がどんな人物であるかを把握する。

「でも、それって紫音君が危なくない?」

「そこで聖がある事に気付く。」

「どうと?」

「いや、雪兎君の義弟でしょ?あの子。その紫音君と付き合つたら」

「やめろ、それ以上言うならちよびつとだけ想像しちまつたじやねえか!」

「そこまで苦手なんだ……」

「雪兎絡まなきや良い娘なんだけどなあ」

「ほんとそれよね」

中学時代をよく知る一夏と鈴は当時を思い出して苦笑する。

「そういや、鈴の従妹も入つてきただんだよな？」

「あく、乱のことね」

「蘭？」

「違う違う、凰乱音っていうんだけど身内は乱つて呼んでるのよ」

「じゃあランランだ♪」

「あつ、それあの娘には禁句だから」

「パンダみたってか？」

「そういう事よ。まあ、他にも禁句のテンプレは何個があるけど、それを言わなきや特に問題は無いはずよ」

「凰乱音………台湾の代表候補生で専用機は煌龍の量産機の先行試作型の【鋼竜】か
雪兎はいつものように端末を操作して乱の情報を表示する。

「甲龍に追加したパッケージのデータを使って元からあつた試作機をカスタムしたみたいだな」

「その試作機は甲龍・紫煙スイエイね」

「そんな試作機を回してもらえるなんて優秀なんだね」

「昔は私を『お姉ちゃんお姉ちゃん』つて追っかけてきたんだけどねえ」「私も知り合いが一人入りましたわ」

「イクスリーシアハートだろ？ オルコット家と繋がりのある貴族のお嬢さんの」「ええ、かつての私のように男性に偏見を持つていらない純粋な娘ですわ」「自分で言うのかよ」

「こう言つておきませんと後で何を言われるかわかりませんもの！」

「セシリア……」

「雪兎は誰か注目してる子はいる？」

「この赤城優斗つてやつかな」

「あく、ニルギースさんから報告があつた彼だね」

「さつき応急処置した車両を見てみたが、有り合わせの物でしつかり応急処置してあつて感心したよ」

「雪兎に注目されるなんてお氣の毒に」

「おい、それどういう意味だこら！」

そんなこんなで後輩達について話が盛り上がるのであつた。

＊＊＊

夜。 I.S 学園学生寮の一室。

マテリアルズ

「アハハハ、今日は色々驚かされたけど、アイツらの事が一番驚いたぜ」「それをそうやつて笑つて言える君は将来大物になりそうだよ、レオン」

「こ」は紫音とレオンが割り振られた寮室。そこに紫音、レオン、ルーク、優斗の四人が集まり話をしていた。

「それより明日はIS選びだろ？くう～楽しみだぜ！」

「これまで実技授業や訓練用に申請しないと使えなかつたISが学園在席中の全校生徒に貸し出されるんだろ？よくそれだけのISを確保出来たね」

「雪兎兄が各国に呼び掛けて技術と追加のISコア提供する代わりに量産機のガワだけを提供してもらえるように交渉したんだって」

「ガワだけ？」

「コアはまだ束さんや雪兎兄しか作れないから各国に配る用と学園に配備する分を一週間で作つてた」

「一週間つて……失踪する前はほんと手抜いてたんですね、篠ノ之博士……」

サラッとトンデモ無い情報が飛び出しても既に三人は受け止められるくらいには悟つてしまつていた。

すると、コンコンコンと部屋をノックする音が聞こえた。

「はい」

「紫音、シユテルです。ちよつといいでしようか？」

「シユテル？」

「こんな時間に訪ねてくるのは珍しいと思いつつも紫音がドアを開けるとそこにはシユテル、ユーリ、イリスの三人の他にイクスの姿があった。

「あれ？君は確かイクスさんだっけ？」

「は、はい！」

「イクスさんが紫音さんにお話があるそうで」

「それで私達が仲介したってことよ」

緊張するイクスに代わりユーリとイリスが事情を説明する。

「そつか……でも、話すのは入試の時以来だよね？」

「お、覚えててくれたんですか!?」

「まあ、あんな出会い方して忘れる方が無理だと思うよ。それにイクスさん可愛いし」「か、かわ…………」

「おやおや？入学早々青春してんなあ、紫音」

そこに部屋の中にいたレオン達もやってきた。

「はう…………」

「イクスさん頑張つて下さい」

「は、はい……その！あの時はプローチを拾つて下さつてありがとうございました！」

「あの時のお礼をキチンと言えてなかつたのが心残りだつたので！」

「そうだつたんだ……なら、どういたしまして」

頑張つてお礼を告げたイクスにそう言つて微笑む紫音。するとイクスは顔を赤面させてしまう。

「(こりやオチたな)」

「(完全に無自覚だね)」

「(青春だね)」

そんなイクスを見てレオン達は色々と察し、シユテル達も「やらかしあつた」という顔をしていた。

「で、では！私はここで！」

そしてイクスはぎこちなく回れ右をするとそそくさと自分の部屋へと駆けていった。

「どうしたんだろ？」

「前途多難だな、あの子……」

レオンのその言葉に紫音を除く一同はウンウンと頷くのであつた。

4話 オリエンテーション～兎参上～

多少のトラブルはあつたものの、無事に入学式を終えた翌日。

1年 α 組は実技実習の前に多くのISが置かれた格納庫へとやつてきた。

「今日はお前達に在学中のパートナーとなるISを選んでもらう」

これはISコアが増産可能となつた事で実現した在学中の専用機持ち以外もISを常備出来るという新たな試み。

これは今までの実習用のISしかなく、使用申請をしても必ず使える訳ではなく、自主練習等の機会が大幅に減つてしまつていていた事に対する是正処置で、各国にもこれによる人材の育成充実を理由に各国への追加ISコア配布等も行つてはいる押し通したもので、提案者は今やISコアの製造が可能な二人目の人物となつた例雪兎である。

この試みにはいくつかの実験的要素を含んでおり、一つは男子操者達とISコアのリンク時間を増やす事でコアネットワーク上での男子への適合を促進する事。二つ目は先も説明したように各個人にISを持たせる事での訓練時間の改善。三つ目は少し前に起きた平行世界からの介入や去年度に何度も起きたIS学園への攻撃、これに対する生徒達自身の自衛能力の向上。四つ目として各国からの代表候補生以外の優秀な人材

の早期発掘の為のデータ収集。他にも細かな理由はいくつもあるが、これらの理由から兎達が多方面に呼び掛けを行つて実現したのだ。

「事前に各国から寄せられた“次世代量産機”的カタログスペックは見ていたと思う。そこからそれぞれ三年間を共に過ごすものを選べ。間違つても『お友達と同じだから』等のくだらん理由で選ぶんじゃないぞ」

「この子達を用意してくれた人が言うには『きっと触れた時にこの子だ、つてくるISが見つかる』そうですよ」

並んでいるのは日本産ほぼ雪兎製の鋼にフランスのリヴィアイヴⅡ、イギリスからはBTシリーズのデータから作られた量産試作機のブルー・アクシスに、ドイツからは同じくシユヴァルツエア・レーゲンの稼働データと兎由来の技術から作られた試作機のハイゼ、中国からは鋼竜の正式量産バージョンの鉄竜、アメリカからはファングクエイクのマイナーチェンジによるバリエーション機のインパルスイーグル、イタリアからもロツソ・アクイラとテンペスタのデータから開発されたヴエルデ・グリフォーネ、今年の選抜に合格したこれらのISだ。

「カタログでは見てはいたけど、ほんとに各国の最新の量産機ばかりだね」

「例年は型落ちの打鉄やリヴィアイヴ、しかも数に限りがあつたと考えると、ほんとに今年は色々特別なのね」

それらの実機のISを見て生徒達は圧倒されつつも、それぞれお目当ての機体へと散っていく。

「この様子を見ると専用機が与えられるって言うのも少し考えものに感じるよ」

「確かに……でも、私のはそこの鉄竜の先行量産型だからあまり変わらないわね」一方でルークや乱といった既に専用機を与えられているメンバーは特にやる事が無かつた。

フッケバイン

「私は兄さんから貰つたコイツで満足しているからな」

「私の風舞も前のからアップデートしてあるって言つてたなあ」

蘭が持つ風舞は以前異世界に跳ばされた際に護身用として持たされていたISの改修型で、戻ってきた際に一度返還していたのだが、IS学園に入学するという事で再び入学祝いとして貰つたものだ。

「私も雪兎お兄さんから専用機を貰いました！」

エクシアはコアが肉体と融合してしまっているという特殊な事例の為、雪兎からカリバーンと名付けられた外装を与えられており、それを融合しているコアに取り込ませた形だ。

他にもマテリアルズの五人やコメット姉妹、クロエ、そして紫音が専用機持ちとなるのだが、紫音はまだ専用機を受け取つていなかつた。

「雪兎兄は入学したら渡すつて言つてたけど……」

あの雪兎の事なのでまだ完成していないという事は無いのだろうが、どのような形で受け渡しをするのか紫音は全く聞いていなかつた。

多くの生徒がＩＳを選び終えた頃、格納庫の扉が開いて一人の生徒が入つてくる。

それはこの学園でおそらく生徒会長より知名度と権限を持つであろう男……天野

雪兎だつた。

「よつ、紫音。待たせたな」

「雪兎兄！」

「悪かつたな、少しHRが長引いちまつてな」

そう言つて紫音の所へやつてきた雪兎に高速で迫る影があつた。

「先輩！お久しぶりでござつーー」

「日向、いきなり飛びかかつてくるなつて前にも言つたよな？」

その影こと日向の頭をアイアンクローデガツチリと掴む雪兎の様は何時だつたか、某兎^東_{千冬}に対してその親友^{千冬}がやつたそれに酷似していた。

「あく、この懷かしき手の感触…………」

「そこで恍惚とした顔するな！バカ日向！」

この時、その一部始終を見ていた生徒達は日向の知りたくもなかつた本性を知る事と

なつた。

「天野、紫陽の事はこちらに任せて用を済ませろ」

「お願ひします、織斑先生」

「さあ来い、紫陽」

「あつ、先輩!？そんな御無体な!？あゝ!？」

そして、日向は雪兎から千冬へと手渡され、そのまま襟首を掴まれて引き擦られていった。

「さて、仕切り直して……初めましての顔もいるが、俺が天野雪兎だ。今後はこのクラスとも色々関わっていくと思うからよろしく頼む」

日向の突然の変貌と雪兎の登場にしばらく麻痺していた1年α組だったが直ぐに元に戻り、雪兎に頭を下げる。

「さて、紫音の専用機だが、大体のデータは先行入力済みだからあとはファイツティングくらいだ」

「そうなんだ」

「で、これがその専用機……エクストリームだ」

「これが、僕の専用機……」

そう言つて空いてるハンガーに雪兎はそのISを呼び出した。

全体的には白い装甲を持ち、部分的な装甲が薄紫色をしており、一部紫の水晶体のようなパートもある。

見た目は非常にシンプルで四肢と簡易的なバツクパック、そして装備はソードライフルと思われる武器とシールドだけ。

雪兔にしては珍しい簡素と言つていいデザインである。

「もしかして、コイツも他のみたいに装甲切換タイプなのか？」

そこへ自身のＩＳを選び終えたレオンが戻つて来て呟いた。

「ご明察だ、そこの後輩君。とはいって、コイツは少し特殊でな」

「どういと？」

「今のコイツには対応する換装装備はねえんだ」

「えっ!?」

「それは未完成なのではないのか？多くの生徒がそう思う中、雪兔は続けてこう告げた。

「コイツは乗り手の成長に合わせて装備を生み出し、それを更新していく。ありとあらゆる可能性を秘めた機体……その果てに極限に至るつてコンセプトでな」

「それでエクストリームと……」

「そういう事だ」

乗り手に応じて常に成長するIS。既存の2次移行等の段階をおいた進化ではなく、紅椿のような無段階移行に近いシステムで、まだ白紙と言つてい紫音にはある意味でピツタリな機体と言えた。

「ファイットティングはほぼ自動でやつてくれるから着けてからしばらくジッとしてな」

「うん」

そう言つて紫音にエクストリームを装着させてオートファイットティングプログラムを走らせると既に雪兎にはやる事がなくなつてしまつた。

「さて、やる事も済んだし、次の準備もあるから戻るとするかねえ」と、雪兎が格納庫を去ろうとした時だつた。

「あ、あのっ！少々よろしいでしようか？」

アリスが雪兎に声を掛けて呼び止めた。

「うん？君は…………あ、ローズウエルのとつさんのとこのアリス＝ローズウエルだけか？そういうや娘が今年から世話になるって言つてたな」

「ち、父をご存知で!?」

「まあ、聖剣事変の前から色々と支援をしてくれてたアメリカでも珍しい企業だつたからな」

「父は目先ではなく、時勢をよく見て行動しろとよく言つていましたから」

アリスの父・アラン＝ローズウエルはそういう良き眼を持つ実業家で、雪兎も何度か直接話した事のあるくらいには親しくしている人物だ。

「で、俺に何か？」

「そ、そうでした！ 少しお伺いしたい事がありまして！」

そう言つてアリスが取り出したのはとあるリストの表示されたタブレット端末だった。

それに表示されているのは量産機の選考からは外れてしまったものの、来年以降の選考に選ばれるべく武器や各種オプション等を各国の企業から送られてきており、その中から学園関係者が厳選したもののがオプションカタログである。

「実はインパルスイーグルを選ぼうと思っているのですが、そのインパルスイーグルの装備に無いオプションを探していくまして」

「ほう」

詳しく聞くと、アリスは自国の機体であるインパルスイーグルを選んだのだが、自身の戦闘スタイルに合う装備が無く、オプションカタログからそれを探していたのだが、どれもしつくりくるものが無いのだという。

それを聞いてこのIS馬鹿は食いついてしまった。

この男、よく一点物の専用機を作っている為、そういう機体にしか興味が無いと勘違

いされているが、実は既存の量産機を自身好みにカスタマイズするのも大好きだつたりするのだ。

「種類は何だ？」

「両手剣……出来ればグレイトソードを」

「ほうほう、グレイトソードか……確かにアレは癖が強いって理由で外されてたな。鉄竜が採用された関係で青竜刀タイプならあつたが」

「念の為にそちらも試してみたのですが、やはり両刃の大剣の方が……」

女性にしては珍しいタイプの武装を所望するアリスを雪兎はこの段階で割と気に入っていた。なので、そんなアリスに雪兎はタブレット端末を操作してカタログには無かつた武器を数点表示して見せた。

「この中にピンとくるやつはあるか？」

それは雪兎が個人的に面白いと試作品を取り寄せたり、訳有りで雪兎の元に流れてきた類いの武器であつた。

雪兎からタブレット端末をひつたくるように受け取つたアリスはそのリストに記載されているデータを読み漁る。

そして、一つの武器の画面を開いて手を止めた。

「ほう、そいつに目を付けたか……その眼は親父さん譲りのようだな？」

そこに表示されていたのはISの全長と同じ長さを持つ幅広のグレイトソードで、専用のバックパックにマウントする事でウイングブースターへと変形するマドカのフツケバインの「レーヴアテイン」のデータを元に開発された大剣【ストームブレイカー】という雪兔の技術提供でイギリスで製造されたものだつた。

「これです！私が探していたのはこういう剣なんですよ！」

「山田先生～、ちょっとカタログからは外れるけど、これ渡してもいいですか」

「えつ？この大剣ですか？」

「どうもこの娘、しつくりくる武器が無いって言うんで、選考落ちしたやつから条件に合
いそなのを見繕つてみたんですけど」

「ジョイントの規格は統一規格なので何とかなりますが……かなり癖のある装備な
で扱いには苦労するかと思いますが、ローズウエルさん、構いませんか？」

「はい！」

「なら現物はここに出しておくぞ」

そういうと雪兔は空いている整備用のハンガーに【ストームブレイカー】とその専用
バックパックを展開する。

「扱い方はマドカに聞け。アイツもその元になつた武器を持つてるから基本的な扱い
は教えられるはずだ」

「わかりました」

「さて、一部の生徒だけ特別扱いするのもあれだし、他にも少しIS選びを手伝つてやることするかね」

その後も雪兎は数名の悩んでいる生徒にアドバイスをしてから紫音のフイツテイング完了を見届けた後「この後の準備があるので俺はこれで」と選考落ちした装備等の詰まつたstorageを真耶に預けて格納庫を後にした。

尚、千冬のO H A N A S H I から戻つた日向がそれを知つて更に絶望する事になる。
「何かすげー人だつたな、あの雪兎つて先輩」

「俺、さつきあの人には『また時間空いたら呼ぶからよろしく』って言われたんだけど」「あはははは……多分悪いようにはされないはずだから」

この時、彼ら1年α組はまだ知らなかつた。雪兎が言う「この後の準備」が自分達に関係があるのであるのだと。

5話 兎の皮を被つた災害（ラビット・ディザスター）

全員の機体が選び終わったところで、千冬と真耶は全員に I S スーツに着替えて 0 番アリーナに集合するよう伝えられた。

0 番アリーナとは、昨年度末に建造された A R 技術を使った特殊アリーナの事で、設定を変更すれば如何なる運用も可能なアリーナで、他のクラスも同じく選んだ I S の慣らし運転を行うという事で α 組はこの 0 番アリーナを割り振られたのだ。

まあ、今回は慣らし運転の為に通常のアリーナと同じ設定にされている。

そこへアリーナの更衣室で着替えた α 組の生徒が I S スーツで整列する。

「さて、これからお前達には順番に I S に搭乗して慣れて貰う訳だが、その前に今年から導入されるカリキュラムの一について説明しなくてはならない」

新しいカリキュラム。入学式で権無が告げていた新たな試みの一つ。それは全生徒が I S を常備するだけではない。

「今日はお前達以外にも関係するカリキュラムでな……入つてこい！」

千冬がそう告げると上空から一機の純白の I S が飛来してきた。それは急降下でありながら地面レスレでピタリと停止しており、その技量を示している。

だが、 α 組の生徒からしたらそんなことは問題ではなく、そのISの搭乗者こそが問題だつた。

「よつ、さつき振りだな、 α 組の諸君」

それは先程IS選びのアドバイスをしてくれた先輩である雪兎だつたからだ。

「今回のカリキュラムは言つてしまえば上級生による指導実習だ」

これは2年生以上で一定の技量を認められた生徒が後輩への指導を行うというカリキュラムで、 α 組の指導担当に選ばれたのが雪兎他数名。今回は初回という事で雪兎だけがやつてきたという訳だ。

「天野、今回の内容はお前に一任するが……あまりやらかすなよ?」

「わかつてますつて」

「という事で突然始まつた雪兎の指導。その初回の内容は……」

「さて、全体への指導の前に少しだけやつておきたい事がある」

「やつておきたい事?」

「ルークIIファイルスと凰乱音、ちょっとIS展開してみろ」

そう言われ、ルークと乱はそれぞれ専用機を展開する。

ルークの専用機はシルバリオ・ファング。名前からお察しの通りシルバリオ・ゴスペルのアメリカ側の開発スタッフが作り上げた全身装甲フルスキンに近いISだ。

一方で乱の専用機は鋼竜。鉄竜の先行試作型で尻尾のようなサブアーム兼スラスターを持つ機体だ。

「展開したけど、一体何をさせようつての？」

いきなりISを展開させられて何をさせるつもりなのかと乱が問うと、雪兎は自身の専用機である雪華にある装備を展開する。

それは進級するにあたって増えたパック類を一度整理しアップデートを施した事で再誕した旧【T・トライアル】に当たる新パック【TR・トライアル R^{リメイク}】という。見た目はトライアルと同じくエッジ付きのシールドとソードライフルというシンプルな構成ながらスラスター配置や装甲のデザイン等を変更した純白の装備だ。

先程までの非武装形態からこの形態へ移行したという事は……

「お前達二人には俺と模擬戦をしてもらう。国で一通りの操縦は習つたんだからやれるな？」

「2対1ですか？」

「ああ、それと俺はこのパックしか使わない」

「随分と上から目線じゃない！」

憧れの人物からのハンデキヤップの提案にルークは困惑し、乱は舐められてたまるかと闘志を燃やす。

「他の子らはとりあえず見てな。ついてこい」

そう言つて雪兎が浮上すると、ルークと乱もそれを追つてアリーナの上空へと向かう。

「なあ、紫音」

「何?」

「お前の兄貴つて強いのは知つてゐるんだが、あの二人相手に勝てんのか?」

レオンは去年度の年度末トーナメントの戦闘を映像で見た事があるので1対1の戦闘なら雪兎があの二人に負けつこないのは知つてゐる。

しかし、雪兎の真骨頂と言える装甲切換無しにあのシンプルな装備での二人を相手出来るのかは疑問であつた。

が、そんな疑問に対し紫音の回答はあつさりとしたものだつた。

「目を離さない方がいいよ、多分すぐに終わると思うから」

紫音は知つてゐる。雪兎が時々いつもの特訓メンバー相手に2対1で相手しているという事を。

「鈴はアレコレ言つてたけど、この最新機相手にそんな貧弱な装備で勝てるなんて思わない事ね!」

「待つて!」

鈴への憧れと対抗意識を持つ乱は青竜刀を手にし、オプション装備の一つである近接戦闘パック・雷爪でルークの制止を無視して雪兎に斬りかかる。

「奥せず向かつてきたは良し、でもまだまだ甘い」

しかし、雪兎は迫る青竜刀を最低限度の動きで右に避け、その青竜刀の側面をエッジシールドで殴る事で乱の態勢を崩し、そこへいつの間にかチャージしていたソードライフルのチャージショットを叩き込む。

「うわあ!?」

「乱音さん！」

「おいおい、余所見はいかんぞ？」

「しまつ」

チャージショットで弾き飛ばされた乱にルークが意識を向けたその一瞬でルークとの距離を詰めていた雪兎の蹴りがその腹部を捉え、ルークも乱と同じように弾き飛ばされてしまう。

「…………めっちゃ強くね？お前の兄貴」

「あれでもまだマシな方だよ？いつもだつたら弾き飛ばす方向を同じにして二人まとめて弾幕の追い打ちくらい普通にするし」

「マジ？」

そうこうしている間に復帰した乱とルークが2方向から同時に仕掛けるも、ソードラ
イフルとエッジシールドで容易くあしらわれ焦つた乱が龍砲をルークに F → F させ
られてしまう。

そこを追撃してルークを撃墜判定にすると、完全にパニック状態となつた乱にトドメ
を刺し、二人は雪兔に一撃も食らわせる事が出来ずに模擬戦は終了となつた。

「う、マスターだけ楽しそう！」

「レヴィ、また機会はありますよ」

あの模擬戦を見てほとんどの生徒が絶句している中、レヴィは羨ましいとばかりに拗
ねており、それをユーリが宥めている。

また少し離れた場所ではキヤーキヤーと黄色い声をあげる日向がいた。

「…………あれが兎の皮ラビット・ディザスターを被つた災害」

誰かがポツリと呟いたその言葉で α 組の生徒は改めて天野雪兔という人物の規格外
さを思い知るのであつた。

6話 実習と呼び出し

ルークと乱が戦闘不能となつた事で模擬戦は終わり、雪兎も地上へと戻ってきた。

「まあ、こんなもんか」

改めてその実力を見せつけた雪兎は多くの生徒は絶句している。

「…………あんな、大口叩いたのに…………」

一方、乱は自身の不甲斐ない戦いを思い返して落ち込んでいる。

「さて、とりあえず模擬戦を見てもらつたが、専用機持ちって言つても油断したらこうなる。去年も専用機持ち二人がそこの山田先生にボツコボコにされてたから誰でも通る道だと思つてくれ」

これを聞いて真耶の事を少し甜めていた一部に生徒は気をつけようと心に誓う。

「つと、じゃあファイットティングは済ませてるだろうから今日はI-Sの展開とオプションの展開をやろうか……凰、いつまでも拗ねてないで列に並び直せ」

「うつ」

「早くしねえとこれからはランランと呼ぶぞ」

「ちよつ!? それだけはやめて〜!!」

そこからはやはり技術者と言うべきか、雪兎の教え方は上手く展開に手間取っていた生徒達の多くが一秒以内で展開を出来るようになつていった。

「うんうん、今年の1年は優秀だな」

その言葉に安堵するα組だったが……

「なら次回は飛行動作と今回の復習するからちゃんと自主練しとけよ」

その分ハードルが上がりげんなりするのであつた。

昼休み。

「疲れた……」

「展開の繰り返しだから肉体的な疲れはないけど、その分脳を酷使した感覚だね」

「僕は肉体的にもボロボロだけどね」

「あはは…………雪兎兄はこういうのスバルタだから」

「さて、飯の時間だが、皆で食堂行こうぜ！」

先程の実習でヘトヘトとなつた紫音達はとりあえず昼休みという事で昼食にしようと食堂へ移動しようとしたのだが…………

「お前達、ちょっといいか？」

それ对待つたを掛けたのはディアーチエであつた。

「ん? 何だよ」

「今から昼食なのであろう? ならば我らと一緒に来い。マスター達からの呼び出しだ

「えつ?」

「あく、そういう事か」

雪兎からの呼び出しどとあつて顔が引き攣る三人だが、紫音はその意図を把握したよう
であるほどと頷く。

「紫音、大丈夫なのか?」

「うん、雪兎兄達はよくお昼はお弁当を持参して集まつて食べてるんだ。多分、今回は皆
の歓迎会みたいなものじやないかな?」

「流石は紫音、察しがいいな。マスター達がお前達や関係者を集めて食事がしたいとい
うのでな。我也腕を振るつたのよ!」

「紫音、クローディアって料理上手いのか?」

「学園でもトップ3に入るんじやないかな? 残りの二人は雪兎兄と一夏兄だけど

「あの人、料理まで出来るとかスペックバグつてね?」

「他にもシャル姉や箬姉、鈴姉も上手いよ」

「そうなの? ……といふか、紫音つて先輩達を○○兄や○○姉と呼ぶんだな?」

「僕の出自が出自だからね。助けてもらつてからずつと雪兎兄達にはホントの弟みたい

にお世話になつてゐるから」

「なるほど」

「ていうか、もしかしてだけど……その食事会、俗に言う兎一味勢揃い?」

「えつ?」

優斗の言葉にレオンとルークが固まる。無理も無い、今や各方面で有名となりつつある兎一味御一行の呼び出しどなれば誰でもこうなる。

「シユテル達には他の招待者を呼びに言つてもらつておる。それに変に硬くならんでも今はただの食事会だ。とつて食われやせん」

「ディアーチエ、他には誰が呼ばれてるの?」

「うむ、元より関係者のマドカとクロエは除くとして、確かコメット姉妹に蘭、ブランケットとシアハートに乱音、あとはローズウェルの娘であろう」

「なるほど」

イクスはセシリ亞の知り合いで、乱音も鈴の従妹、アリスは雪兎が彼女の父親の知り合いだから呼ばれたのであろうと紫音は推測する。

「さて、早くせねば昼休みも有限だ。移動するぞ」

「お、おう」

「とりあえず覚悟はしておこうか」

「怖いけど、興味深いから行つてみよう」

「大丈夫、セシリ亞姉の創作料理さえ手を出さなきや」

「それ、移動中に詳しく」

他の招待者は既に移動を開始しているとの事なので紫音達も移動する事にした。

7話 食事会

ディアーチエの案内で紫音達が屋上を訪れると既に他のメンバーは集まっているようであった。

「おし、皆揃つたな」

「皆、それぞれシートに名前が書いてあるからそこに座つてね」

「始まつたら移動してもいいからまずはそこに座つてくれ」

シャルロットの言う通り、屋上に敷かれたいくつかのシートには名前が書かれたシートが貼られており、紫音達はそれに従つてシートに腰掛ける。

「昼だからそこまで凝つた物はねえが、好きに食べてくれ」

「足りなくなつたまだstorageに入つてるから遠慮なく言つてくれ」

それぞれのシートにはサンドイッチやおにぎりに巻き寿司、唐揚げやフライドチキンにコロッケやメンチカツ等の揚げ物、彩りとしてレタスやプチトマトが盛り付けられた大皿が置かれている。

「飲み物は行き渡つたな？ そんじや、いただきます」

「いただきます」

こうして食事会は始まつた。

「美味つ!? 何これ!?

「これが噂に聞く先輩達の料理……」

「…………これ、下手したら一流シェフすら上回りますわよ」

料理は概ね好評なようで、特に初めて雪兎らの料理を食べた一部の者は啞然としている。

シートはこのようなグループに分かれている。

①雪兎、シャルロット、ラウラ、エリカ、カロリナ、マドカ、クロエ、ユーリ、イス、蘭、優斗、アリス

②一夏、筈、簪、本音、ロラン、紫音、revi、シユテル、乱、オニール、ファニー

ル

③セシリ亞、鈴、聖、楯無、晶、アレシア、デイアーチエ、レオン、ルーク、イクス、エクシア

「よつ、堪能してくれているようで何よりだ」

まずは同じシートの優斗とアリスに声を掛ける雪兎。

「ど、ども」

「御招待感謝しますわ。それと、先日はありがとうございます」

「気にするな、あれは何れ誰かにテストしてもらいたかったからな。アリス嬢のおかげで他の組にもあの装備達を使つてもらえる事になつてな」

感謝するのはこつちの方だ、と告げる雪兎にアリスはホッと息をつく。

「で、こうやつてゆつくり話すのは初めてだな、赤城優斗」

「は、はい！」

「…………別に取つて食おうつてんじやないから」

「赤城君震えちゃつてるね」

そこへやつてきたのはシャルロット。

どうやら様子を見かねてフォローに来たようだ。

「怖がらせるつもりはねえんだけどなあ…………今までのやらかしが原因かね？」

「やらかしてる自覚はあつたんだ？」

「流石にな」

「すみません、色々と聞いてたイメージがあつて」

「そんなやつからいきなり声掛けられたらビビるわなあ」

これまでのやらかしがここで響いてくるとは思つてなかつた雪兎。

若干凹んでいる。

「…………師匠、凹んでる？」

そんな雪兎を見てカロリナもやつてきた。

「彼が赤城優斗？」

「お、おう……」

「私はカロリナ＝ゼンナーシュタット、よろしく」

「よ、よろしくお願ひします」

「モノレール直したって聞いた」

「いや、応急処置しただけで」

「師匠とその応急処置を見たけど、私達だとあんな処置は思いつかない」

「そなんですか？」

「私や師匠だとstorageから必要な機材出して直しちゃうから」

「あ～」

カロリナの独特な喋りに優斗も緊張が解けたのか自然と喋っていた。

「そなんじゃなあ……最近はそのせいか発想がパターン化しちまつてな」

「だから新しい発想を持つてる優斗を勧誘しようと思つた」

「勧誘？」

「ああ、部活とかとは別で有志で活動してゐる技術向上研究会にだ」

技術向上研究会とは雪兎や簪、本音にカロリナ等が所属するISを中心とする技術の

向上を研究する研究会だ。

「ほう、研究会！」

その研究会という響きに優斗は心惹かれる。

「この前呼ぶつて言つてたのも、この研究会に呼ばうと思つてたんだ」

「あつ、そだつたんですね！」

「彼も雪兎達と同じタイプかあ」

研究会の事を聞いて雪兎とも普通に話せるようになつたのを見てシャルロットは優斗を雪兎達の同類と認識する。

「……私、場違い感全開なんんですけど」

一方、乱は仲の良い知り合いのいないシートになつてしまつたがために少し居心地が悪そうである。

「凰さん、大丈夫？」

「別にいいわよ、私に何て気を使わないでも」

心配して乱に話し掛けた紫音に素つ氣無い態度を示しつつ、乱は鈴の方を見ていた。

「ご無沙汰しております、セシリ亞お姉様

「元気そうですね、イクス」

「……お姉様つて、プブ」

「鈴さん、何故笑うのですか！」

「いや、だつてさ、セシリ亞がお姉様つて……」

「私だつて本国では立場ある振る舞いというのがですね！」

その鈴はセシリ亞をからかつて戯れている。

「まるで大好きな姉を取られた妹ですね」

「はっ!? そんな訛無いじやない！」

そんな乱を見てシユテルがそう呟くと、乱は必死になつてそれを否定する。

「顔真つ赤にして言つても説得力0だよね」

「レビイ、それと言つたら可哀想だよ」

「うわあくん！」

レビイにトドメを刺されて泣き出してしまつた乱を騒ぎを聞きつけた鈴が宥め、若干幼児退行した乱に皆がホツコリしたとかしないとか……

8話 亡命少女

S i d e フエルト

私はフェルト＝ペイズリー。

訳有つて I S 学園 1 年 β 組に所属している美少女である。

自分で美少女って言うと何だか自意識過剰っぽいけど美少女なのは本当なので美少女です。

と、そんな事はどうでもよくて……

私が I S 学園にいるのはとある理由で学園に保護されているからだ。
とある理由とは、私が『元』亡国機業の工作員ファンタム・タスクだつたから。

私は元々は棄児で、色々あつて拾われた亡国機業に工作員として育てられていた。

そうしないと生きていけなかつた為、組織に捨てられないよう様々な技能を身につけ、とある幹部の配下として活動していた……去年のクリスマスに起きた聖剣事変までは。

あの聖剣事変で私の上司だったレグルスことシルヴィア＝メルクーリを始めとした【闇夜の星座】ゾディアック・ノワールの幹部達は全員逮捕され、その配下だつた私達工作員も芋蔓式の捕まつ

た。

その際、私は私が知り得る全ての情報と引き換えに司法取引をし、未成年だった事や私にIS適性が有つたのを理由にIS学園に監視を兼ねて入学させられる事となつた。監視の為に位置情報を発信するナノマシンを投与されたり、やけにオシャレな外見をした監視用のISを首輪として着けられはしたが、それ以外は特に行動の制限等も無く、一学生として扱われている。

というか、いくら監視されてるとはい、ISまで持たせられているのはどうかとも最初は思ったのだが、用意されたISであるヴエルデ・グリフォーネに細工を施したのがあの【兎の皮を被った災害】と知つて絶句した。

【兎の皮を被つた災害】こと天野雪兎と言えば亡国機業をこれまで散々返り討ちにしてきたあの男である。

その監視下に置かれていると知つて私は直ぐに色々な事を諦めた。

そもそも組織に帰るつもりも無い私からしたら彼の保護下にあるのは決して悪い事ではない。

というか、滅ぼしてくれないかな？亡国機業。

「フェルト、どうかしたの？」

「何でもないよ、キヤロル」

ル。

そんな事を考えていた私を心配そうな顔で見つめるこの娘はキヤロル＝クロコディ

シリア軍に所属するシリアの代表候補生で私のルームメイトなのだが、戦闘はともか

く私生活がボヤボヤしていて放つておけない娘なのだ。

「それよりまた寝癖ついてる」

「ん、お願ひ」

「はいはい、ここ座つて」

寝癖を直した後、二人で教室に入るとクラスメイトから「おはよー」と挨拶をされる。

「今日も手繋ぎ登校だなんて仲良しですなあ」

「うんうん、今日もオカンしてるわね」

「美乃里！此花！」

キヤロルは過去に目の辺りに怪我をしたせいか弱視で、他の感覚は優れているのだが、ISを開いていないと教室の中央から黒板を見るのも苦労するらしい。その為、私が日常生活のフォローをしているのだが……それをクラスメイトで友人となつた白浜美乃里と柏木此花にからかわれる。

「おはよう、ミノリちゃん、コノハちゃん」

「おっは〜」

「フェルキヤロ、おは〜」

二人とは座席が傍であつたことから仲良くなつた。

最初は首輪付きとあつて怖がられるかと思つたのだが、隣になつたキヤロルが放つておけなかつたから面倒を見ていたら温かい眼で見られるようになり、気が付けばキヤロルの保護者のような扱いに納まつていた。

「そういえば聞いた? チームトーナメントの事」

「今年からクラス代表トーナメントが廃止になつたんだつけ?」

何でも今年からクラス代表によるトーナメントが廃止になつたらしい。

理由はクラスの編成で専用機持ちが偏つたりISに乗り慣れていない生徒がいるこの時期にやつてもあまり意味が無いのでは? という意見が出たからだそうだ。

言われてみればなるほどと思った。代表候補生なんて入学前からISに乗り慣れた士官候補生のようなもの。そんなエリート相手にISに乗つて一ヶ月にも満たない生徒ではただのワンサイドゲームである。そんなのいくら優勝景品が良くとも意欲的な訳が無い。

それに対して今年発表されたのは学年毎に五人ずつのチームを作り、そのチーム対抗トーナメントという方式となつた。

ただ、1年生は代表候補生はチームに一人という制限があり、中々に公平なルールだ

と思う。

「そのトーナメント、私達でチーム組まない？」

「早速私とキヤロルを抱き込むつもりね？けど、あと一人いるわよ？」

「それは真白に頼んであるわ」

真白というのは同じクラスの美乃里と此花の幼馴染の久川真白ひさかわましろの事で、大人しめの小

柄な少女だ。

「手が早いわね」

「こういうのは早めにチーム決めておいて連携とか練習しておいた方がいいでしょ？」

「そうね……キヤロルはどう？」

「フェルトがいいなら」

「なら決まりね」

「やつた！」

こうして私達はチームを結成して放課後に練習をする事にしたのであつた。

S i d e o u t

9話 学年別チームトーナメント

「今日は今月末に行われる学年別チームトーナメントのチーム決めを行つてもらう」

「学年別チームトーナメント?」

その日のH.R.にて担任の千冬から告げられた内容に多くの生徒が首を傾げる。

「はい」

「何だ、赤列」

「例年ならこの時期はクラス代表トーナメントだったのでは?」

「ああ、その事か……実は新年度のカリキュラムを決める際にあの兎が『国である程度訓練した専用機持ちの代表候補生と一般入試した量産機に乗りたての素人が戦つてもちゃんと勝負になんねえだろうに』と、口を挟んできてな。なら代案はあるのかと聞いたらその言葉を待っていたとばかりにプレゼンしていく企画が今回のチームトーナメントだ」

そう言つて額を押さえる千冬に一同は「ああ、またあの兎先輩か」と納得する。

「奴の言う事も最もではあるし、代案もルール的に不備は無いが……その後も束と揃つて挺入れと称して色々口出しってきてな」

「「ゞ」愁傷様です」

兎師弟

元世界最強ですら手に負えない問題児の行動に1年 α 組の生徒達はそう告げる他なかつた。

「そんな訳で今年からはチームトーナメントに変わったという訳です」「なるほど」

最後に真耶がそう締めると栞は納得する。

「チームは五人一組が原則で、1クラス最低2チーム、最大8チームのエントリーが許可されている」

「全員参加では無いんですね？」

「チーム編成時にどうしても合わないメンバーが出る可能性や裏方に回りたいという生徒に考慮した結果だそうだ。つまり、クラスでよりすぐりを集めた2チームでも全員が経験を得る為に8チームでも良いという事だ」

「ただ、編成条件として“代表候補生”は1チームに一人までだそうです」

「「うわあ…………」」

「ここで感の良い α 組の生徒達は気付いてしまった……このクラスには“代表候補生”ではないイレギュラーレベルの生徒が複数人いることに。」

「よし、僕達ダークマテリアルズでチーム組もう！」

「クハハハハ！ルールには抵触しておらんからな！」

「皆様の良き壁となれるよう務めさせていただきます」

「イリスも一緒ですよ？」

「はいはい、そんな事だろうと思つたわよ」

「（これ、絶対に兎先輩がワザとルールに穴作つたよね!？）」
レヴィ、ディアーチエ、シユテル、ユーリ、イリスのダークマテリアルズの五人がチームで参加とかいう他の参加チーム涙目な事態に。

「となると、僕と凰さんは別のチームにしないといけないのか」

「男子だけで固まるのは不味そудし、かといって4チームに分かれようにも連携が心配だし、2・2で分かれようか？」

一方の男子四人はとりあえず二人ずつに分かれてチームを作ろうと話し合う。

結果、紫音とレオン、ルークと優斗の組でチームメンバーを探す事になった。

「なら私とイクスちゃんは紫音君のチームに入れてもらおうかな？」

「それなら私も！」

「おっ、神城じやんか」

紫音とレオンのチームに名乗りを挙げたのは日向とイクス、そして神城飛鳥というク

かみじろあすか

ラスマイトであった。

飛鳥はクラスのムードメーカーのような娘で、レオンと気が合うんだとか。

「なら私はルークと優斗のチームに入れてもらおうかしら」

「私も！」

ルークと優斗のチームにはアリスとエクシアに加え……

「私もいいかな？」

先程質問していた栄に入る事となつた。

「構わないよ」

「委員長が一緒なら心強いな」

「いや、何で委員長!? クラス代表はまだ決まってないでしょ!?」

「いや、赤冽さんって委員長っぽいじやん?」

「わかる」

「た、確かに中学では三年間クラス委員でしたけど！」

「あっ、やつてたんだ」

尚、後にクラス代表を決める際にこのやり取りを思い出したクラスメイト達にクラス代表にされてしまつたりする。

「ファンニール、オニール、私のチームに入れ！」

「妹分同盟だね？ 入る！」

「入るのは構わないけど、私達を入れるとISが四機になるわよ？」

「それくらい丁度良いハンデだ」

マドカは蘭やクロエに加えてコメット姉妹を加えた妹や妹分のチームを編成する。

「私達も負けてられないわね！」

「そうね、ISの調整も任せて」

「それなりに頑張ります」

「やるからには最善を尽くすわ」

「私は程々に頑張るよ」

「…………ちょっと不安かも」

クラスにいる最後の代表候補生こと乱のチームは紗代子、
菅野美与かんのみよ、渚みどり、水戸茉優みとまゆの五人。

美与はα組では珍しく落ち着いた同年代とは思えない大人びた少女なのだが、オプション装備としてMVBのナイフを複数確保していたり、スプラッター映画鑑賞が趣味というなんとも癖のある娘で、茉優は今や兎一味として有名になつた本音を思わせるダウナーな少女だ。

そんな茉優が参戦する理由は実は趣味がキャンプで渚と仲良しからというありふれた理由なのだが。

他の生徒は今回はこの5チームのサポートに回る事にしたようだ。

「それではこの5チームでエントリーしておくれ

「皆さん、頑張って下さいね」

「はい！」

この日の放課後からそれぞれのチームは特訓や作戦会議の為にアリーナや空き教室の使用申請に走り回るのであつた。

10話 開幕！チームトーナメント

月末 学年別チームトーナメント当日

0番アリーナには出場しない1年生や新入生の実力を一目見ようと集まつた2、3年生が観客席に座り、来賓席には各関連企業などのお偉方が集まつており、アリーナの控室には出場選手が割り振られた控室で出番を待つていた。

『という事で、第一回学年別チームトーナメント1年の部当日となりました！司会実況は2年3組益田江里子が担当いたします。そして！解説には【兎の皮を被った災害】こと2年1組の天野雪兎君にお願いしております！』

『ども、1年の部の解説に呼ばれました天野雪兎です』

実況席には雪兎と放送部から選ばれた益田江里子が座つており、試合の実況解説をしてくれるようだ。

『さて、雪兎君。この1年の部の注目チームはどこでしようか？』

『まあ、最貞目抜いても優勝候補はチームダークマテリアルズだろうけど、それ以外にも何人か面白いと思つてる生徒がいるチームがいくつもあるんだよなあ』

『あく、やっぱダクマテちゃん達は優勝候補ですか』

『チームワークは言うまでもなく、各個人の戦闘能力もすば抜けでますからね……レイヤーシュテルに関しては国家代表クラスとも交戦経験ありますから』

『うわあ……』

『それにユーリの専用機も一応リミッター付きにしたとはいえ洒落にならん装備ありますし、それを束ねるディアーチェの統率力もね』

『そこにダークホースのイリスちゃんが加わったチームですもんね……よく出場許可しましたね？学園』

『ルールに抵触してない上にチーム戦の見本みたいなチームだしな』

『…………確かにルール上は何にも問題無いんですよねえ』

『こうなるのわかつてルール提案したよな？お前』という呆れ顔で雪兎を見る江里子だが、雪兎は何食わぬ顔である。

『それはともかく、チーム紹介といきましょか』

『今回は初の試みというのもあつたが、6クラスで17チームの参加があつた。発案者としてこの場を借りて礼を言わせてもらう』

『各チームに関しては事前に新聞部の協力でリサーチした資料を元に御紹介しましょう』

『新聞部のリサーチつてどこで不安一杯だがな……』

『まずは α 組から……実績多数！前評判にて優勝候補！チームダークマテリアルズ！』

『これは普通だな』

『機体数はハンデとなるのか!? カナダ代表候補生を引き入れたチーム妹分同盟！』

『ほんとにあの名前で登録したのかよ……』

『私個人としては注目チーム！ 雪兎君の弟君が入ったチームパープルラビッツ！』

『この短期間でどこまで成長したか楽しみだな』

『こちらは残る二人の男子が中心となつたチーム！ リーダーはあのファイルス先生の弟！ チームシルバーファング！』

『チームメンバーも中々面白いぞ』

『本当に強いのは私達！ そう意気込む台湾のドラゴンガールが率いるチーム神龍！』

『ほんとそういうところは鈴そつくりだよなあ…………ん？ 「私はあんな傲慢じやないわよ！」 何を言う、去年の今頃のお前の言動思い出してみやがれ』

雪兎のコメントに抗議する鈴だつたが、去年のクラス代表戦の話題を出されてしまう。

『…………え～っと、 α 組からは以上5チームです』

『次は β 組か…………これは俺が紹介するか。シリアルの代表候補生とそのルームメイトを

抱き込んだ幼馴染トリオのチームクインテット。専用機が割とクセが強いみたいだからどんな試合をしてくれるか楽しみだな』

『クインテット
五重奏ね。オシャレなチーム名ね』

『他にも β 組からは2チームがエントリーしてる。まずは弓道部が無ければ作ってしまえ!と弓道好きが集まつたチーム弓道同好会……目標はトーナメントで活躍して部への昇格だそうだ』

『機体も見事に鋼ばつかだね』

『鋼の追加オプションに弓があるからだろうな……続いてはチーム β 。こつちは β 組の中から可能な限り成績優秀者を集めたクラスの代表って感じのチームだな』

『あっ、割とガチチームだ』

『さて、次は γ 組だが』

『はいはい!ここからはまた私が! γ 組からは2チームがエントリー!お揃いの眼帯は
結束の証!チームブラックラビッツ!』

『あ、今年入学してきたラウラの後輩がいるチームか。機体もハイゼで統一して
からも気合の入れ方が違うな』

このチームのリーダーはドイツのラウラの部隊にラウラと入れ替わりで配属された少女で、部隊のメンバーによって重度のラウラファンになつており、今回の入学もハイ

ゼの専用仕様を持つてラウラの学園での様子を伝える為に学園にやつてきたのだ。

『もう1チームはチームブルースカイ。機動力に秀でたメンバーを揃えたチームみた
い』

『機体もブルー・アクシス統一か……統一パーティ流行つてんの?』

『そんな貴方にδ組のチームI S 5!全機別のI Sで組んだチームだよ』

『うわ、ほんとに鋼、鉄竜、ブルー・アクシス、リヴィアイヴⅡ、ハイゼとバラバラだな……
しかもカラーリングがニチアサジやねえか!わざわざ申請して変えたのかよ……』

『δ組もう一つのチームはイランの代表候補生を招いたチームキヤツトね』

『代表候補生の専用機以外はハイゼ2、鋼2のバランス編成だな』

『ε組からはチームは眼鏡女子だけで結成したチームメガネーズ!』

『今時珍しい眼鏡キヤラがよく五人も揃つたな』

『次はチームブルースカイのライバルになるのかな?グリフォーネ統一のチームヴエル
デヴィント!』

『まだ統一チームいたのか……つて、次のチームのチームインパルスはインパルス
イーグル統一じやん』

『アメリカからの新入生二人を中心としたチームみたいだね』
『残すはδ組か……これは2チームエントリーで一つは……そうきたか』

『どれどれ……あゝ』

『リヴァイヴⅡ統一チームでフランスからの入学生が中心となつたチームジャンヌ。シャルのファンチームっぽい』

『あゝ、デュノアちゃん、国だとジャンヌ・ダルクの再来とか呼ばれてたんだっけ?』

『俺も去年の年末に行つて知つたよ』

この際、観客席にいたシャルロットが赤面していたそな。

『ラストのチームは同じく組からチームZ02小隊!』

『サバゲー部の1年で編成したチームみたいだな。インパルスイーグルやブルー・アクシスにリヴァイヴⅡとミリタリー色強めだな』

『出場チームは以上となります!』

『試合は抽選会の後に行います』

開会式はこうして終わり、抽選会の結果トーナメント表はこのようになつた。

ダークマテリアルズ（シード）

第一試合

チームブルースカイ

V S

チーム弓道同好会

第二試合

チーム妹分同盟

V S

チームブラックラビッツ

第三試合

チームジャンヌ

V S

チームZ02小隊

第四試合

チームパープルラビッツ

V S

チームメガネーズ

第五試合

チームヴエルデヴィント

V S

チーム神龍

第六試合

チームキヤット

V S

チーム β

第七試合

チームインパルス

V S

チームシルバーフアング

第八試合

チームIS5

V S

チームクインテット

『次回もお楽しみに！』

『次回つてメタいわ！』

11話 一回戦①

『さて、早速一回戦第一試合といきましよう!』

『チーム・ブルースカイVSチーム・弓道同好会か』

『この試合、どう見ます?解説の雪兎さん』

『資料を見た限りだとブルースカイは空戦機動を得意としているみたいだが、得意分野に合わせてオプションはマチマチだ。対して弓道同好会は鋼のオプションパックの一つである種子島に弓型のオプション装備である「飛梅」を全員が装備して特化型編成』
『つまり、ポジション分けされた小隊編成のチーム・ブルースカイと一点特化部隊編成のチーム・弓道同好会の戦いと』

『ああ、航空隊と対空部隊だな』

チーム・ブルースカイの編成は全てブルー・アクシスではあるが、オプションパックは異なり、Aパックが2機、Dパックが2機、Sパックが1機という編成で、Aパックもマルチカスタムレーザーライフルのバヨネット装備とそれとは別にアサルトライフルを装備した機体と大型のランスのガングレイヴを装備した機体に分かれ、D装備の2機は片方はマルチカスタムレーザーライフルを2丁にし、もう片方は通常のDパック装

備である。

最後にリーダー機のSパック装備はパックパックの追加ビットコントローラに雪兔が使用していたグラスパービットを参考にしたりフレクタービットを装備し、レドームにもミサイルのジャマーシステムを搭載したものに換装するなど対空攻撃対策を施した装備だつた。

対してチーム・弓道同好会は機体を鋼にし、オプションパックを全員が種子島を選択し、追加オプションとして紅椿の穿千を元にしたエネルギー弓・飛梅を装備しており、他にもそれを補助する追加装甲等も統一している。

『ほんと対象的ですね』

『にしてもあのSパック装備……面白い装備積んでるな』

『チームリーダーの美月レナちゃんだね』

『これは面白い試合になりそうだ』

『それでは～』

『試合開始！』

試合開始直後に動いたのは弓道同好会。

穿千の一斉掃射でブルースカイを攻撃する。

「全機乱数回避後プランC！」

「了解！」

レナの指示で散開したブルースカイはレナのSパックがフィールドの上に陣取り、一斉掃射のお返しとばかりにDパック装備の2機がクラスター・ミサイルを発射。それを迎撃しようとする弓道同好会の機体をAパック装備の2機が襲い、1機が撃墜判定を受ける。

『おつと！早速1機撃墜だ！』

『開幕の弾幕を抜けられてからの対応が遅れたな』

『み、皆落ち着いて！態勢を！』

『させないよ！』

『きやあ！？』

そこへ空かさずガングレイヴを装備したAパック装備がランスチャージを敢行し更に弓道同好会の陣形を乱す。

『そこよ！』

そこで逸れた1機をスナイプで撃墜すると、反撃しようと飛梅を射るもそれはリフレクタービットでブロックされ、カウンタースナイプでバランスを崩し、そこをガングレイヴの刃の部分が開いてビーム砲が襲う。

『データで一応知つてはいたが……やつぱルガーランスじやねえか、アレ』

そこからは一方的な試合となり、最初に減らされた人数の不利を覆せずチーム・ブルースカイの勝利となつた。

それでも最後まで諦めずにDパック装備の1機を相討ちとはいえ撃墜判定に持ち込んだところは評価すべき点だろう。

『勝者、チーム・ブルースカイ!』

『今日はブルースカイのリーダーの作戦勝ちだな。弓道同好会は陣形を崩された際にリカバリーフォームをするために近接装備の練習ももう少ししておいた方がいい』

『けれどあの飛梅の一斉掃射は口マンありますよねえ!』

『それは否定しない』

こうして一回戦第一試合の勝者はチーム・ブルースカイとなつた。

『続きまして、一回戦第二試合! チーム・妹分同盟ＶＳチーム・ブラツクラビツツ!』

『妹分同盟はコメット姉妹の専用機の特性上機体数が少ないが……それを補つて余りあるんだよなあ』

『マドカちゃんのフツケバインはある程度知つてはいますが、他の二人の専用機つてどんなISなんですか?』

『クロエの黒鍵改は元々は電子戦特化型の非武装ISだつたんだが、学園に通うつてことでそれを改修した師匠お手製のISだな。機能としては電子戦型のままではあるが、鍵型のロッドに小型のソードビットを装備した中遠距離支援タイプだ』

『見た目はうさ耳付きのクラシカルメイドタイプですか……うん、流石は篠ノ之博士、クロエちゃんによく似合つてます!』

クロエの黒鍵改の見た目は江里子の言う通り黒いクラシカルメイドに近い意匠をしており、改修前の装甲を展開しない時に比べて様々な機能が追加されているのが判る。

『うさ耳はお揃いだからと師匠が譲らなくてな』

『では次に五反田蘭ちゃんの専用機ですね』

『風舞は俺が衝撃砲を参考に開発した風を利用した機能を持たせた試作機だ。各所に空気を圧縮して放出するギミックを持つていてそれを様々な用途に使用する事が出来る』
『さらつと中国の技術をコピーして発展させてますね、この人……』

『一応鈴の奴に追加パッケージを作つてやつた時にあちらには許可取つてるぞ』

『いや、それをあつさり発展させるなつて言つてるの!』

『…………話を戻して、風舞の最大の武器は大型の扇型武装【風神】だ。あれは表面上空気を圧縮させて強風を起こしたり、衝撃砲のように空気の弾丸にしたり、鎌鼬を発生させたり出来る』

『うわあ、それって扇を振つただけじやどれがくるか読めないから結構厄介なのでは?』
『そういう風に作つたからな』

『その三人にコメット姉妹の世にも珍しい複座型のグローバル・メテオダウンが加わつた形になりますね』

『あれは一人の息がしつかり合わないと動きが変な事になるんだが……双子でアイドルとあつてかしつかり動きがシンクロして中々に面白い動きをするISだな……うん?二人でシンクロ?』

『はいそこ!何か思い付いたみたいだけどそういうのは後にして下さいねえ!』

『おつとスマンスマン』

『またしても何か思い付いた様子の雪兎だが、江里子に止められて試合の解説に戻る。そんな妹分同盟に挑むのは黒色に揃えたハイゼ統一チームであるチーム・ブラツクラビツツ!』

『ハイズルパックが2機、あとはハイザ、キハール、フライルーとここもそれぞれ役割を決めたオプショナルパックのセレクトだな』

『そのハイズル2機も微妙に装備が違いますね?』

『ヒートサークルカツターやブレードバレル装備の近接仕様と、バズーカランチャーやショルダーイヤノンを追加した砲戦仕様みたいだな……リーダーはハイザの砲戦才

「プロショーン装備か」

何でもラウラの古巣である黒兔隊の新人だそうで、ラウラへの憧れからラウラが使用していたシユヴァルツエア・レーゲンに近いハイザパックをその砲戦パッケージであつたダブルカノンに近い装備構成にしている。

また、チームメイトも全員黒い眼帯装備などころを見るに既に布教済みなのだろう。
『それでは簡単な紹介も終わつたし、第二試合を始めるか』

『それでは、』

『試合開始!』

開幕早々に動いたのは意外な人物達であつた。

「いくよ!二人共!」

「ガツテン!」

「承知よ!」

なんと、蘭とコメット姉妹が並び、グローバル・メテオダウンがライブ等で使うスピーカーを起動させ、マイクを握つていたのだ。

『えつ? 一体何を……』

『うわあ…………そうきやがつたか』

江里子はその意図がわからず困惑するも、雪兎は三人が何をやるつもりなのか理解して顔を顰める。

「必殺！ハウリングストーム！」

「アア～！」

コメット姉妹がその美声をスピーカー音量最大で放ち、それを風舞の風神で風を起こして風の障壁を作つて向かう先を相手に限定させる事で音量を更に増幅・反響させるという手段でSEへのダメージこそは無いが相手の動きを制限する音響兵器としたのだ。『うつわあ……観客席やこの実況席にはバリアがあるのでそこまで響きませんけど、ブラツクラビツツの皆には結構キツイでしょうね』

『どうとか、こんな攻撃誰も想定してねえよ！』

だが、これで足を止めてしまつたブラツクラビツツに更なる追撃が襲う。

「ミラージュエッジ、いつてください」

クロエの黒鍵改から細剣タイプのソードビットであるミラージュエッジが襲いかかり、それを受けてしまつたキハール、フライルーパックのハイゼの動きがおかしくなる。『あの～、電子戦型つてまさか……』

『ハッキングされたな、ありや』

「この！」

「きやあ!? 何で味方を攻撃するの!?

キハールパックの女子は慌てて反撃しようと“視界に映っていた”黒鍵改をワイヤーブレードで攻撃するが、それはクロエがI-Sの視界をハックして見せていた幻影で、黒鍵改に見えていたのはハイズルパックの砲戦型の子であつた。

「えつ!?あれ!」

「落ち着いて！まずはあのクロニクルさんからやらないと！」

「私も忘れてもらつては困るぞ？」

「しまつ!? きやああああ!?」

ハツキングの主がクロエと見抜いたハイザパックのリーダーだつたが、この混乱の隙をマドカが逃すはずもなく、レーヴアテインの一振りでバトルフィールドの外周へ叩きつけられてしまう。

『五反田ちゃんとコメット姉妹で気を逸らさせて、その隙にクロエちゃんがハツキングで妨害。その混乱に乗じてエースのマドカちゃんが強襲つて……中々にエグい』
『完全な初見殺しな戦法だが、呆れる程に有効な戦術だ』

『キハールの子とフライルーの子はもう下手に動けないから実質4対3よね……』

『チーム戦だと視界ジャックはほぼ詰みだからな……』

結局、ハイズルパックの2機が早々にマドカに撃墜され、リーダー機も蘭とコメット

姉妹の連携に破れ、残った二人は視界ジャックのために棄権。

『うん、これはヒドイ……』

『多分、ダークマテリアルズはもつとヒドイぞ?』

こうして第二試合はチーム・妹分同盟の勝利となつた。

12話 一回戦②

『次の第三試合は運命の悪戯か!?同じ組!チーム・ジャンヌVSチーム・Z02小隊!
そして、今回はゲスト解説者としてシャルロットちゃんに来てもらいました!』

『うう…………シャルロット!!デュノアです』

『この試合にシャル呼ぶとか鬼か、お前…………』

尚、チーム・ジャンヌの方はシャルロットの登場を知り、実況席の方に祈りを捧げ始める。

『聞いてたよりガチじやねえか』

『恥ずかしい…………』

『どうか、機体もシャルと同じカラ―にしてね?こいつら』

『わざわざ申請したみたいですよ?』

『僕、カラ―変えようかな』

チーム・ジャンヌは制式量産型のラファール・リヴィアイヴIIをシャルロットのIISと同じオレンジカラーにしており、リーダーのアデライド!!ブランシャールは装甲切換に高い適性を持っており、まだほとんどの1年生が上手く使えない装甲切換もある程度使

えるという稀有な才能の持ち主である。

「あー！天野先輩だけでなくデュノア先輩までコメント戴けるなんて……あとで口
グ貰えないか交渉しなくては」

しかし、その中身は日本のアニメオタクでもあり、元々は日本に渡る為にIS学園を受験しようとしていた程だつたりする。

シャルロットファンになつたのは去年の12月に雪兔とシャルロットが来仏した時で、シャルロットの見た目がとあるアニメのジャンヌダルクに似ていたのが理由だつたりする。

アデライトも金髪碧眼でそのジャンヌダルクに憧れて髪型等も同じにする程であつたが、シャルロットが「ジャンヌダルクの再来」と呼ばれ始め、その関係でシャルロットに興味を持ったのだが……偶々空港で雪兔とシャルロットの姿を見る事ができたアデライトはすっかり二人のファンになつてしまい、IS学園に入学してからは学友らにその素晴らしさを布教するまでに至つていたのだ。

今回チームを組んだメンバーは入学当時からアデライトのオタク趣味すら普通に受け入れてしまうようなメンバーで、自身のISとして選んだリヴァイヴⅡはシャルロットに憧れて選んだという四人であつた。

その為、今回のトーナメントへの出場チームを決める際にすぐにエントリーを希望し

た。

その初戦の相手が同じクラスのチームであつたのは残念に思うが、負けるつもりはサララ無い。

「私達も負ける気はありませんよ、アデライト」

対するは軍隊オタクの聖川真紀ひじりかわまきの率いるZ02小隊。

真紀が集めたメンバーは同じ軍事オタクやサバゲー趣味の一癖も二癖もあるメンバーで、使うI.Sはアデライト達と同じリヴァイヴⅡやインパルスイーグル、ブルー・アクシス構成は真紀のリヴァイヴⅡのグレールパックにブルー・アクシスのSパックとDパック、インパルスイーグルのアサルトイーグルとイーグルアイの5機である。こちらもカラーリングを申請してカーキ統一している。

『これはこれで濃いな…………』
『どつちも濃いね…………』

『それではいってみましよう！』

そんなこんなで第三試合が始まつた。

「皆、いくよ！」

「全機、攻撃開始！」

チーム・ジャンヌはアデライトがグレールパックに換装し他のメンバー一人のグレー

ルパックと残ったアルカンシェルパックの二人に3：2で分かれ、Z02小隊はグレールパックとDパック、アサルトイーグルを前衛にSパックとイーグルアイが後衛に控えるという同数同士の戦いとなつた。

「同じグレールパックなら私の方が分があります！」

「かと思つた？」

「えっ？」

するとアデライトは真紀の目の前でエクールパックに装甲切換して「一角獣の紋章」を掲げて一気に距離を詰めてくる。

『面白い使い方するなあ』

『偶に雪兔もやるよね？アレ』

『まだアレに慣れてるやつも少ないから有効な戦術ではあるが、使い所が重要だな』

『タイミングを間違えると隙になつちゃうもんね』

『装甲切換の第一人者とそれをいち早くモノにした人が言うと説得力ありますね』

そのままシールドバッシュを放ち真紀のグレールパックを弾き飛ばすと、それに合わせて前に出てきたアルカンシェルパックの2機に合わせてアルカンシェルパックに換装して弾幕をお見舞いする。

「小隊長！？」

「余所見は厳禁だよ?」

「しまった!?

その隙にグレールパックの1機が追加装備していた【一角獣の紋章】のパイルバンカーを叩き込みSEを半分以上削り取る。

「このまま追撃を」

「させません!」

「くつ」

『わ、私も!』

しかし追撃を許さないとイーグルアイの狙撃がそれを阻み、Sパックが追加分のビットも含めての一斉射でチーム・ジヤンヌの攻撃を中断させる。

『パイルバンカー2連発!一気に形勢が傾いたか!?』

『いや、狙撃手のカバーが上手い。決定打になる前にフルバーストで仕切り直したのも良い判断だ』

『彼女、元々サバゲーでそういうのに慣れてるみたい』

『なるほど』

それぞれに仕切り直しとなりチーム毎に集まり態勢を立て直す。

『すいません、仕留め損ないました』

「いえ、あれは相手の狙撃手の判断が良かつただけです」「けれどＳＥを半分削れたのは大きいですね！」

「けれど油断せずにいきましょう」

「はい！」

一方、チーム・Ｚ０２小隊は……

「助かりました」

「いえ、上手くいったのは彼女のサポートがあつたから…………」

「それもそもそもあの狙撃があつたからで」

「それはともかく…………これから巻き返しますよ！」

「おー！」

仕切り直してからはアデライトが引き続きアルカンシェルで弾幕を形成し、対抗しようとしたＺ０２小隊だったが、弾幕でビットを展開できなくなつた狙撃手がジリジリと削られていき、大きくＳＥが削られていたアサルトイーグルが落とされたところで優位が決してしまい、そのまま押し切られる形で1人また1人と人数を減らしていき、最後はせめて一矢報いようとした真紀が隠し札として持つていたビームシールドで弾幕を抜けてアデライトに迫つたものの、エクールに切換を行つたアデライトに「一角獣の紋章」を使われてシールドを貫通されてしまい残つたＳＥが底を尽きた事で決着となつ

た。

『途中までは善戦したんですけどねえ…………』

『やはり装甲切換が使えるかどうかで戦術に差が出来るからな…………問題は今後当たるだろう専用機持ちにそれが通じるかどうかだな』

『アデライトちゃんの装甲切換のスピードも良かつたと思うなあ』

『あっ、シャル…………』

「あ、ありがとうございます！憧れのデュノア先輩から褒めてもらえるなんて！」

『あつ…………』

シャルロットに褒められて感激するアデライトに「やつてしまつた」と頭を抱える
シャルロット。

『…………さて、次は紫音の試合だな』

そんなシャルロットを見て雪兎は何とか話題を逸らそうとしたが、アデライト以外の
メンバーからも期待に満ちた眼を向けられて結局シャルロットは全員の講評をする事
となり、更に尊敬の眼差しを向けられるようになってしまったのであつた。

13話 一回戦③

一回戦も三試合が終わつて次が第四試合。

対戦カードは α 組のチーム・パープルラビッツと γ 組のチーム・メガネーズ。
そのパープルラビッツを率いる紫音は初めての公の場での試合に緊張を隠せないで
いた。

「はあ……」

「おつ？ 緊張してんのか、紫音」

「レオン…………ちよつとね、でも僕よりもシアハートさんの方が心配かな？」

「あく、確かに仲間内のは慣れてきたみたいだが、この観衆だもんなあ」

そのイクスはチームメイトの日向や飛鳥に励まされていた。

「大丈夫？ イクス

「…………うん、何とか」

「前衛は私とレオン君、それから紫音君がやるから」

レオン、日向、イクス、飛鳥のISはレオンと飛鳥が鋼、日向がリヴァイヴII、イクスがブルー・アクシスを選択しており、パックはそれぞれレオンが隼、飛鳥は村正を、日

向はミラージュ、イクスはSパックをセレクト。

対するチーム・メガネーズはやや砲撃タイプに偏った編成で、リヴァイヴⅡのアルカンシエル、鉄竜の炎牙が2機、ブルー・アクシスのDパックが1機、ハイゼのハイザ装備が1機。

しかし、高速切替の技能が無くとも少し時間を掛ければ戦闘中のパック交換も可能で、高速切替の技能を有していれば先の試合のように一瞬で装備が切り換わるという厄介な機能があるので油断は出来ない。

『さてさて、今回の試合の見所は?』

『砲戦装備が多いメガネーズに対してやや近接に寄つたパー・ブルラビツツがどういう戦いを見せるか、ですかね』

「よし、皆行こうか!」

「おう!」

「は、はい!」

「先輩の前で無様は晒せませんからね」

「ははは、ひなちゃんはブレないなあ」

チーム・パー・ブルラビツツ……紫音の初陣が始まる。

「よろしくお願ひいたします」

相手のメガネーズは全員が今時珍しい眼鏡愛用者で構成されたメンバーで、各々眼鏡の種類は異なっているもそれぞれサブディスプレイとしての機能を付与しているそうだ。

ちなみにリーダーの半田尚子はんだ なおこは赤いコンビフレームのアンダーリムの眼鏡を着用しており、ISは鉄竜の炎牙のバツクパツクに大型ミサイルランチャーを増設した仕様を使うようだ。

「よ、よろしく」

何故か全員揃つて眼鏡を光らせている様子に少し気圧されかけた紫音だが、開始位置に移動してからは落ち着いてメガネーズの作戦を探る。

「多分開幕ブツパしてから何かしらアクションがあると思うな」

「そりや、皆してあれだけ大きなミサイルランチャー背負つてたらねえ」

「スマートとフラッシュを混ぜ込んで視界を潰してから装備を切り換えてくる可能性もあるね」

上からレオン、飛鳥、日向の意見である。

そこへ紫音がある提案をする。

「………その開幕の弾幕、利用出来ないかな？」

「何か企んでるな？相棒…………で、何をやるんだ？」

「この作戦の鍵はシアハートさんにあるんだ」

「えっ？ 私ですか！」

その後、紫音が作戦を伝えるとレオン、飛鳥、日向の三人はそれに賛同する。

「面白えじやん、乗つた」

「私も私も！」

「で、でも、私に務まるでしようか？」

「大丈夫よ、私がフォローするから」

「う、うん」

「それじゃあ、勝ちにいこう！」

「お、お～」

「お、お～」

試合開始直後にやはりメガネーズは一斉にバツクバツクのミサイルを広域展開してきた。

「シアハートさん！」

「は、はいっ！ 行つて！ BTビット！」

それに対しても、イクスがSパックの追加分も含めたB.T.ビットを展開してミサイルをマルチロックオンで迎撃。

日向の予想通りにスマートも混ざっていたミサイルが紫音達の視界を遮ってしまうも、メガネーズが想定していた位置より前で迎撃されてしまつたせいでメガネーズも視界を奪われる形になつてしまつた。

「くつ、皆警戒して！」

尚子がそう告げるも既に遅く……

「おうらあ！」

煙幕を突破してきたレオンがピアッキングシールドでハイザ装備のメンバーを殴り飛ばし、

「私もいるよー！」

蓮華と雛菊の近接ブレード二刀流でアルカンシェル装備のメンバーを強襲する。

「何故私の位置が!?」

「タネも仕掛けもあるんだな、これが！」

動搖するもう一人の炎牙装備のメンバーを蹴り飛ばしながらレオンは種明かしをする。

「さつきのミサイル攻撃を迎撃した時にこいつをそっち側に潜り込ませてたのさ！」

それは追加オプション装備の一つである長距離偵察用のカメラビット。そう、イクスがミサイルを迎撃した際にこれを煙幕に紛れてメガネーズ側に送り込んでおり、その映像から位置を算出してデータリンクでメンバーに情報を共有させていたのだ。

『へえ、面白いオプション持ち込んてるな、あの娘』

『あれって確かに長距離狙撃のスポットター用のオプションだつたわね』

『ああ、でもこのアリーナでの戦闘ではアレを使うつて発想が中々出来ないから持ち込んでくるとは普通思わねえわな』

『けど、狙撃用つてことは……』

『そういう事だよな』

二人の言わんとしている事は直ぐに明らかとなる。

「ぐあ!?」

「狙撃!?いや、ビットからの攻撃?」

「おかしい!私達のスマートの効果時間はとっくに…………まさか!?」

「…………囮い込むつもりが逆に囮い込まれたようね」

そこで尚子は自分達が置かれている状況を把握する。

紫音の作戦とは相手の目眩ましを逆に利用してメガネーズの視界を奪い、自分達はイ

クスのカメラビットで位置を把握。レオンと飛鳥に煙幕に紛れた一撃離脱戦法をさせつつ、自分は追加の煙幕を撒き、イクスにはビットとライフルによる多角狙撃、日向にはイクスの護衛をさせるというものだった。

「お見事と言うべきね……貴方達の勝ちよ、天野紫音君」

「偶々そちらの思惑とこつちの作戦が噛み合つただけさ」

「謙遜は過ぎると嫌味よ?」

「それは失礼……なら半田さん達の分も二回戦で頑張らせてもらうよ」

「そう、応援させてもらうわ」

最後に残つた尚子を紫音が撃破した事で第四試合は紫音達チーム・ペープルラビッツの勝利となつたのであつた。

14話 一回戦④

「マドカも紫音も勝ち上がったみたいね」

選手控室にて乱は獰猛な笑みを浮かべつつチームメイトへと向き直る。

「相手はヴエルデ・グリフオーネの統一チーム。 α 組だと私と水戸さん、それから冬海さんが選択していたわね」

「そ、だね、私とさよつちとみみつちやんだけだね」

紗代子と茉優が言うように α 組でヴエルデ・グリフオーネを選択したのは紗代子と茉優、そしてチーム・神龍のサポートを受け持っている冬海実弥の三人だけと意外と少ない。

理由としてはオプションパックが他の量産機に比べてどれも機動力タイプで、そういった機体特性のクセが原因だった。

ヴエルデ・グリフオーネはロツソ・アクイラをベースとしている関係か常に動き続ける機動力タイプに分類され、まだ自身の適正が判らない者が多い一年生が選ぶ機体としては難のあるISなのだ。

だが、その代わりに装甲切換の際の切換が非常にスムーズで、動きながら切換を行つ

ても動きがブレ難いというメリットも存在する。

それを統一チームとして使用してくるヴエルデヴィントというチームは必然的に機動力に秀でたチームであると予想が出来る。

「茉優達から機体特性を聞いてるからまだ何とかなりそうね」

「それにもうちの茉優には、『隠し玉』もあるものね」

渚はそんなグリフォーネの特性を知れた事から茉優に感謝しており、乱は茉優が紗代子らと用意した『隠し玉』はきっと切り札になると読んでいる。

「ふふ、鷺獅子はどんな声で鳴くのかしら？」

一方、もう1人のチームメイトである美与はさつきから愛用のMVB達の刃を磨いている。

「美与、お願ひだから映画みたいなスプラッターなのはやめてよ？」

「善処するわ」

「（試合になつたら絶対忘れるな、この娘）」

乱が一応注意はしたが、このスプラッター映画マニアが自重するとは思えない。

「紗代子、フォローよろしく」

「ええ、何とかするわ」

さて、そんなチーム・神龍の機体構成は乱が専用機である先行量産試作機の鋼竜。紗

代子と茉優がグリフォーネ。渚はインパルス・イーグルを選択しており、美与は鋼だ。
同じグリフォーネでも紗代子は射撃寄りのアクイラ、茉優はバランス型のグリフォーネの基本パックをメインに使用している。

渚は近接寄りのアサルトイーグルを、美与は武器をオプション選択したMVBのナイフを複数拡張領域に格納した隼を使用する。

「それじゃあ行くわよ！」

「お～」

『続いて第五試合！ ε 組からチーム・ヴエルデヴィント、 α 組からはチーム・神龍の登場です！』

『という訳で今回はロツソ・アクイラのテスターのアレシアちゃんと乱音ちゃんと鈴音ちゃんに来てもらいました～』

『うう、私、場違いじゃない？』

『何で私まで………というか雪兔！さつきはよくも好き勝手言つてくれたわね！』

『お前さ、そういうどこだぞ？これ、一応中継とか入つてるからな？』

『…………えつ？』

『雪兎君、それ、マジ?』

『お二人共、聞いてなかつたんですか? 今年のトーナメントは初めての試みですし、今年から本格導入になつた量産機の一般公開も兼ねて中継が入ると事前に連絡があつたはずですが……』

そう、今年のトーナメントは江里子が説明した以外にも様々な思惑が重なつてTV中継がされており、実況者の役も全国中継とあつて部活内で熾烈なじやんけん大会が行われ、3年の部長を抑えて江里子が勝ち取つたものだつたりする。

『あ、あん時クラスが別日の2年の部のチーム決めで揉めてたからな』

『織斑君関係で?』

『一夏関係で』

思わぬところで一夏に飛び火して観客席にいた一夏にカメラが向けられると「えつ!俺!」と一夏が慌て出す。

『そんな事は置いといて試合いくぞー』

『ちよつ!?』

『今回の見所は?』

『統一チームのヴエルデヴィントはともかく、神龍にもグリフオーネが2機いるからな。両チームでどういう運用の違いが出るかが見ものかな?』

『そつか、ロツソ・アクリラがベースだから基本的に機動力頼りになるもんね』
『そういう事だ』

雪兔が見所を語るとアレシアは開発に関与したグリフォーネの特性を思い出す。
『それでは第五試合、試合開始!』

開始直後、先に動いたのはヴエルデヴィント。

やはり機体特性を活かすべく始めは全機アクリラを装備して散開する。

「やつぱりそうきたわね!」

それを予期していた乱はバックパックから伸びる龍の頭部を模した大型の龍砲を起動させ、肩にマウントさせていた龍砲球を使いチャージを短縮させ、正確な狙いもつけずに龍砲を放つ。

「そんな攻撃、このグリフオーネには」

「きやああああ!」

「何!」

乱もヤケクソや当てずっぽうに龍砲を撃つた訳ではない。

龍砲は言つてしまえば“圧縮空気砲”……つまり、大出力で放てば射線上の気流を大きく乱す事が可能なのだ。

そう、乱の狙いは攪乱機動によつて常に動き続けている相手チームの軌道を潰し、あ

わよくば乱れた気流で連携を乱そうとしたのだ。

「どんどん行くわよ！」

「いかん！ 彼女を止めろ！」

最初の一発で運良く連携を乱した乱は続けて龍砲の発射態勢を取り、相手のリーダーはそれを止めさせようとするが……

「させませんよ？」

「私達を忘れてもらつては困る」

乱へと向かつていくグリフォーネ2機を美与の鋼と紗代子のグリフォーネが阻む。

「では、行きますわ」

美与は両手に逆手持ちでMVBナイフを握ると阻まれた事で機動力の低下したグリフォーネへと一気に接近し、相手が迎撃しようと取り出したアームブレードを弾いて態勢を崩させ、その隙に回し蹴りを叩き込む。

「なっ！」

「ほらほらほら！」

態勢を崩された相手を美与はMVBナイフでジワジワと削るように連撃を浴びせて

いく。

「今援護を！」

そこにリーダーがスナイパーライフルを取り出して援護しようとすると、もう1機と交戦中のはずの紗代子によつて銃身を撃ち抜かれて彼女の手から弾き飛ばされてしまう。

「こいつ、私と戦いながら！」
「ISはハイパーセンサーによつて全方位を知覚可能なのだから利用しなくては損だらう？」

「嘘でしょ!?」

紗代子がやつたのはハイパーセンサーを使つて目の前の相手を見つつ、サブウインドウでリーダーの動きも監視するという並列処理である。

一般的には全方位知覚が可能とはいゝ、人間である以上自身の視覚に頼りがちになる。

その為、人間としての死角がそのまま死角になつてしまふ事がが多いのだが、紗代子は左右で正面の相手とサブウインドウに映る相手を正確に認識してノールツクにも見える先程の射撃を行つたのだ。

また、紗代子がオプション装備として選んだ装備の1つはISからしても大型のリボルバー2丁。

これは大型化による取り回しの悪化と連射性、反動の増大と引き換えに大口径弾によ

る威力とガンカタにも耐えうる強度を獲得した非常に使い手を選ぶ装備だ。

『ねえ、雪兔君』

『うん？』

『あの2丁拳銃つてああいう使い方するやつじゃないよね？』

『まあ、人間で例えるなら片手でデザートイーグルを2丁使うようなもんだからな『うわっ……あの娘、そんなのでスナイパーライフルを見ずに弾いたの！？』

『そうなるな』

これには実況席のアレシアと鈴もドン引きである。

『それよりもあつちも面白い事になつてんぞ』

そう言つて雪兔が示したのは残る1機を追つている茉優のグリフォーネだつた。だが、そのパックは試合開始時に装備していたグリフォーネではなかつた。

『あれ？ グリフォーネにあんな装備あつたつけ？』

というのも、茉優のグリフォーネはアクイラでもレオーネでもグリフォーネでも無いアレシアが知らないパックが装備されていたのだ。

『今年の1年はほんとに面白えわ』

『雪兔、絶対アンタあれ知つてるわよね？ 勿体ぶらずに話しなさいよ！』

『悪い悪い、アレは元々はグリフォーネのオプションパックの試作品の1つだつたんだ

が、学園に納品するまでに完成させられなかつたパツクでな。あの嬢ちゃんは偶々俺が持ち込んだオプションリストからそれを見つけて「面白そうちだからこれをオプションにしてもいいですか？」とか言つてな』

『えつ、まさか…………』

『研究会の事を聞いてわざわざ持ち込んで自分専用のパツクとして完成させやがつたんだよ…………まあ、俺やカロリナ、それから優斗も手伝つたけどな』

『うわあ…………』

その際に茉優は雪兔達とすっかり意気投合してしまい、そのまま研究会に入つてしまつた優斗に並ぶ逸材だつたのだ。

そうして完成した専用パツクの名は【ヒツボグリフ】と言い、元々はヴエルデ・グリフォーネの機動力強化パツクとして開発されていたもの。

しかし、ただでさえ機動力に秀でたグリフオーネを強化するとあつて開発が難航し結局完成しなかつたのだ。

それを兎達が面白半分にあれこれ弄つて完成したという経緯からグリフオーネの名の由来となつたグリフオンに関連付けて本来ならありえない幻獣と言われるグリフオント馬の交配種であるヒツボグリフの名を与えられた。

その機動力は通常のグリフオーネを遥かに凌駕するものとなつており、全速力で弾丸

をばら撒きながら逃げる相手のグリフオーネを余裕で追従出来る程であった。

「ほらほら、もっと速く逃げないと捕まえちゃうよ～？」

「な、何なのよそれ!?」

「ほら、つつかまえた！」

「しまつ、きやあああああ!?」

茉優はヒツポグリフの両腕に搭載したアンカークローで相手のグリフオーネの足を掴むとスラスターを全開にして相手を引き摺り回し、急降下しながら拘束を解いて地面に叩きつけてしまった。

『うつわあ…………あれ痛そう』

『というか、あの娘も中々エッギングい事するわね…………』

最初に龍砲の餌食になつた1機は既に渚にトドメを刺されており、茉優と乱がフリーになつてしまつた事で残る3機も順番に倒されていき勝者はチーム・神龍となつた。

『まさかここまで一方的な試合になるなんて…………』

『というか、あの改造パックは有りなの?』

『ルールに“改造した装備を持ち込んではいけません”なんて書いてないからな。そんな事言い出したら専用機とかほぼアウトだぞ?』

『普通はIS自分で改造しようなんて考えないわよ、普通はね!』

雪兎の影響を受け過ぎて、ISを改造する」という発想に疑問を抱かなくなつたアレシアに対し、元代表候補生の鈴は雪兎達が普通ではないと声高く指摘するのであつた。

15話 一回戦⑤

『さて、次の試合にいきましょう！』

『第六試合はイランの代表候補生のいるチーム・キヤツトVS β 組の精銳チーム・ β 』
『ところでの専用機について何かご存知で？』

『ウルフアリザフラーニーのゴルベイエグリストーンの事か？』

『それってどういう意味なの？』

『ペルシヤ語でゴルベイエで「の猫」、グリストーンは地名でもあるが、今回は【花園】
【薔薇園】という意味だろう』

『つまり、【薔薇園の猫】と？』

『多分な。機体の方は旧リヴィアイヴをベースに改修した第3世代機だ』

『第3世代機って事はイメージ・インターフェイスを使った装備が搭載されてるのよね
？』

『そいつに関しては見てのお楽しみつてやつさ』

『うう……気になるから早速試合にいきましょう！』

チーム・キヤットの編成はゴルベイエグリスターに鋼とハイゼが2機ずつという編成。

一方のチーム・βの編成はリヴィアイヴⅡが2機、鋼、イーグル、アクシスが1機ずつとなっている。

試合の方は最初は軽い撃ち合いから始まり接戦を見せるも、ウルファは最後まで第3世代装備を使う事なく勝利してしまい、江里子はモヤモヤしたまま第七試合へと移る。

次の第七試合は両チーム間に嫌な空気が発生していた。

「やつとこの時が来ましたわね！」

「はあ……また君らか。僕はうんざりだよ」

「ムキッ！」

「貴女もいたのですね、成り上がりのローズウェルさん」

「はあ……（またこの手の人達ですか？）」

その原因はチーム・インパルスの中心メンバーであるアメリカからきたジル＝ヘルナンデスとその幼馴染みであるケイリー＝ベーカーの二人が同じアメリカ人のルークとアリスに絡んできたからである。

ジルは元々ナターシャのファンであり、彼女を目標にしてきた経緯から、編入当時の

ラウラのような八つ当たりじみた嫉妬の感情をルークに抱いている。

また、ナターシャのシルバリオ・ゴスペルと同じアメリカ側の開発チームで開発されたシルバリオ・ファングをルークが受領している事も気に入らないらしく、受領当時から自分に譲れとしつこく絡んでいたそう。開発チームはファングの開発経緯やジルの態度から彼女を候補から外しているのだが……。

ケイリーの方は軍部高官の娘で、アリスの父が1代で急成長させたローズウエルをよく思っていないらしい。

『うわあ～…………何か私怨全開っぽいですね』

『本当なら入学前に弾かれそうなもんだが、ルークとアリスにしかその感情向けてないから問題になつてなかつたんだろうなあ』

実況解説の二人もこの状況には少し呆れている。

『おいそこの二人。ジル＝ヘルナンデスとケイリー＝ベーカー、お前ら二人だよ。ぶつくさ言つてないでケリは試合でやれ』

「は、はい！」

だが、試合が進まないので雪兔が名指しで注意すると大人しく下がつていった。

「お互に面倒なのに目をつけられたね」

「全くですわ」

「まあまあお二人さん…………」ういうのは試合で黙らせればいいんだって」「優斗、研究会参加してから雪兔先輩に似てきてない?」

「えつ?」

「そうだね、僕としては少し羨ましいよ」

「ほら三人共、始まりますよ」

栢の言葉で試合に意識を戻した三人と栢、そしてエクシアが並ぶ。

「いこうかファンゲ、お前があんなのに御せるなんて勘違いを正しに」

ルークはシルバリオ・ゴスペルを彷彿とさせる白銀のフルスキンISであるシルバリオ・ファンゲを纏い。

「研究会での成果を見せないとな」

優斗は赤くカラーリングされた鋼を。

「思いつきりやろうか、カリバーン」

エクシアは蒼き翼を持つ騎士のような専用機・カリバーンを。

「あのような人達には負けられませんわ」

アリスは真紅に染め、バツクパツクにストームブリンクガードをマウントしたインパルス・イーグルを。

「わ、私も!」

葉は薄い赤色にしたリヴァイヴⅡを展開し、相手チームの青に統一されたインパルス・イーグル達の前に立つ。

『第七試合、試合開始！』

「私は貴方達を倒して私を国に認めさせるんだから！」

ジルがそう言つて飛び出すとそれに続いて他のメンバーも隊列を揃えてルーク達に突撃してくるが……

「そういうとこがダメなんだよ」

ルークはグレネード付アサルトライフルを二丁取り出して先頭のジルのイーグルにグレネードを発射。

「こんなもの！」

迎撃しようとしたジルがアサルトライフルでグレネードを撃ち落とすが、それはルークの罠だった。

「対閃光防御」

「なっ！」

そのグレネードはフラッシュグレネードで、迎撃してしまった事でジル達は防御する間も無く閃光弾の光を浴びて動きを止めてしまい、その隙にルークはアサルトライフルの連射を浴びせてジルのSEを削る。

「ジル！」

「おつと、余所見は厳禁だよ？」

「せいつ！」

閃光からいち早く回復したメンバーがジルのフォローを行おうとするも、優斗が双刀でそれを阻みながら二本のサブアームにセツトしたサブマシンガンで追撃し、後退させられたところを上からアリスがストームブリングガード強襲しアリーナの地面に叩き付ける。

「優斗、後は任せるわ」

「うん、任せて」

そう言うとアリスはまだ回復しきれていないケイリーの方へと向かい、優斗は墜落させたイーグルに向かつて双刀から切り替えたアサルトライフルとサブアームのサブマシンガンを使って弾丸の雨を浴びせて身動きを封じる。

「それ！」

「くつ！」

「まるで一人いるようなビット捌きって」

その頃、エクシアは両手に持つクリア素材の刀身を持つ片刃の双剣で一人を相手しながらバックパックの翼にマウンティングしていた4基のソードビットともう4基のガンビッ

トでもう一人を抑え込んでいた。

「この子達なら私は手足のように使えるよ」

エクシアに与えられたこの専用機【カリバーン】は雪兔がエクシアの特性に合わせてブルー・アクシスをベースに改造を施したISなのだが、例の如くほとんど原型を留めておらず、手にしている双剣と腕部にはブルー・アクシスが元から装備している内蔵レーザーブレードをレーザーバルカンとしても使用可能にしている。

バックパックにマウントしている4基のソードビット【ソーディアン】と腰にマウントしたガンビット【ガンファミリア】の5種だけしか武装を付けておらず、その分本体のスペックアップにリソースを使っている。

一応、拡張領域の空き容量は残っているのでエクシアの好みである程度なら武装を追加可能。

そのビット制御能力は長い間聖剣の生体コアとして取り込まれていた関係からか高い数値を叩き出しており、まだ戦闘経験の少ない同じ1年生であれば文字通り片手間に相手が出来てしまう。

そして、エクシアが一人で二人を相手にしているという事はシルバーファング側が一人フリーになるという事で……：

「きやあああ!!」

「狙撃!?」

「判断が遅いよ」

エクシアに釘付けにされていた二人の内の一人が狙撃を受け、狙撃手の存在を知るも、その狙撃手である葉は既にもう一人のイーグルの背後により、バツクパツクのサブアームに装備したアサルトライフルで強襲。

「私も忘れちゃダメだよ?」

そこへ上から急降下キックを浴びせて狙撃されたもう一人にぶつかるように蹴り飛ばす。

「ちよ、ちよつと早くどいて!」

「そんな事言われてもバツクパツクが引つかかって

「これはオマケです」

「あつ」

ぶつかった際に絡まってしまったのかジタバタと暴れる二人に葉が放ったグレネードが命中して二人のISのSEが0になつてしまふ。

『……やっぱ、ツボ入つた……』

『えつ? 今のが?』

『前に、セシリ亞と鈴が山田先生と模擬戦やつた時とそつくりな終わり方で……ぶつ』

かつてのその一戦を思い出したらしく、雪兎は堪えきれずに笑い出す。

『それよりも、あつちも大詰めみたいですよ?』

江里子が示した先ではケイリーとアリスが戦っていたのだが、形勢はアリスの有利という状況だった。

「はあつ!」

「くあつ!?

そもそも同じインパルス・イーグルでもアリスの使うストームブリンガーは通常のオプションではなく、アリスの要望で追加されたオプション装備であり、ケイリーの使うイーグルにはアサルトイーグルのスタンガンナックルとブレードクローしか近接装備が無く、アリスも同じアサルトイーグル装備なせいで距離を詰められてしまい追い詰められてしまったのだ。

「なんて野蛮な戦い方だ……やはり成り上がり者の娘か」

「元世界2位の方も似たような武器を使つていましたし、珍しくはありません。あとそこの野蛮な者にすら劣勢なのに強い言葉をお使いになると益々惨めですわよ?」

「あんな男の学生に負けたような国家代表の面汚しを引き合いに出しても!」

「確か日本ではこういうのでしたわね……」

弱い犬程よく吠える』と

「アリス＝ローズウエルうううううう!!」

アリスは挑発してくるケイリーに逆に挑発仕返すと、ケイリーは激昂して無策に飛び出してきたが、アリスはそれをストームブリンガーを双剣モードにして斬り払いSEを削り切る。

「もう少し煽り耐性をつけて出直してらっしゃい」

父親の関係で煽り耐性のあるアリスからしたらケイリーはさほど苦労する相手ではなかつた。

「ルークの方はどうかしら？」

同じく目の敵にされていたルークはどうかと見てみればこちらもルークが優勢であつた。

「なん、で……」

「君の動きは単調過ぎる。もう少しフェイントも混じえた方がいい」

接近戦を仕掛ければプラズマチーノソーや弾かれ、射撃攻撃をして掠りもしない。

逆に少しでも隙を見せれば鋭い反撃をしてくる。

「例の演算システムを使っているのよ！でなければ！」

「エニグマ」の事かい？悪いけどアレは脳への負担が大きくてまだ30秒くらいしか使

えないんだ」

ジルが苦し紛れにルークがシルバリオ・ファングに積まれた演算予測システム【エニグマ】を使用しているからだと指摘するも、ルークによつてそれは否定される。

「そろそろ終わりにしようか」

「これは夢よ！私がこんな！」

最後まで認めようとしたジルだが、無情にもルークが残るSEを削り切り、そこで全機撃墜されチーム・シルバーファングの勝利となつた。

16話 一回戦⑥

『さてさて、一回戦も最後の試合となりました!』

『第八試合はチーム・IS5VSチーム・クインテットだつたな』

『今日は更識簪ちゃんにゲストとして来てもらつたわ』

『よろしく……ところでファイールドにはクインテットの五人しかいなけれど』

『あれ? 係の人にはもう控室は出たつて聞いたんだけどなあ』

そう、既にクインテットの五人はアリーナにいるのだが、対戦相手のIS5の姿は見えない。

「敵前逃亡?」

「いや、それは流石にないでしょ…………ないよね?」

「私に聞くなし」

「あつ、出てきた」

弱視故の鋭いその他の感覚と弱視をISのハイパーセンサーで補う事で高い空間把握能力を持つキヤロルが反対側のゲートから相手が入場してくるのを感じしチームメイトに伝えると、ゲートから眩い五色のISが飛び出してくる。

「ISピンク！」

最初に飛び出してきたのはピンクと白にカラーリングされたブルー・アクシスを纏つた桜色のツインテールの少女・桃城希望。

「あつ、ISブルー！」

続いて少し恥ずかしそうに出てきたのは青にカラーリングされたリヴィアイヴIIに乗るポニー・テールの蒼井静華。

「ISイエロー！」

ゆつたりとした口調で現れたのは黄色にカラーリングされた鋼に乗るお団子ヘアの黄島翔子。

「ISレッド！」

見た目から熱血タイプなショートカットの赤坂光子は真っ赤な鉄竜に乗る。

「……ISブラック」

元から黒ではあるが、ほとんどのパートを黒一色に染め直したハイゼに乗る黒河沙月。

「五人揃つてISファイブ！」

最後に五人揃つて決めポーズを取ると、五人の後ろに五色のスマーカーが出て戦隊ヒーローやプリ○ュアのようなド派手な登場シーンを演出する。

『チーム名からしてやると思つてたけど、ほんとにやるバカいるんだな……』

『往年の戦隊ヒーローのカラー煙幕…………わかつてる』

『簪、ちょっと落ち着こうなあ…………というか、やるならやるつて申請しとけや！知つたらもつとちゃんとした演出や音響もやつてやれたのに！』

そんな演出に目を輝かせる簪だつたが、雪兎はどうせやるなら自分も演出やりたかつたと悔しがつていた。

「次があればお願ひしま～す」

リーダーの希望はそんな雪兎に笑顔でそう返事をする。

「フェルト、私達もアレやろ」

「嫌よ！恥ずかしいじゃない、あんなの！」

「フェルト、それは言わないであげて」

「何で…………あつ」

美乃里の言葉でフェルトは顔を真っ赤にして恥ずかしがつている静華に気付き、非常に申し訳ない気持ちになる。

「なんかごめん」

「…………ううん、気にしないで」

ちなみに希望と静華は幼馴染みらしく、静華は常に希望に振り回される関係にあつた

ようだ。

そんな静華にフェルトはシンパシーを感じずにはいられなかつた。

『さて、色々ありましたが一回戦最終第八試合！ 試合開始！』

試合が始まると、IS5の五人はそれぞれパーソナルカラーにカラーリングされた武器を取り出す。

「パステルフェンサー！」

「オ、オーシャンブレイカー」

「ブリッツアローだよ！」

「バーニンググレイブ！」

「インパクトアックス」

『うん？あの武器は…………』

『知ってるんですか？』

『雪兔はオプション装備は全部一通り目を通してるから全部覚えてるはず』

『えつ？あの膨大なリスト全部覚えてるの！？』

『それは技術者だからな。あの武器、あんな名前じやなかつたはずなんだが…………あと

何か忘れてるような…………』

雪兔が引っ掛かりを覚えている間にも両チームが激突する。

「やあっ！」

希望がパステルファンサーでキヤロルが操る専用機【アズラエル】に突きを放つが、キヤロルは素早くアズラエルの第三世代装備である液体金属制御で盾を作つてブロツクする。

「むつ、今のを防ぐなんて……流石は代表候補生！」

「貴女の突きも速い……この子アズラエルじやなかつたら今のでいいのもらつてた」

「エヘヘ……」

「だから私も本気出す」

「え？」

すると、キヤロルの両手に液状金属が集まり腕部と一体化した二振りのブレードとなる。

「ちょっ!?」

「いくよ」

驚きはしているものの、希望はきつちりキヤロルの攻撃を防ぎつつ、隙きあらば突きでの反撃を繰り返す。

「セイセイセイセイセイセイッ！」

「速いけど対応出来ない速さじゃない！」

羞恥心から半ばヤケクソになつてはいるが、両手のブレードトンファーから鋭い連撃を繰り出す静華と、それに対しヴエルデ・グリフォーネの標準装備であるアームブレードやレオーネパックのレッグブレードで打ち払うフェルトの二人。

「首輪付きって事で色々噂は聞いてたけど、噂は噂ね」

「そう？ 私は命欲しさに組織を裏切った裏切り者の悪党よ？」

「本当の悪党ならあの娘はあんなに貴女に懐かないと思うのだけれども？」

「それはあのド天然な娘が放つておけなかつただけよ！」

距離が開けばトンファーに仕込まれたマシンガンと双銃剣の撃ち合いとなり、お互いに一步も引かない戦いが続く。

どうやらチームでの立ち位置だけでなく、戦闘スタイルも似ているようだ。

＊＊＊

「せいやつ！」

「くつ」

一方、美乃里はバーニンググレイブを持つ光子との戦いを繰り広げていた。

美乃里のハイゼはハイズルパックにブレードバレルを装備したライフル二刀流で対抗しているが、光子は量産機の中ではパワーに優れた鉄竜で尚且接近戦仕様の雷爪装備

にオプション装備のバーニンググレイブという特化仕様だ。

セッティングも近接戦闘に重点を置いたセッティングがされているようで、押し込まれかけている。

「そんなパワーじゃコイツは止められないぞ！」

「わかってるわよ！」

「うおっ!?」

鍔迫り合いは不利なのはわかつていた美乃里は更に力を加えると見せかけて力を抜いて受け流し、光子がバランスを崩したタイミングを利用してパックをフライルーに換装。

パックパックに残したシールドウエポンブースターと左右の大型版からミサイルをバラ撒き、レールガンとブレードライフルを連射して美乃里は反撃に出た。

＊＊＊

「シツ！」

「おつと……それ」

此花は同じ鋼を使う翔子と弓同士の戦いをしていた。

だが、翔子の使うブリツツアローは通常鋼のオプションとして存在する和弓タイプの飛梅とは違い洋弓のリムと呼ばれる部位に近接戦闘用の刃が取り付けられたもので、此

花が翔子の矢を避けながら射つてゐるのに対し翔子はブレードの部分を使つて此花の矢を切り払いながら矢を射つてくる。

「やつ」

「ほんとその弓厄介ね！」

弓は両手で使わねばならず、ブリツツアローのように近接戦闘で使えない飛梅を使う此花のSEは少しづつではあるが、確実に削られていく。

「(こうなつたら……)」

そこで此花は一度回避に専念し、装備を変更する。

「えつ？ それって!?」

「元弓道部だからって弓しか使えない訳じやないわ！」

それは此花がオプション装備として選んだ装備の一つであるビームサイズ。

実は此花はとあるMMORPGにて鎌を愛用しており、そんな中オプションリストからこのビームサイズを見つけ出していたのだ。

パツクもいつの間にか隼に変更しており、一気に距離を詰めてビームサイズを振るう此花に翔子はブリツツアローのブレードで防御するが、ビームサイズの方が大きくなれば次第に押され気味となる。

「弓の時より強つ!?」

「弓道は実家が道場やつてたからやつてただけだもの！」

残る真白と沙月は同じハイゼでありながらカラーリングが白と黒という真逆のカラーリングをしており、沙月はヘイズルにフライルーの肩のマウントを追加した複合装備仕様とオプション装備のインパクトアックスを用いた近接戦闘向けカスタムを施している。

それに対しても真白はハイザの大型レールガンを左右に装備した重砲撃形態で、両腕部にヒートチャクラムカッターをつけるとかいうカスタムをしており、ベースが同じ機体のはずなのに全く別のＩＳに見える程であつた。

「そこまでの重武装でよく動ける」

「そつちこそその斧での一撃に特化させてるよね？」

お互にキメラじみたセツティングを施している為か相手の装備特性も理解しており、だからこそその装備で対等にやり合える事を賞賛する。

「よつ、はつ」

「むつ！ぜやつ！」

左右の大型レールガンを撃ちながら腕を動かしワイヤーでチャ克拉ムを操作する真白と弾丸を躰しながらチャ克拉ムをインパクトアックスで弾きつつ、隙あらば真白に

向かつて接近してアツクスを振るう沙月。

そんな沙月をレーザーワイマーで妨害してミサイルを放つ真白。

「随分と手慣れているな？」

「ゲームで後衛をやつてるとよく狙われるからね、その対策と同じ事をしてるだけだよ～」

此花だけでなく、美乃里や真白も同じゲームをプレイしており、フェルトとキャロルの二人にも「連携の練習に丁度いいから」と言つてプレイさせていたりする。

そこからは各々膠着状態が続き、SE上では若干クインテットが優勢で、このままタ

イムアップになつてしまふとIS5の敗北が決まつてしまふ。

そこで希望はある賭けに出る事にした。

「皆！アレをやるよ！」

「わかったわ！」

「りよ」

「おう！」

「ああ」

すると、四人はそれぞれの相手から多少のダメージは無視して振り切り希望の元へと集まつた。

「一体何を……」

パステルフェンサーの柄をインパクトアックスの先端に繋ぎ、インパクトアックスの柄の左右にオーシャンブレイカーを、柄の下に変形させたブリツツアロー、石突きを上にしたバーニンググレイブという順で連結していき一本の大剣へと変貌させる。

『あー!! そいつはクロスキャリバー!!』

『それって確かに前に戦隊ヒーローの武器を見て作った試作品じゃなかつたつけ?』

『バラしてオプションに混ぜといたんだが……チームメンバーで揃えて合体機構までアンロックするとは……』

希望の賭けとは合体剣クロスキャリバーでの必殺攻撃で大逆転をしようというものだつたのだ。

「面白そう……なら私も」

それに対抗してかキヤロルがクロスキャリバーを構える希望の前に立つ。

「このクロスキャリバーなら!」

「えい」

キヤロルは左肩に装備されていたアーマーの一部を分離させ、そこに拡張領域から取り出した柄を連結して液体金属を全て注入して巨大なブレードへと変貌させる。

『ちょっと待て!! そつちはスレードゲルミルかよ!!』

そのブレードの仕組みは雪兎が言うようにスレード・ゲルミルというメカが使用する斬艦刀に酷似していたが、これは千冬が使う打鉄・参式の斬艦刀から着想を得たキヤロルが本国に連絡して付けてもらったオプションだつたりするのである意味似ていて当然であつた。

「そ、そんな大つきいだけの剣には負けないもん！」

「イザジンジヨウニ勝負」

そのあまりの大きさにビビる希望と若干片言なキヤロル。

「クロス・キヤリバー!!」

「ちえすとく」

両者が剣を振るうが、質量が圧倒的なキヤロルの液体金属ブレードが勝り、一箇所に集まっていたIS5はたつた一撃で残りのSEを失いクインテットの勝利が決まつてしまつた。

「ぶい」

『…………うん、アイツらは相手が悪かつた』

『ある意味ロマン武器対決でしたね…………』

『開幕にアレ使われてたら普通に終わってたかも』

こうして1年生の部の一回戦の全試合が終わつたのであつた。

17話 兆し

1年生の部の一回戦が終わり、残ったチームは9組。

一回戦と二回戦はシード扱いで試合に出ていないが、前評判から優勝候補と名高いダークマテリアルズ。

ブルー・アクシスのみの編成で弓道同好会を下したブルースカイ。

機体数のハンデを物ともせず圧勝した妹分同盟。

シャルロット信者のチームであるジャンヌ。

相手の作戦を逆に利用してみせた紫音率いるパーープルラビッツ。

個性派メンバーを揃えた神龍。

未だ奥の手を残した専用機のいるキヤツト。

同じ出身の国同士でも格の違いを見せつけたルークとアリスのいるシルバーファング。

一見ネタにも見えるが、かなりの実力を持つていたニチアサ風チームを下したクインテット。

どのチームも例年よりも数段高い実力を有しているのが判る。

その原因はやはりあの兎師弟であつた。

まず、全新入生が入学して間もない頃からI-Sを扱える環境があつたことと、それに合わせてアリーナの混雑を予期して導入されたVRポッドの存在だ。

I-Sをリンクさせる事で実戦稼働に近いシミュレーションを行う事が可能なのである。これを利用する事でアリーナの待ち期間をVRシミュレーションで補う事が可能となり、1年生だけではなく2、3年生のレベルアップにも繋がつたのである。

尚、その仮想敵データとしてテスターを務めた兎一味の戦闘データも存在しており、データとはいえ恐ろしい難易度となつてゐる。

しかも、その兎一味本人達が「良い訓練になる」ミラーマッチを続けており、常日頃にアップデート版が増えている始末である。
中でも雪兎は本人に極めて近い思考をしており、繰り返し戦闘を行うと動きを覚えて対策してくるとかいう鬼畜仕様である。

話を戻して今回のチームトーナメントはそんな背景もあつてこのような激戦となつたのだ。

「うー、僕も早く試合したい！」

「仕方なかろう、参加チーム数が半端になつてしまつてどうしても決勝以外は試合をし

ないチームが出来てしまうのだ』

「三回戦からは別のチームがシードになるそうなのでそれまで我慢しましよう」
そんな中、早く試合がしたくてウズウズしているレビイをディアーチエとシユテルが宥めていた。

「でも、今回のトーナメントといい、設備やＩＳの拡充といい、『地下のアレ』といい、マスター達は何に備えてるのかしら？」

「（こ）最近は大人しくなった亡国機業やマスター達に敵意を持つ人達はまだいますからね」

「それに異世界や並行世界等からマスターやその技術を狙つた者もいましたからね」

「なんばじゅーこー、だつけ？あとブラッドスタークとかいう蛇野郎！」

「……その異世界で拾われた私が言うのもアレだけど、この世界も相当よね」「何れにせよ我らの方針は『立ち塞がるならば蹴散らすのみ！』であるからな」

* * *

一方、雪兎はアリーナの上で空を見上げていた。

「どうみても何かあるとしか思えないよな、あれ……」

その視線の先にあるのは数週間前から空に瞬き続ける彗星。

雪兎や束も調査はしているものの、判っているのはあの彗星は『自然発生したもので

はない人工物の可能性が高い』という事だ。

「まさか『デューイの彗星』みたいなもんぢやねえよな?」

以前に電腦空間モドキを再現した事を思い出してそんな事を考えたりもするが、真相はわからない。

「何か忘れてる気もするが……このまま何事もなきやいいんだがな」

18話 二回戦①

『さてと、準備が整つたようなので二回戦を始めていこうと思います』

『ダークマテリアルズはまだシードだから次はブルースカイと妹分同盟の対戦か』

『どう思います?』

『俺からは何とも言い難いので特別ゲストとしてこの人に来てもらつた』

『オリバー＝オルブライトと申します。以後お見知りおきを』

『あれ? この人つて確かブルー・アクシスの……』

『アレの基礎設計したのこの人な』

オリバー＝オルブライト。

元々はBT兵器の開発に関与していた技術者で、重度の日本のロボットアニメファンだった男で技術は一流なのだが、何かと癖のある武器等を好む。

BT兵器も「曲がるビームは男の浪漫」と開発に従事していたのだから筋金入りである。

雪兎の作成したブルー・ティアーズ用のパッケージのデータを見てイギリスからのP F出向者に志願し、そこで雪兎と意気投合してしまい、その成果としてブルー・アクシ

スの基礎設計を本国に送った後にそのままP.F.に移籍して居付いてしまつたというかなり変わつた経歴の持ち主で、例のルガーランスマードキを設計したのも彼である。

『似たような経歴のやつはあと二人くらいいるけどな』

『おかげ様で毎日が充実しているよ』

『うん、それは良かつたですね……』

『一回戦のデータもさつき見させてもらつたけど、自分の設計した機体をこうして見られるのは嬉しいね』

『それわかる、技術者あるあるだな』

『おつと、話がズレたね……今から始まる試合は相手が彼女マドカだから少し厳しいと言わざるえないかな』

『と言うと?』

『彼女はサイレン・ゼフィルスに搭乗していた経験があるからB.T.兵器の特性をよく理解してるはず。そんな彼女をどう抑えるが重要なポイントだね』

『機体数の差もあるから上手く抑えさえすれば勝ち目はなくはないってことだな』

『なるほど……』

それでもクロエやコメット姉妹、そして蘭も決して侮ってはいけない相手なのは変わりない。

『さて、それでは二回戦第一試合を始めます!』

今回のブルースカイの編成はAパックが3機、Dパックが1機、Sパックが1機という編成だった。

試合開始直後、ブルースカイは一回戦での音響攻撃を警戒して直ぐに散開しており、その際にDパック装備がクラスター・ミサイルを散布している。

「随分と警戒されたものだな……しかし、まだ甘い! 蘭!」

「任せて! 疾つ!」

しかし、そのクラスター・ミサイルは蘭の持つ風神の巻き起こす風で進路をめちゃくちゃにされ、いくつかはミサイル同士の接触で爆発してしまい、それによつて誘爆を繰り返し一掃されてしまう。

「マドカ、10時と3時から2。蘭、上から。お二人には6時からです」

その爆煙を使った奇襲も索敵担当のクロエに読まれ反撃されてしまう。

「くつ……やはり強い」

「私達相手でなければそれなりに通用しただろうが、うちのクロエの“眼”は特別だからなつ!」

「きやあああ!?」

双銃のヴァイス&シュヴァルツで迎撃した後は腕のアンカーショットであるステイ

ンガーで両者を拘束して急降下と急停止で二人を地面に叩き付ける。

「マドカもやつてるね。なら私も！」

蘭は両手の風神を使つて相手を押し返す程の風と真空波の刃を織り交ぜて放つ。

「見えない複数種の攻撃がこうも厄介とは」

「でも、私ばつか注意しててもいいのかな？」

「何を……しまった!?」

蘭に気を取られていた隙にクロエが放つていたミラージュエッジが突き刺さり、機体の制御を妨害され動きを止めてしまった彼女の目の前に蘭がいい笑顔で閉じて棒状になつた風神を振りかぶる。

「ちよつ!?

「カツキーン！」

防御もままならぬところへこの打撃は堪えたようで相手は氣を失い戦闘不能になつてしまつた。

「左右の動きがバラバラなのに息はピッタリつてどういう事!?

「雪兎に指摘されて気付いたけど、これが私達二人の強みだからね」

「1機で連携攻撃してくるみたいって言われたね」

コメット姉妹はDパック装備を相手に二人で1機を操縦するという特殊性を活かし

た戦い方をしていた。

左右で別々の動きをするのは熟練の操作技術があれば可能ではあるが、コメツト姉妹のそれは通常のそれと異なり、左右それぞれ別の人間が操作してはいるが、双子故にその連携のシンクロ率が高く、左右バラバラなのに息がピッタリという謎の現象が発生していたのだ。

「ほらほら！」

「こつちからもいくよ～」

「あ～！」

この後、彼女は自棄になつて各武装を乱射し弾切れとリロード待ち状態になつてしまい、その隙を突かれてやられてしまつた。

そして、ブルースカイのリーダーであるS.パック装備のレナはクロ工と対峙しており、狙撃装備故にミラージュエッジを食らう訳にはいかず、回避に徹することで支援狙撃を封じられていた。

「ミラージュエッジだけじゃなくて偏向射撃にも似た攻撃までしてくるなんて」

「それはスレイブシユーターといいます。雪兎兄様やシユテル様ならもう少し多く制御できるのですが」

ミラージュエッジと併用して使つているのは光球状のエネルギー弾を操作するアク

セルシユーターやパイロシユーターと同じシユーター系のスレイブシユーターで、手に持つ鍵状のロッドが制御ユニットになっている。ミラージュエッジと併用するため制御数は4つと少ないが、厄介な攻撃手段であることは変わりない。

蘭の相手が墜ちた事でそちらに回していたミラージュエッジが戻り、集中力が落ち始めたところでスレイブシユーターに被弾し、とうとうミラージュエッジが当たったところで他の仲間がやられているのを確認してレナは自ら降伏を宣言する。

「負けたわ……もう少しやれると思っていたのだけど、やはり強いわね。ところで、前回の連携技は今回の私のようにアレを意識して開幕に散開させて各個撃破しやすくするためかしら？」

「ふふ、そこはご想像にお任せ致します」

こうして第一試合は妹分同盟が勝ち上がったのであつた。

19話 二回戦②

『続きまして二回戦第二試合!』

『チーム・ジャンヌVSチーム・パープルラビッツだな』

次の試合は別名シャルロットファンクラブと紫音達の試合となつた。

「あ、あの！天野さん！」

「うん？何か？」

その試合開始前にジャンヌのリーダーであるアデライトが紫音に声を掛ける。

「あの、その……」この試合に私達が勝てたらデユノア先輩と顔繋ぎをして欲しいのですが……」

「（あ、この人達、シャル姉のファンなんだっけ……）それは構わないけど、僕達に勝つたらでいいの？」

「ええ、貴方達に勝つて自信を持つて会いにいきたいので」

「わかりました。けど負けるつもりはありませんよ？」

「望むところです」

『両者気合十分なようですね。それでは、二回戦第二試合、試合開始！』

そうして決意を新たにして仲間の元へと戻ったところで試合開始の合図が告げられる。

今回ジヤンヌはエクレール2機、グレール2機、トルナード1機、という構成で、パープルラビッツは前回と同じくレオンが隼、飛鳥が村正、日向はミラージュ、イクスはSPACKを装備している。

そして、エクレールの2機がレオンと飛鳥、グレールの2機が日向とイクスをマークしており、残るトルナード装備のアデライドが紫音を狙っている。

「お相手願います！」

「くつ、この装備でどこまでやれるか」

紫音の装備は今後の装備開発分の拡張領域が有り余っていたことから汎用装備を多く投入しており、今は右手にソードライフル、左手にシールドとサブマシンガンを装備している。

「まだまだいきますよ！」

「やはり速い」

アデライドはトルナードで接近戦をしていたかと思えばグレールに換装して機動射撃に切り替えたり、それに追い付こうとすればミラージュに換装して紫音にリードを奪わせない。

「（せめて、近接戦に適した装備があれば……）」

「そう紫音が思つていると……」

『取得データが一定に達しましたこれより第一装備近接戦闘用パック【ブレイズ】ver 1.0の精製を開始…………完了しました』

「えっ？」

「隙きあり！」

「ぐあつ!?」

突然のアナウンスに驚く紫音だが、その隙きをアーデライトは逃さず再びトルナードに換装して鋭い蹴りを放つた。

「紫音!?」

「余所見をしている暇なんてありませんよ！」
「くつ」

それによりアリーナの地面に叩きつけられた紫音に気を取られ攻撃を受けてしまうレオン。

他の三人も動搖した隙きを突かれたようでチームの優勢がジャンヌに傾く。
「悪いけど、ここで決めさせてもらうわ！」

続いてアーデライトはアルカンシェルに換装して紫音の落下点に全砲門を向ける。

その時であつた。

「まだ終わりじやない！」

紫音の落下点の煙の中から火柱が上がり、そこから新たな装備を身に纏つた紫音が姿を現す。

肩や胴体に真紅の結晶のような追加装甲を纏い、両腕に真紅のガントレットを装備、脚部にも真紅の装甲とブレードフインが備えられ、腰には通常形態とは異なるソードライフルが一振りマウントされた近接戦闘特化型形態【ブレイズ】がここに誕生した。

『な、何が起きたんです!?』

『へえ、この土壇場で装備を精製しやがったか…………これはまだ試合がどうなるかわからぬいな』

「第二ラウンドといこうか」

「面白い！」

アルカンシェルのまま紫音に砲撃を敢行するアーデライトだが、紫音はそれを回避や回避できないものを脚のブレードフインやガントレットによつて迎撃しつつ高速で接近する。

「速い！ならば！」

それに対抗すべくアーデライトも三度トルナードに換装してソードライフル二刀流で

立ち向かう。

「はああああ！」

「せいやああああ！」

ブレードフィンとソードライフルがぶつかり火花を散らす中、紫音とアデライトはお互いに笑みを浮かべている。

「俺も負けてられねえな！」

「くつ」

そんな二人を見てレオンも蓮華とガンブレイドの二刀流で相手のエクレール装備を押し返し、そのまま連続攻撃を仕掛けて撃墜判定に追い込む。

「ああ、負けちやつたわね」

「よし！他の連中は……」

その一方で飛鳥とイクスは徐々に追い込まれており、日向はまだ自分の相手を抑えるので手一杯という状態だ。

「こつから近いのは……飛鳥の方だな！」

瞬時に状況を判断したレオンは飛鳥の援護へと向かう。

「助太刀するぜ！」

「レオン！」

「美奈がやられたの!?」

そこから2対1で押し込み相手を撃墜判定にするも、その間にイクスが撃墜判定をもらってしまい、日向が2機にから攻撃を受けていた。

「ごめんなさい、私……」

「俺と飛鳥で何とかするから気にはすんなって」

「そうそう、私達に任せて」

そうしてレオンと飛鳥が日向の援護に向かう中、紫音とアデライトの戦闘も佳境へと差し掛かっていた。

「はああああ！」

「しまつ!?

紫音の放つガントレットのスラスターを活かしたブーストブローがアデライトの持つソードライフルを弾き飛ばし、そこへ回し蹴りを叩き込んでアデライト自身もソードライフルを弾いたのとは別方向に吹き飛ばし、右のガントレットにエネルギーをチャージする。

すると、ガントレットの一部が変形して放熱フインが展開される。

「ガントレットバスター・フルドライブ!!」

そして、スラスターを全開にしてアデライトへと突撃する紫音はまるで緋色の流星の

ようであつた。

勿論、アデライトもアルカンシエルに換装して迎撃を試みるが、どうも防御フィールドを展開しながらの突撃のようで効果は薄く、ミラージュに換装しても耐えきれないと判断したアデライトはそのままその攻撃を受け入れた。

『試合終了！、激闘を征したのはチーム・ペープルラビッツだあ！』

アデライトを撃破する前にレオン達も残りの2機を撃破していたようで、試合は紫音達の勝利に終わった。

「完敗ですね」

「いえ、エクストリームが土壇場でのパックを作ってくれなかつたら負けていたのは僕達だつたと思ひます」

「そうですか……次の試合の健闘を祈ります」

「はい」

アデライトと握手を交わす紫音。

そんな二人を見てイクスは申し訳なさそうにしていた。

「大丈夫？ イクス」

「はい、日向さん……日向さんこそ私がやられてしまつたせいで」

「そういうのは言いつこなしだよ。次また頑張ればいいんだから」

「はい」

日向に励まされなんとか立ち直つたようだが、これからは一回戦程甘くない事を実感するペープルラビッツの面々。

「次は乱音さんのこととあのイランの代表候補生がいるチームか」

次の試合にはまだ詳細の明らかになつていらない専用機を有するチーム・キヤツトがいる。

もしかしたらそちらが勝ち上がつてくる可能性を考え、彼らは控室のモニターにて次の試合を観戦することにするのであつた。

20話 二回戦③

『次の第三試合はチーム・神龍ＶＳチーム・キャットの試合となります』

『今回はゴルベイエグリスターの第三世代兵器が見れるといいな』

『知ってるならこつそり私には教えてよ～！』

『アレは言葉だけだと説明し難いんだよなあ』

第三試合は乱のいる神龍とウルファのいるキャットの対戦。

「相手チームの専用機の第三世代兵器について少し調べてみたのだけれど、どうもあの機体の第三世代兵器はまだ試験段階のものらしく、データが少なくて詳細は一切わからなかつたわ」

「そう……元よりダメ元ではあつたけど、そこまでかあ～」

「ウルファさんも一応軍属つてことだし、一回戦の映像を見ても油断ならないかと」

「とりあえず気を引き締めていきましょ！」

今回の乱達の装備は乱が風翼、美与は隼、渚はアサルトイーグル、紗代子がアクイラと前回に似た編成ではあるが、茉優が最初からヒップボグリフを装備している。

対してウルファ達は第三世代機のゴルベイエグリスターに加えて種子島装備の鋼

が2機とハイザ装備のハイザが2機の編成だ。

『へえ、そういう編成でくるつて事は“アレ”を出すか』

『えつ？つてことは……』

『お待ちかねのもんが見られるぞ』

「前の試合では使わなつた装備を使う気になつたみたいね？」

「貴女達は油断できないのは前の試合で判つてる」

乱の言葉にウルフアは簡潔にそう返す。

『それでは二回戦第三試合…………試合開始！』

試合開始直後、先に動いたのは意外にもウルフアであつた。

味方を後方に下がらせたウルフアは丁度乱達と下がらせた4機の中間に位置取るとその場でクルリと一回転して赤い薔薇の花弁のような形をしたものバラ撒く。それを見て会場の一部がざわつく。

『雪兔君、あれつてまさか……』

『なんだ、もう気付いたのか』

その花弁の正体に江里子の表情が引きつる。

それも無理もない、何故ならその正体は……

『まさか……“銀の福音”と同じ広域展開エネルギー弾！？』

去年の暴走事件当初は秘匿されていた銀の福音だが、ナターシャがＩＳ学園に赴任してきた際にその詳細が公開され、ある程度情報を収集していれば知る事ができるようになつており、実習等でナターシャと戦闘をしたこともあり、故にその厄介さは多くの生徒が知つている。

「正解」

「ウルファアがそう告げると花弁の一部が拡がり、乱が咄嗟に龍咆の風圧で散らそうとするも、花弁はその影響を受けず龍咆の射線上のものだけが迎撃され、残りが乱達に近付き爆発する。」

「くつ」

「風で舞つてゐるよう見えるけど、全て彼女の思念操作つて訳ね」

「そうこうしてゐる間に辺りに花弁が展開されており、花弁の弾幕の向こうから種子島とハイザの射撃が飛んでくる。」

「こつちの機動力を封じて安全圏からの射撃で仕留めるつて作戦か…………どうする？」

凰

「ちよつと一か八かになるけど私がウルファアを何とかするわ。そしたら私はこの試合じゃ動けなくなるから後は任せるわよ？」

「わかった」

乱が何か操作している間、紗代子と渚が花弁を迎撃し、美与と茉優が弾幕を突破出来ないかと試みる。

『雪兎君、乱音さんは何をしようとしてるの?』

『多分、先行量産型の鋼竜に試験的に搭載した特殊モードだな。まあパイロットへの負担がキツイから制式量産型の鉄竜はオミツトされてる』

『暗証コード入力……システムロック解除……起動コード・四竜招来!』

いくつかの手順を経て乱が声を上げると乱の鋼竜に変化が起こる。

風翼を展開したままバツクパツクの龍の頭部が炎牙のものに換わり、両腕に雷爪のガントレットが装備される。

そう、乱が起動させたのは鋼竜の全装備展開モード、コードネーム【四竜】風翼の翼、炎牙の頭部、雷爪の爪、鉄竜には無い鋼竜の尾で竜の4つの要素を持つので四竜だった。
『鋼の武神と同じ全部載せ?』

『似てるようで違うぞ。簡単に言うとあの形態は鈴の煌龍を再現した形態でな。各パツツの相乗効果でスペックが跳ね上がるんだが、エネルギー消費とパイロットへの負担がやばくてな』

『あく、全部載せですもんね』

鋼竜・四竜を展開した乱はその強化されたスペックを使い強引に花弁の弾幕を突破し

てウルファに迫る。

そして、ボロボロになりながらも両腕でウルファのゴルベイエグリスターを掴むと至近距離にも関わらず炎牙の口が開いて龍崩火のチャージを開始する。

「そんな事をしたら貴女も!?」

「貴女さえ何とかすれば私のチームメイトはやつてくれるって信じてるからねっ！」
チャージ中も花弁による攻撃はしていたがウルファ自身も巻き込んでしまう為に躊躇つてしまつたのか、乱を崩す事は叶わず龍崩火のチャージは完了してしまう。
「これが私の全力全開よっ！」

至近距離で発射された龍崩火は乱諸共ウルファを襲い双方のＳＥを削り切る。

『うつわあく…………無茶すんなあ、あいつ』

『自爆特攻つて…………』

その後はウルファが撃墜された事で花弁の弾幕が消え、乱の特攻に啞然とするキヤットの残る四人を紗代子達が撃破して試合は神龍の勝利に終わった。

『あく、今回の試合だが、他の生徒は決して真似しないように…………自爆は死ぬ程痛いぞ』

『自爆つて…………もしかしてやつた事が?』

『一回だけな…………もう一度とやりたくねえけど』

尚、この自爆。福音事件で足止めをする為にやつたらしく、事件から少し経った頃にそれがバレて関係者一同からお説教を受けたそうな。

21話 二回戦④

『二回戦最終第四試合はチーム・シルバーファングVSチーム・クインテットです』

『個人的には二回戦で一番やらかしてくれそうな試合だな』

『一回戦のアレがありましたもんね、このチーム』

アレというものはISS5との試合の最後の合体武器とそれを迎え撃つたキャロルの斬艦刀の激突である。

『それもあるが…………ちよつと面白い因縁があつてな』

そう言つて雪兎がフェルトに視線を向けると、フェルトはビクリと肩を震わせる。

『例の首輪ちゃん？…………あく、そういうこと』

江里子も雪兎の言いたい事を理解してルークに視線を向ける。

そう、フェルトとルークはちよつとした関係があつたのだ。

「今はペイズリーさんだつけ？久しぶり」

「ど、どど、どうも……」

「あの時は色々とお世話になつたよ」

「めつ、命令でしたから……」

実はフェルトが亡国機業を抜ける前の最後の仕事がナターシャへの人質として監禁されていたルークの世話をだつたのだ。

その時は偽名のコードネームで呼ばれていたし、髪型等も変えていたので覚えていないかと思えばルークはしつかりフェルトを覚えていたようだ。

「まさか覚えていたなんて……」

「君は他の監視が暴力を振るおうとしたのを止めてくれたし、監視にしては色々と融通をしてくれたからね」

「あ、あれはルークさん達を怪我させたら人質にしておく意味がなくなりますし……」「フェルト、顔真っ赤」

「うつさい！これは当時の事思い出して恥ずかしかつただけよ！」

「これは怪しいですな」

「ですか」

「あんた達ねえ！そもそも私は加害者側であつちは被害者よ？そんな関係なのに恋愛感情に繋がらないわよ！」

キヤロルを筆頭にフェルトをからかうチームメンバーを見てルークはフェルトにちゃんと居場所が出来ていると安堵する。

「さて、恩人とはいえる赦はしないよ？」

「そもそもあんなことで恩人だなんて恩着せがましい人間になつたつもりは無いわよ！」

「なら遠慮なく」

『それでは二回戦最終試合、試合開始！』

江里子が開始を告げた直後、ルーク達へと

巨大な刀身が振るわれる。

振るつたのはキャロルで、初手から斬艦刀の一閃というド派手な一撃であつたが、ルーク達は散開する事でそれを回避する。

「いきなり容赦無いな、おい」

「でも、いい手でしょ？」

散開してバラバラになつた優斗に両腕のブレードバレルで斬り掛かる美乃里。

優斗もそれを双刀で受け止めるが、態勢が悪かつたのと美乃里がハイゼのスラスターを全開にしていたせいでルーク達から引き離されてしまう。

「開幕のアレはこれを狙つてたのか!?」

「発案はフェルトよ。組織にいた時の経験も使い様つてことよ」

他の面々もルークとフェルト、エクシアとキャロル、アリスと此花、栄と真白、とうように分断されている。

「専用機持ちの僕とブランケットさんを専用機持ちのクロコデイルさんと君で抑えれば経験が豊富とは言えない他のメンバーでも勝ち目はあるか…………これはしてやられたね」

「ちつともそんな顔してないのにそう言われても嬉しくないわね…………それだけ仲間を信じてるつて事かしら？」

「それは君も同じだろう？学園に来ていい仲間に恵まれたようだね、お互に」

「それに同意したげる！」

レオーネ装備のフェルトのグリフォーネが有線式ヒートチャクラムを投擲しつつ双銃剣で斬り掛かるとルークもシルバリオファングのプラズマチーンソーでチャクラムを弾いて応戦する。

チーンソー相手に鍔迫り合いは悪手とフェルトは双銃剣をガンモードに切り換えて射ちながらスラスターを全開にして後退。

ルークも深追いはせずシールドを取り出して射撃をガードしつつも腕に仕込まれたプラズマガンで反撃する。

「あ～もう！チーンソー相手に近接戦闘なんてやつてられるか！」

レオーネからアクイラに換装すると、フェルトは組織に在籍時から使用しておりオプション装備として持ち込んだ武器も一緒に展開する。

それは大型のアサルトライフルの銃身の下にブレードを付けた癖の強い武器。

フェルトはその武器『ベルセルク』を構えてトリガーを引き無数の弾丸をルークに向かつて放つ。

「おっと……中々凶悪な武器だね」

「だつてこれ、組織時代に上司レグルスが趣味じやないからつて私に押し付けた武器だもの。才ブション装備にする申請は手間だつたわ！」

一方、エクシアとキヤロルの戦いはエクシアのソードビットとキヤロルが液状金属によつて模倣したソードビットがぶつかり合い、お互に両手のブレードで斬り合う戦いとなつていた。

「そのスライムみたいなの汎用性高いね」

「うん、色々出来る」

キヤロル本人はのほほんとした印象を受けるが、鍔迫り合いになれば形状を十手のようなソードブレイカーへと変えてエクシアのブレードを折ろうとしてくるので油断も隙も無い。

そんな戦いが続いてしばらくしてエクシアがソードビットのエネルギー補給の為にバツクパツクのコネクタにソードビットを戻すと突然バツクパツクが爆ぜてダメージを受けてしまう。

「えっ!? 一体何が」

『うわあ…………そういう使い方も出来んのか』

混乱するエクシアを他所に解説の雪兎はその爆発の原因がキヤロルの仕業と氣付いていた。

『雪兎君、一体何が起きたんですか?』

『簡単な事さ、ソードビットと打ち合わせた時に微量の液状金属を付着させ、そのソードビットがコネクタに戻る際にその間に挟み込ませて内部から破壊したんだよ』

『うわあ…………』

「ふつふつふ、驚いた?」

「うん、驚いた…………というか、もう私詰んでない?」

「うん、今回は私の勝ち」

その間にもソードビットモドキがエクシアのカリバーンに突き刺さつて変形し纏わりついてしまっており、エクシアは既に戦闘不能に陥っている。

その後、システムからも戦闘不能判定されてしまつたエクシアが退場となり、エクシアから回収した液状金属を使い再びソードビットモドキを展開するキヤロル…………ど
うも気に入つたらしい。

「よし、皆の援護に行こ」

そうしてキヤロルが最初に目をつけたのは此花と交戦中のアリス。

「ざんかんとくはこれくらいの大きさでいいかな？」

液状金属を使い再び斬艦刀を生成するが、その大きさはアリスの使うストームブレイカーと同じくらいに小さくしている。

「此花、ちょっと退いて！」

「オッケ！任せた！」

そして、此花と入れ替わるように飛び込んでくるキヤロルにアリスは困惑する。

そこへビームサイズから弓に持ち換えた此花が援護射撃を加え、一気にアリスは劣勢に陥る。

「くつ、このままでは……」

人數の不利を強いられ、専用機持ちがフリーになつてしまつたのを機に戦況はクインテットに傾いた。

そんな中、ルーカとフェルトの戦いにも決着が着こうとしていた。

「はあ……はあ……ここまでやつても、勝てないなんてね……」

「僕としてはエニグマを使わされた事に驚きなんだけどね」

既にフェルトのグリフォーネはボロボロで、切り札だつたベルセルクもブレードがプラズマチーンソーで削られたのか刃こぼれしてしまっている。

あの後、ルークの接近を許してしまったフェルトはベルセルクのブレードで応戦したものの、プラズマチエーンソーとバツクパックのシェルカノンを食らいダメージはレッドゾーンとなつたが、お返しにとベルセルクのガンモードを至近距離から放つてルークにも少くないダメージを与えたが、ルークが奥の手であつたエニグマを発動させてフェルトを撃破寸前に追い込んだのだ。

「でも、私は私の役目を果たしたわよ」

「ああ、してやられたよ」

フェルトを撃破したとしてもルークも既にＳＥを半分以上削られており、キヤロルがエクシアを倒して遊撃になつてしまつた事でチームとしてはルーク達の方が劣勢。

優斗が美乃里を破つたものの、直後にアリスを倒したキヤロルと此花の攻撃でダウ

ン。

葉も真白を倒せずにおり、此花が援護に向かつたので程なく撃破されるだろう。

拳句にはルークの方には未だに万全のキヤロルが向かってきている。

「フェルト、大丈夫？」

「これが大丈夫に見える？ つて事で後はお願ひ」

「がつてんしようち」

「また変な言い回し覚えて……きつと美乃里ね？ 後で締めとかないと」

試合はルークがキヤロルに破れ、真白と此花の2人に攻められた栞が降伏した事でクインテットが勝利した。

試合後、他はα組ばかり残つたトーナメントにて唯一の他組とあつてクインテットの面々は注目を浴びる事となつた。

三回戦はそれぞれのISのダメージが大きいので翌日に行われる事と運営から通達があり、その後は2年生の試合が行われたが……やはり兎一味が突出した実力を見せつける形となり、見学していた1年生達はそのレベルの違いを改めて思い知る事となつたのであつた。

22話 兎一味、暴れる

1年生のトーナメントの後に行われたのは2年生のチームトーナメントなのだが……雪兎達兎一味は制約を課された状態で参加していた。まずは雪兎を除く面々の制約だが、チーム人数は二人、組み合わせも学園指定というものの。

一方、雪兎はといえばまたしてもソロで一般生徒にはアドヴァンスド・複数装備の使用禁止、とかなり厳しい制約を受けているのだが……

「弾幕つてのはこうやるんだよ！」

「鬼！ 悪魔！ 兎！」

両腕のダブルガトリングシールドブースターに両手のアサルトライフル、バツクパックと脚部に付けられたスラスター兼ミサイルポッド、左右の腰に備えたサブアームで保持したビームマシンガン、バツクパックから大型ビームキャノンとリニアレールガン、そこにエナジーウイングからのエネルギー弾の広域殲滅射撃。

そう、皆のトラウマ【G：ガンナー】のアップデートモデル【GR：ガンナーリード】である。

「何でそれも改良されてるのよお!?」

『あれ、絶対肩のアーマーにも何か仕込んでるよね?』

『あつ、仲間が盾となつて距離を詰めた!』

「せめて一太刀!』

「狙いは悪くねえが、そこはまだ射程圏内だ』

すると、肩のアーマーが開き無数の発射口が姿を現す。

『あつ』

「オリジナルブレンドの特殊合金弾だ、全部持つていけ!』

そこから放たれたベアリング弾が一気にSEを削り取る。

『至近距離での特殊合金ベアリング弾の雨ですか?』

『エゲツな……』

これには実況解説の3年生も絶句である。

トドメに残った相手をシールドを反転させメガビームキヤノンを展開して撃ち落とし、自身は一度の被弾も受けない完全試合を達成する雪兎。

『やっぱ兎一味はおかしい』

『他のペアもなんで2対5で圧勝出来るの?』

『兎一味だからね……』

思い出されるのは既に退学となり聖剣事変にて逮捕されているが、亡国機業に所属していたレインダーリルとフォルテペアが瞬殺されたタッグトーナメント。あの衝撃はその後の襲撃でも薄れる事はなかつた。

ちなみに他のメンバーのペアはこうなつてゐる。

一夏・簪

鈴・アレシア

篝・セシリ亞

カロリナ・エリカ

本音・晶

シャルロット・聖

ラウラ・ロラン

何組かは勝ち上がつていく中でぶつかり名勝負を見せた。

一夏・簪ペアとラウラ・ロランペアの戦いは開幕一夏と簪のダブル荷電粒子砲でインレを破つてハイゼンスレイモードになつたラウラを簪が追い詰め、ページされたインレのページをロランが操つて一夏に仕掛けたが、一夏が一刀両断してラウラが涙目になつてしまい、一夏・簪ペアの勝利後にロランがラウラに高級和菓子を奢る事で何とかおさまつた。

他にはカロリナ・エリカペアとシャルロット・聖ペアの試合は開幕からシャルロット・聖ペアの飽和弾幕が放たれるも、カロリナがそれを耐え切りエリカが聖を撃墜する戦果を出す。

しかし、カロリナも弾幕を耐えるので精一杯だったようで結局はシャルロットが二人を撃墜した事で決着した。

「雪兎兄達、今日も元気だなあ」

「いや、元気つてレベルじやねえよな!?」

「これが噂に聞く兎一味の戦闘……」

「流石は雪兎先輩です！」

そんな兎一味の試合を観戦していた1年生組はその出鱈目なISと技量に驚きっぱなしである。

「あの二重弾幕もヤバいけど、あれを耐え切ったゼンナーシュタット先輩もヤバい」

「兎一味最堅の名は伊達じやありませんね……」

「そりやああの堅さで突撃してたらそれだけで武器になるわ」

雪兎のトラウマ弾幕はさておき、カロリナの防御の堅さは1年生達から見ても異常というレベル。

機体の防御性能もあるが、バリアの展開速度や何処に防御を集中させるのかという判

断の的確さが段違いで、守るだけでなくその堅さを最大限に利用したバリアフィールドタックル等の攻撃転用等の応用力にも優れている。

また、技術者としても最近は弟子雪兎への指導でその面白さを知った束自ら指導しているのもあつてかなり伸びているらしく、優斗がカロリナから聞いた話では雪兎達が最近新たに設計しているISの1つはカロリナに一任されているという。

「くうく、僕も早くそういう事やつてみたい！」

「優斗は研究会に参加してからほんとに変わったよね……」

尚、優斗は現在雪兎から「鋼のカスタマイズでどこまで性能をアップさせられるか?」という課題をもらつており、今日の試合には間に合わなかつたがオリジナルのパックを作成しているのだとか。

「おっ、しつかり観戦してるようだな」

そこに先程試合を終えた雪兎がやつてくる。

「雪兎先輩っ！」

それに空かさず反応した日向が飛んでいくが、ガシリと頭をアイアンクロールで掴まれて停止する。

「少しは場所考えろ！このワンコー！」

「ああ～！」

ギリギリと頭を締められているはずなのに日向の声は何故か恍惚とした色が含まれているように聞こえるが、紫音達はもう慣れたと言わんばかりにスルーしている。

「コイツの事はともかく……お前らの I.S のメンテは終わつたぞ」

そう言つて雪兎が取り出したのは紫音達の I.S の待機形態。

明日の試合に間に合うように今回は1年生の I.S は全て雪兎が作つたメンテナンス装置で行つている。

「ありがと、雪兎兄」

「すみません、御自身の試合もあるのに……」

「気にすんなつて、今日の俺の試合は済んだし、人数が人数だから専用にメンテマシン作つてそれで自動メンテさせただけだからな」

「サラッととんでもない事してるわね……」

鋼竜を受け取りつつ顔を引き攣らせる乱。

「さてと、俺は他のチームにも届けてこなきやいけないからもう行くわ」

「うん、じゃあね、雪兎兄」

その後、紫音達は残りの試合を観戦して先輩達の動きを学び、寮に戻つてからはそれぞのチームで活かせないか話し合うのであつた。

23話 三回戦 ダークマテリアルズ出陣

トーナメント2日目。

三回戦第一試合には遂にダークマテリアルズが出陣した。

「やつと出番だ！」

「相手はマドカ達ですか……不足はありませんね」

「我らの力、ここで見せつけてやろうぞ」

「皆やる気ねえ！」

「頑張りましよう、イリス」

彼女らのISは基本的に雪兔が使っていたアドヴァンスドシリーズを一つのISとして再設計し直したもので、機体性能は破格と言つても良い。
まずはレビューのバルニフィイカス。

青みかかった黒の装甲に蒼のクリアパーツが取り付けられた他のISに比べて小型で軽装ではあるが、バツクパツクの蝙蝠の羽を模した推進器兼防御武装であるアクティブクローカーを装備しており、手にしているのは斧、大鎌、大剣、槍等に変形するライトニング・スラッシュヤーを主装備としている。

また、蒼い雷撃を放つ事も可能で撹乱や奇襲を得意としている。

基本的に「当たらなければどうということはない」を地で行くスタイルであり、機動力に関してはマテリアルズ随一とされる。

次にシユテルのルシフエリオン。

こちらも赤みかかった黒の装備に真紅と赤いクリアパーツを取り付けたデザインになつており、レヴィと違いガツチリと装甲を着込んだ防御力に優れた姿をしている。

特徴的なのは左腕に装着された大型ガントレットであるプラスチクロウで、バッклーとしても使用でき、掌に炎熱砲が内蔵されていて掴んだまま零距離で発射する事も可能という攻撃的な装備である。

プラスチクロウとは別にルシフエリオン・ドライバーという槍型の砲撃杖を持つており、そこから放たれる直射炎熱砲の火力は凄まじい。

続いてディアーチエのエルシニアクロイツ。

こちらは黒、紫のカラーリングに金の縁取りが施された法衣のようなデザインで、背中に3対の黒い翼のようなユニットがあり、そこから羽根状のダガービットを発射する。

メインウエポンはルシフエリオン・ドライバーと違い本格的な魔法の杖に見える砲撃杖のアロンダイト。

他にも4基のビームカノンビットのランスロット、無数のダガービットのプリンガー、デイアーチエ用に新造されたカイトシールドくらいのフローターシールドを2枚装備しており、後方からの指揮管制と援護砲撃を得意とする。

お次はユーリのスピリットフレア。

他のメンバーに合わせてか本来は白い装甲を黒くしており、淡い紫の縁取りを施した御子服のような、デザインとなつていてる。

その武装の半分は背面の翼型のユニットであるマテリアルウイングに集約されており、翼から大型アームに変形する2対の主翼とそこに装着されている4枚のフローターソードシールドで構成されている。

大型アームは更に変形して砲身となり、ヴエスパー・カノンやエネルギー・ブレードとしても使用出来る。

だが、その最大の武器は翼から放出される真紅のナノマシンで、これを利用して散布エリア内のものからエネルギーを奪い自身のエネルギーに転換してしまうという領域支配型ともいふべき恐ろしい装備を持っている。

幸いにも今回のトーナメントではその使用は禁止されている。

最後にイリスだが、雪兔のアドヴァンスドに彼女に適合するものがなく、新造された専用機アスタリアを与えられた。

このアスタリアだが、専用装備は銃身の短い専用ソードライフルが2つとバツクパックのサブアームで保持しているシールドブースターウエポン2基と少ないのだが、専用ソードライフルであるガンスラッシュヤーは刀身をカッターナイフのように長さを調整したり刀身を分割して蛇腹剣として使えたりし、刀身を隨時拡張領域から取り出して延長し続ける事が可能なので伸縮自在とかなり厄介な装備になっている。

シールドブースターウエポンは右にビームキャノン、左にガトリングガンを備え、サブアームから外して遠隔操作ユニットにする事も可能と中遠距離を重視した設計がされている。

「相手にとつて不足無し！」

「マドカやる気だね」

「私達も頑張ろ！」

「どこまでやれるかわからぬけどね」

「制限が掛かっているとはいって、全員が雪兎兄様のアドヴァンスド相当……」

対するマドカ率いる妹分同盟は機体数の不利を抱えており、この試合は勝敗よりも妹分同盟がどこまでダークマテリアルズに食らいつけるかというのが焦点になっている。
さて、試合を始める前に提案がある

だが、それでは面白くないとディアーチェがある提案をする。

「この試合、我らは我と右腕たるシユテル」

「は」

「左腕のレビイ」

「はい！」

「この3人で相手をしよう」

「なんと、ディアーチエはユーリとイリス抜きの3人で相手をすると告げたのだ。

「こちらとしては助かるが、いいのか？」

「機体性能に機体数の有利があつての勝利となつては観客もつまらんだろう？それにウチのバトルジャンキー共が昨日はお預けを食らつておつてな」

つまり、シユテルとレビイのガス抜きも兼ねているとのこと。

「慢心は命取りになるぞ？」

「はっ！慢心せずして何が王か！」

何処ぞの金ピカ王のような事を言いつつも、ディアーチエの顔に油断は見られない。

『何勝手にルール変更してんだ、お前ら…………まあ、それくらいしねえとまともな試合になんねえか。今回は特例で認めてやるからユーリとイリスはこっちこい』

「はい！」

そうしてユーリとイリスが実況解説席に移り、改めて両チームが向かい合う。

『さて、色々とありましたが、遂に公式戦でベールを脱ぐダークマテリアルズに対するは
人数の不利を跳ね除けて勝ち上がつてきた妹分同盟！』

『今回は実況解説にユーリとイリスを迎えてお送りするぞ』

『3人共々頑張つてくださいね～』

『王様、これで負けたら承知しないわよ？』

『ふつ、両腕の揃つた我らが負けるとでも？』

「燃えて参ります」

「頑張るよ～！」

ユーリとイリスの激励にディアーチエは不敵な笑みを浮かべ、シュテルは静かに闘志
を燃やし、レヴィはテンションを上げる。

『それでは三回戦第一試合！試合開始！』

「シュテル」

「はっ」

開幕した途端に事前にチャージしていたと思われる3連炎熱砲のディザスターヒー
トが妹分同盟に放たれる。

「全機散開！」

防御が危険な事は去年のタッグマッチで判っているためマドカは散開を指示する。

これがシユテル単体を相手にするならば正解であつたが……

「僕を忘れたならダメだよ?」

「なつ!?

散開したクロエの背後にいつの間にかレビイがおり、スラッシュヤーを振り抜いてダメージを与えるとそのスピードを活かして散開した他のメンバーに攻撃を加えていく。

「ハハハハ!スピードスピード! 僕はスピード! ヤツホーイ!」

「くつ、的が絞れない」

かと言つてレビイにばかり気を取られるとその合間を縫うような正確無比なシユテルの炎熱砲やパイロシユーターが襲つてくるのだからたまつたものではない。

「そういえばディアーチェさんは!」

「!? しまつた」

そこでシユテルの隣にいたはずのディアーチェが姿を消している事に気付く。

慌ててその姿を探すと、ディアーチェはアリーナ中央の上……全てを見下ろせる位置に陣取り、アロンダイトを構えながらその周りに4基のカノンビット展開してチャージを行つていた。

「気付くのが遅いわ! 全てを喰らえ! ヨルムンガンド!」

そうして5つの砲門から放たれたのは大蛇のような黒くうねるような砲撃が放たれ、

真っ先に墜とされたのはコメット姉妹。

やはり他の3機に比べてスペックが低いのが大きかったようだ。

「ここまでね」

「ごめんなさい」

その次に撃墜されたのはディアーチェの行方を探して足を止めてしまったクロエだ。そこにヨルムンガンドが掠り、残ったSEをシユテルの炎熱砲で削り切られてしまつたのだ。

その間にマドカは蘭に護られながらレーヴァテインのキヤノンモードを発射してヨルムンガンドを減衰させて止めるも既に3対2にまで数を逆転させている。「強いのは知っていたが、ここまでとは……」「マドカ！ 危ない！」

「雷光輪・追の太刀！」

完全に試合の主導権を握られ疲弊するマドカにreviveがザンバーモードで放った飛び斬撃を咄嗟に蘭がマドカを突き飛ばして身代わりとなつて受ける。

「蘭！」

「あとはお願ひ」

その一閃によりパイロシユーターでSEを削られていた蘭もリタイアとなり、残るは

マドカ一人だけだ。

「ただではやられんぞ！」

「受けて立つ！」

ソードモードに戻したレーヴァテインとザンバー モードのバルニフイカスがぶつか
り火花を散らすが、危険を察して下がるとマドカが直前までいた地点をブラストファイ
アが通り抜ける。

「外しましたか」

「ならばこれはどうだ？」

続けてディアーチエからダガービットのプリンガーが雨の様に放たれ、レーヴァテイ
ンを盾にする事で耐えるもそのレーヴァテインがボロボロにされものはや武器としては
おろかスラスター ユニットとして使う事すら難しい。

「ははは…………亡国機業にいた時は私より強い者など極少数だつたが、井の中の蛙で
あつたようだ…………兄さん側についたのは正解だつたな」

「貴様はまだ強くなれるだろう…………が、今は我らの方が上手という事だ」

「必ず追い抜く」

「待つておるぞ。シユテル！ レヴィ！」

「かしこまりました…………疾れ明星」

ディアーチエの呼び掛けにシユテルは目の前にエネルギー集束し。

「オッケー！轟雷爆滅！」

レイヴィは周りにいくつもの雷光球が発生させ、それが剣へと変わる。

「紫天に吼えよ、我が鼓動」

そして、ディアーチエの頭上にてカノンビットが魔法陣を展開する。

「グラヴィトンキャノン展開！エネルギー集束！」

対するマドカも拡張領域からグラヴィトンキャノンを展開してチャージを開始する。

「雷刃封殺爆滅剣！」

「全てを焼き消す焰と変われ！ルシフェリオンブレイカー！」

「出よ、巨重！ジャガーノート！」

「Gインパクトキヤノン発射！」

3人それぞれの必殺技がマドカ目掛けて放たれ、マドカもフルチャージしたGインパクトキヤノンを発射して対抗するが、3対1では拮抗する事も許されずに撃ち負けてしまい3色の光に飲まれてしまう。

『し、試合終了～！何かとんでもない攻撃の撃ち合いになつてましたけどマドカちゃん大丈夫ですよね！』

『ちゃんと非殺傷モードにしてたみたいだし、大丈夫だとは思うが……4人共やり過

ぎこだ』

『あわわわわわ……』

『これ、後でお説教コースね』

雪兎が慌ててアリーナのシールド出力を上げたから何とかなつたが、4人の必殺技の
撃ち合いはかなり危険だつた模様。

この後、すぐに目を覚ましたマドカを含む4人は雪兎からお説教される事になるので
あつた。

24話 三回戦 兎龍激突

ダークマテリアルズの圧倒的な試合の次に対戦するのはパープルラビッツと神龍。尚、クインテットはこのまま四回戦へ進出が決まっている。

『この試合が実質BEST3決定戦！そう思うとこのトーナメントを大詰めですね』『俺らの時はトラブルばつかで最後までやれたトーナメント少ないんだよなあ』

『でしたねえ』

まともに完遂したトーナメントは最後の学年末トーナメントくらいのような気がする。

『この試合の見所は何処でしょうか？』

『実力は五分っぽいな。乱は奥の手見せてしまつてるし、エクストリームも新しいパックがそんなホイホイ生成できる訳でもないしな』

『なるほど』

今回の両チームの布陣は……：

紫音が最初からブレイズ装備、レオンと飛鳥は隼装備、日向とイクスは変わらずミラージュとSパック装備だ。

対するは乱が近接戦闘用に雷爪、美与が隼、渚がアサルトイーグル、紗代子がアクイラ、茉優がヒップボグリフとこちらもいつもの編成だ。

『それでは試合開始！』

江里子の開始の合図と共に前に出たのは紫音、レオン、飛鳥、乱、美与、茉優の六名。イクスは狙撃、日向はイクスのカバーに回り、渚と紗代子はその妨害に動く。その結果、前衛組は紫音と乱、レオンと茉優、飛鳥と美与に分かれ、イクス・日向と渚・紗代子という戦いになつた。

「私に近接戦闘を仕掛けてくるなんていい度胸じゃない！紫音」

「確かに乱さんに接近戦はリスクが高いかもしないけど、龍咆の拡散攻撃を封じるには乱戦に持ち込まないといけないからね！」

手甲と爪、蹴り等の打ち合いに加えて少し距離が離れれば乱は龍咆球、紫音はガントレットに内蔵された小型砲・ブレイズショットで牽制しつつ、隙を見ては衝突を繰り返す。

他の面々はどうかというと、飛鳥と美与は紫音と乱のよう接近戦を演じてはいるが、有利なのは美与の方である。

その理由はお互いの武器にあつた。

飛鳥が使うのは鋼に元からある蓮華と雛菊の二本の日本刀型近接ブレード。対する

美与が使うのはIS用の刃渡り1M程のMVBのナイフ。

高周波ブレード

このナイフと打ち合い続けたことで飛鳥の蓮華と雛菊の耐久値をゴリゴリ削られ既にレッドゾーン。

一方、美与の方はまだ何本も予備のナイフを所持しているのでこのままでは飛鳥は武器を失い一方的な戦いになってしまいかねない。

『…………あの娘、他の娘に隠れがちだけどヤバいわね』

『近接タイプはやり辛いだろうな』

そして、レオンと茉優の方は茉優のヒツボグリフの機動力にレオンが押され気味となつてている。

やはり魔改造の施された高機動パック相手では分が悪い。

それでもアンカークロー等、受けたら致命傷になりかねない攻撃はしつかり手にした二本のブレードで弾いているところを見るにレオンには高速戦闘のセンスがありそุดと雪兎は目を付ける。

「(やっぱ速度じゃ勝てねえか……なら一か八かだ)」

そんなレオンが賭けで使ったのは瞬時加速。

去年の1年生でこの時期に瞬時加速を使えたのは専用機持ちの極一部くらいで、今年の1年生でこれを習得している生徒いなかつた。

つまり、レオンはほぼ独学で瞬時加速を習得していった事になる。

だが、驚くのはまだ早かつた。

レオンが瞬時加速を使つた事に慌てた茉優は急いで後を追うのだが、前方にいたレオンの姿が突然消えたのだ。

その原因は茉優が追つてきたのを確認したレオンが瞬時加速中に進行方向とは真逆に再度瞬時加速……個別連続瞬時加速を行つたのだ。

それにより茉優のバツクを取つたレオンは再度個別連続瞬時加速で斬り付ける。

『はあ!? 個別連続瞬時加速!?

『くくく……クハハハハッ！ マジかよ、俺でも軽く進行方向変えるくらいにしか使えねえのに前後で乙の字走行とか普通なら視界がブラックアウトすつぞ』

いくらISにパイラット保護機能があるとはいえあんな無茶な機動をすれば身体への負担だつて馬鹿にならない。

だというのにそれをやつてのけたレオンに雪兎は笑いが止まらない。

それはまるで何かを見つけたかのようなロツクオンする目である。

その後、茉優を何とか降したものの、いきなりの個別連続瞬時加速3連発の負荷が大きかつたようで、スラスター各部からアラームが鳴り響く。

なのでレオンはスラスターへの負担を考えて隼から防人にバツクを切り換え飛鳥の

援護に向かつた。

前衛組がそんな高速戦闘を繰り広げている中、後衛組の戦いは弾が飛び交っていた。
「いって！」

紗代子のアクリラと渚のアサルトイースターイー・ガルにSパックでは対処出来ないと判断した
イクスはDパックに装備を換装し、
マルチカスタムレーザーライフル
M C L LはキャノンバレルにSパックのミニ
ガトリングガンを付けた状態に。

そのM C L LとDパックの装備であるピアッキングレイ、クラスター・ミサイルコンテ
ナを使って弾幕形成しとにかく近付けさせない戦い方を行う。

日向もグレールとミラージュの変則組み合わせであるニュアージュフランス語で雲
へと換装し弾幕形成に協力している。

対して紗代子と渚は接近出来ないのならばと狙撃を試みるも、日向のカバーリングが
上手く通してはくれない。

「これは思つたより厄介ね…………私が盾になつて飛び込んだらワンチャンある？」

「無理ね。飛び込んでも落とせてシアハートさんだけよ。その後に紫陽さんに落とされ
るでしょうね」

渚が昨日の2年生の試合で使われた戦術を提案するも、紗代子は首を横に振る。

アサルトイーグルは近接戦闘向けに装甲は厚めになつてゐるので盾役は何とかこなせるものの、グリフィオーネに防御向けの装備は今のところなく、下手接近すれば日向が展開している一角獣の紋章による一撃でアウトになりかねない。

そう判断され、とにかく前衛組へ援護させないようこのままの状態を維持すると決めた二人は弾幕を躊しつつ狙撃を繰り返すのであつた。

そういうしてゐる間に紫音と乱の戦いも激しくなつていく。

紫音がガントレットを変形させて丸鋸状のエネルギー・ブレイズサー・キュラーを展開して攻撃すれば、乱は鋼竜にのみ装備された龍尾に予備の青龍偃月刀を持たせ両手の二本を含めた変則三刀流にして振るう。

「やるわね！ 紫音」

「機体のおかげだよ。ブレイズじやなきやとつくにやられてる」「謙遜は過ぎると嫌味よ！」

そう言うと乱は腕から高電圧縛鎖を射出し、紫音はそれを躊してサー・キュラーを飛ばして反撃するも、龍咆によつて迎撃されてしまう。

しかし、紫音はすかさずブレイズショットをグミ撃ちして足を止めソードモードにしたソードライフルを二本取り出して斬りかかる。

両手の青龍偃月刀でそれを受けた乱は龍尾で掴んだ三本目で紫音を攻撃するが、紫音もそれを読んでいたのかそれを蹴り飛ばして弾くとそのまま後退する。

『おつとーここで水戸ちゃんが落ちたわね』

『今年の1年はどいつもこいつも面白い事やつてくれる』

茉優が脱落した事を知り、紫音と乱も勝負を決めるべく動き出す。

「お互いにSEは僅か……この一撃が勝敗を分けるわね」

「なら、お互いに出し惜しみは無し、だね？」

乱が雷爪のクローカーを伸ばし電圧を高めると、紫音もガントレットを変形させて三爪のクローカーとし、通常ならばブレイズショットの発射口である部分に意図的にエネルギーを溜め始める。

「轟け雷鳴！雷電竜爪！」

「灼熱！ブレイズバンカー！」

必殺の一撃がぶつかり合い火花とスパークがお互い残り少ないSEをジリジリと削る。

ゲージの減りは紫音の方が若干速く、乱は自身の勝利だと笑みを浮かべるが、紫音も笑みを浮かべるのを見て何かがおかしいと気付く。

「あれ？前の試合では最後の一撃の時に放熱フインを展開していたはず……」

しかし、今の紫音のガントレットはクローアの部分しか変形しておらず、放熱フインを展開していない。

つまり、紫音はまだ熱エネルギーを何処かに溜めている。それは何処だ？

そこでは漸く乱は氣付く。

「紫音！アンタまさか？」

「そのまさかさー！雪兎兄やシユテルの真似だけど、これが僕の奥の手！プラス・トブレイズ！」

そう、撃たずにチャージし続けていたブレイズショットのチャージショット……プラス・トブレイズが零距離で炸裂し、紫音のSEが尽きる寸前のところで乱のSEを全て削り取る。

『うつは…………シユテルの零距離プラス・トファイア真似しやがったのか、えげつない』
『どうか、去年のタッグマッチで雪兎君もやつてたよね？それ』

江里子の言るのはイージスコンビを正面から叩き潰したあの試合である。
「あー！大人しそう顔してえげつない手を切つてくるじゃないのー！」

「僕の勝ちですね、乱さん」

「ええ、負けよ負け、完敗だわ」

その後程なくしてレオンの加勢で美与を降した飛鳥がイクスと日向の援護に向かい、

それにより逆転がほぼ不可能だと察した紗代子が渚と降伏した事でパープルラビッツの勝利となつた。

「私達に勝つたんだからせめて次も勝つて決勝でダクマテ共に一矢報いなさいよ?」

「あはは……勝てとは言わないんだ」

「……いや、あれは無理でしょ」

自信家の乱もマドカ達が完封されたあの試合を見て力量差はキチンと把握したようで、ハツキリとダークマテリアルズに勝つのは無理と告げるのだつた。

25話 準決勝？実質決勝戦

『つてな訳で四回戦こと準決勝なんだが、ここで勝ち上がった方がダクマテとやるから実質決勝戦みたいなもんだと思ってくれ』

『ぶつちやけやがつたよ、この兎……』

三回戦が終わって直ぐにパー・プルラビッツのメンバーのI.Sが修理され、準決勝が始まつたのだが、雪兎がぶつちやけた通りダークマテリアルズを決勝へとシードさせ、残つたパー・プルラビッツとクインテットの対戦を実質決勝戦と扱うと今回の大会運営委員会は決定した。

『もうここまでこればチーム紹介は要らんだろう。俺から言えるのは一つ「悔いだけは残すな』

『それでは準決勝パー・プルラビッツVSクインテット！試合開始！』

「いくよ、皆！」

「おう！」

「はい！」

意気揚々と飛び出すパー・プルラビッツ。

「あ～もう!ここまで来たらやれる限りやつてやんわよ!」

「お～、フェルトがやる気だ」

「あれはやる気というより自棄よね?」

「それは言わないであげて」

「あははは……」

「そこ!くつちやべってないで行くわよ!」

「はい」「

一方のクインテットはいつものノリである。

「僕がクロコデイルさんを抑えるからその間に」

「させるかっ!」

パープルラビッツはキヤロルのアズラエルに唯一対抗可能な紫音をぶつける作戦
だつたが、それはクインテットも承知だつたようで紫音の行手をフェルトが阻もうと前
に出る。

「それはこっちのセリフだ!」

そんなフェルトをブロックしたのはレオン。

「レオン!」

「いいからお前はクロコデイルのどこへ向かえ!」

「う、うん」

「行かせーーー」

「お前の相手は俺だ！」

レオンのブロックで紫音に抜かれてしまったフェルトは仕方なく先にレオンの相手をすることに。

そのアシストのおかげで紫音はキヤロルが他の三人に仕掛ける前にキヤロルの元に辿り着く。

「追い付かれちゃつた」

「クロコディルさんの相手は他の皆じやキツイからね、僕が相手をするよ」

「うー、暑いのヤ」

变幻自在の液体金属操るアズラエルだが弱点が無いわけではなく、紫音が使うブレイズや鉄竜の炎牙などの高熱を発する装備との相性が悪い。実はスコールが使うゴールデン・ドーンやシユテルのルシフエリオンが最大の天敵

これは液体金属が熱で気化されてしまうものもあるが、制御に使っているナノマシンが高熱化した液体金属の中で融けてしまい機能しなくなるというのが原因だ。

ナノマシンであるが故にちょっとした温度変化ならまだしも高熱にはめっぽう弱いのである。

紫音がこの対処法に気付いたのは去年の体育祭で行われた雪兎と楯無の戦闘記録を見たからで、同じ流体制御ならば同じ戦法が有効であると知っていたのだ。

ただ、ブレイズでアズラエルを相手にする場合、接近しなければならない為に常に自身を高熱化する必要があり、早期に勝負を決めなければエネルギー切れになりかねないリスクがある。

「はっ！」

「ヤ」

紫音がブレイズショットを放てばキャロルは液体金属でシールドを張らずに回避する。

光学兵器を防げるのに何故ブレイズショットは回避を選んだのか、それは光学攻撃であるビームとブレイズショットの違いが関係していた。

『……』で軽く科学のお話といこうか。ビームやレーザーってのは基本的に荷電粒子砲と同じで荷電粒子を粒子加速器で加速させて弾丸とする技術だ。その歴史は意外にも1980年代に研究が行われていたそうだ』

『へえ〜』

『しかし、当時ではその加速器の小型化と使われる電力最低でも10GWの問題から実用化に至らなかつたらしい。開発の歴史はまた有志に調べてもらうとして……現行

の光学兵器は引っ括めて言つてしまえば何かしらの粒子を加速させて放つ粒子加速砲
というわけだ』

『成程』

『前置きはこれくらいにして、なんでクロコデイルが防御でなく回避に徹してるかだつ
たな。これは光学兵器が反射可能という点だ。レーザー加工機が良い例で、あれは発信
部分からレンズやミラーを使って加工部にレーザーを照射して焼き切る工作機械だ。
クロコデイルは液体金属で防御する際に表面を鏡面にすることで反射減衰させてんだ
ろ』

『雪兎君もビーム反射させる戦法は得意ですもんねえ……あれと同じ原理ですか』

『対して紫音が使ったブレイズショットは高温に熱したエネルギーを直接叩き込むタイ
プの攻撃でな。言つてしまえばエネルギー弾版焼夷弾だ』

『うわあ…………』

つまり反射不可能な高熱を浴びせられ使用可能な液体金属を減らされてしまうのだ
『更に言えば液体金属が色々応用出来るせいでのISの武装あれしか無いんだよな』

『つまり…………』

『相性最悪つて訳だ』

* * *

キヤロルが紫音に徐々に追い込まれる中、フェルトの足留めを買って出たレオンは先の試合の無茶によって丸つと新品と交換になってしまったスラスター類を酷使しつつ必死に食らいついていた。

「あ～もう！しつこいわね！」
「逃さねえ！」

フェルトはアクイラ装備での機動射撃で少しづつフレオンの鋼にダメージは与えてはいるものの、隼の機動性で強引に振り切っては蓮華とガンブレイドで反撃してくる。

（どうか、コイツほんとにIS使い始めて一ヶ月!?一回戦の娘達といい、コイツといい何でこんなのが在野に埋もれてんの!?）

組織にいた頃はIS適性があるのを知らなかつたのでISにこそ乗つた事は無いが、いざという時に備えて一通りの銃器の扱いや近接戦闘法は教えられていたし、ISに関する知識もあつたフェルトに対してレオンはまるつきりの素人だ。

おそらく1年生の使っている新型量産機が旧来機より扱い易く作られているのもあるが、それ以上に才能の有無があるのだろう。

（このレオンとかいうヤツの才能はおそらく耐G適性と高速戦闘。高機動タイプの隼すらアイツの反応に少し遅れてるわね）

パーティを新品に換えたばかりというのもあるが、前の試合で見せた個別連続瞬時加速

という絶技を経験したことで機体性能が搭乗者に追いつけなくなつてゐるのだ。

その反応速度の遅れは隙となり、そこへフェルトのライフルが火を噴く。

だが、レオンはそれをピアッキングシールドを射線上に投擲する事で防ぎ、瞬時加速でフェルトに組み付くとそのままアリーナの防壁に突き進む。

「ちよつ!? アンタまさか」

「そのまさかだよ!」

アリーナの防壁は兎師弟によつて物理的な強度とバリアフィールドの二重の備えが施されており、その鉄壁つぶりは以前にクラス代表戦のときに防壁を貫通した「S：ストライカー」のパイルバンカーの改良型ですら傷一つ付けられないとかいうもので、あの千冬が「これを破るとなると零落白夜があつても骨が折れるな」破れないとは言つていないと云ふ恐怖

その防壁に自分ごと突つ込むという暴挙に慌てるフェルトだが既に遅く、表面のバリアフィールドに激突した瞬間に絶対防御が発動してしまいフェルトのグリフォーネのSEが尽きる。

「いつたあ……やられたわ、私の負けね」

「いや、引き分けだなこりや」

見ればレオンの鋼はSEこそ僅かに残つてゐるがボロボロで、特にスラスター周りは

酷い事になつてゐる。

「直してもらつたばかりなのにそんなに壊して……怒られるわよ? あの人には
「だよなあ……」

その光景を想像したのか顔が引きつるレオンを見て「ご愁傷様」と苦笑するフェルト。
「あつちも終わつたみたいね」

「だな」

紫音とキヤロルの方も結局は追い付いた紫音が最大火力の一撃を叩き込んだ事で決着したようで、他の六人の方は日向が撃墜判定を受けたもののイクスと飛鳥が美乃里達を破つたようだ。

「次は王様達とか……ところでき、ペイズリー」

「フェルトで良いわよ、で?」

「これ、決勝までに直んのかね?」

「…………あの否常識師弟なら出来るんじやない?」

こうして準決勝は閉まらない終わり方で終わつたのであつた。

26話 終幕、チームトーナメント

少しの休憩と整備時間を設けてその時は訪れた。

『いやー、長かったトーナメントもこれで最後ですね』

『ほんの数日が長く感じるな……約1年くらいにチームトーナメント編の連載期間感じたな』

『試合内容濃かつたですもんねえ』

『てなわけで1年の部決勝戦だ』

決勝戦はここまで何とか勝ち上がったパープルラビッツに対し圧倒的な存在感を持つダークマテリアルズ。

その2チームによる決勝戦が始まろうとしていた。

「よくぞここまで辿り着いた！」

「うん。きたよ、王様」

「紫音他も良い表情をしておる」

「そりやな、ここまで来たらやれるとここまでつてな」

「お~レオもやる気~」

「私も楽しみです」

「今度は私も出るわよ」

今回はダークマテリアルズもフルメンバーのようで、ユーリやイリスもスピリットフレアとアスターイアを纏っている。

『長つたらしい前説や紹介も要らんだろう？お互いに存分にやれ』

『決勝戦、ダークマテリアルズＶＳパーブルラビッツ……試合開始！』

「いくよ、皆！」

紫音達パーブルラビッツが一斉に動き出す一方でダークマテリアルズは動かず待ち構える。

どうやら先手を紫音達に譲るようだ。

『先に仕掛けたのパーブルラビツツ！ 狙いはユーリちゃんね』

『まあ、機能限定してるととはいえ、ユーリのスピリットフレアが厄介な事に変わりはねえからな』

紫音達もそれでユーリを落とせるとは思つてはいなかつたものの、彼らの放つた射撃攻撃はユーリのフローターシールドから発生したバリアフィールドによつて焼き消されてしまう。

「堅いのは知つてたけど、今のが一発も通らないって理不尽よね」

「反撃来ます！」

そこへ先手は譲つたダークマテリアルズの反撃……無数のパイロシユーターとそれを縫つて前に出るレビイ、さらにはパイロシユーターを掻い潜つてもイリスのガンスラッシャーのウイップモードが襲い掛かるという鬼仕様。

「あの弾幕の中を何で突っ込んでこれんだよ!?」

「このソードウイップも生き物みたいに変幻自在です！」

このコンビネーション攻撃に紫音、レオン、飛鳥の三人は乱数回避、イクスと日向は防御を選択。

前衛三人は散らされ、防御力の低いイクスを日向がカバーしてはいるものの身動きが取れない状態へと追い込む。

『うつわ、初手からエグいじゃないですかあ…………』

『あのフォーメーションはほんと厄介だからな…………まだ後ろにディアーチェヒューリ控えてるし』

『…………ちなみに雪兎君ならどう突破します？』

『同じく弾幕で返すか、レビイひとつ捕まえて盾にしながらシユテルへ突撃して弾幕止めにいくかな？カロリナならブレイクフィールド展開しながら強引に突破出来そうだが………』

『トーナメントでも暴れてたもんね、あの娘…………あの二人のフルバースト耐えきるとか堅いにも程があるわよ』

元々センスがあつたのか、カロリナとリリコンバージュの相性が良かつたらしく、体育祭以降に兎一味に加わったメンバーで2トップの成長率を誇っている。ちなみにもう一人はエリカで、長距離狙撃に関しては既に兎一味で右に出る者がいないレベルに達している。

それはさておき、シユテルはパイロシユーターの制御と並行してディザスターヒートを放ち始め、レビイは狙撃手であるイクスを守る盾役の日向を引き剥がす為に強襲を仕掛け、それを何とかしようとする紫音、レオン、飛鳥の三人はシユテルのパイロシユーターやディザスターヒート、イリスのソードウイップ、ディアーチェやユーリの放つ砲撃に阻まれ完全に封殺されていた。

『あつと！ここで日向ちゃんが落ちた！』

『そのままシアハートも刈られたか…………こりや全滅も時間の問題…………あつ、ディアーチェがグラビティブラストの構えに入つた』

『パープルラビッツの三人も阻止しようと攻撃するけど、ユーリちゃんにブロツクされて初手の二の舞いだ』

『うわ、ただのグラビティブラストじゃなくて拡散グラビティブラストかよ…………神城

を庇つて進藤が落ちて、その神城は直後にディザスター・ヒートでノックアウトか』

『残った弟君は……イリスちゃんが落としておしまいね』

『もう少し善戦するかと思つたが、やっぱマテリアルズ相手はキツかつたかあ…………』
やはり経験が違い過ぎたようでダークマテリアルズの勝利に終わつた決勝戦。

まあ、最初の弾幕で落とされた者がいないので善戦はしている。

そして、その後に行われた2年生のトーナメントでは兎一味が上位をほぼ独占しており、今回は2人掛かりで挑んだ一夏と簪を返り討ちにした雪兎が優勝して観戦に来ていた各国の要人達は改めて「絶対にアレとは敵対したくない」と兎一味のヤバさを実感した。

3年生？ ほぼ楯無の独壇場だつたとだけ言つておこう。

こうしてチームトーナメントは何のトラブルもなく終了したのだが……

* * *

ー衛星軌道上・特別留置所ー

そこは危険度S S級の犯罪者を地上と隔離しておく為に建造された宇宙の監獄。

その管理は徹底されており、数名の職員しかおらず、囚人のいる区画とは隔絶し機械的に管理する程。

脱獄するには牢を抜け出して宇宙服を纏い物理的に離れた管理区画に月一しか来な

い定期船に乗り込むか、IS等の宇宙空間で活動可能なパワードスーツを着て脱出するか、ではあるが、そもそも囚人区画には宇宙服は置かれておらず、ましてやISなんて置かれているはずもない。

そんな場所にオータムは囚われていた。

過去に護送中に逃亡、嚴重な留置所からの脱獄にネビュラガスを注入された副作用か異常な身体能力の強化と通常の留置所では拘束が不可能と判断されたが故に彼女はここに収容されている。

「…………クソ」

しかも食事は必要最低限の栄養素を詰めたレーションに宇宙空間という点を利用して牢内は無重力となつており、身体を鍛えるのが難しいのも脱獄をより難しくしている。

「…………あの兎共め…………次こそは…………」

そんな環境にあってもオータムの心は折れていなかつた。

ネビュラガスによる好戦的な性格への変貌もあるが、それだけ雪兎やシャルロットへの憎悪が強いのだろう。

『ほう、この環境下で未だに折れぬ憎悪…………ヤツが目を付けていただけはあるようだ』
オータムしかいないはずの牢内にいつの間にか銀色のパワードスーツのようなもの

を身に着けた何者かがいた。

「てめえ、あの蛇野郎のプラッドスタークお仲間か？」

その姿はかつてオータムをスマッシュに変えて脱獄させたプラッドスタークによく似ていた。

『同じ变身システムを使用してはいるが、仲間ではない。彼は取引相手の一人ではあるが、それはキミの知るスタークとは異なるスタークだろうな』

「？」

『今重要なのはそこではない……キミはここから出たくはないかい？』

「なん、だと？」

いきなり現れたソイツはそうオータムに囁く。

『キミは天野雪兎…………世間一般には兎一味と呼ばれる彼等に恨みがあるのだろう？私は彼の師である篠ノ之東に恨みがあつてね。キミを同志として勧誘に来たのさ』

警報装置も何も作動してはおらず、悠長に話し続けるソイツにとつてここへの侵入やオータムを脱獄させる事等容易い事なのだろう。

そして何よりも篠ノ之東に恨みがあるというのはボイスチエンジヤー越しにもハツキリと判る憎悪の感情が乗つっていた。

故にオータムはソイツの言葉に乗つた。

「いいぜ……アイツラに復讐出来るなら、悪魔の誘いだろうと乗つてやるよ」
『クフフ……いいですね。それと私の事はこの姿でいる際はこう呼んで下さい』

オータムの言葉に気を良くしたソイツはやつと名乗りをあげる。

『“ウイスパー・デビル”と』

「はつ、テキトーに言つたつもりがほんとに悪魔とはね！」

こうして裏で銀の悪魔ウイスパー・デビルが静かに動き出す。

27話 兎のお誘い

トーナメントから数日が経つたある日、レオンは雪兔から呼び出しを受けて彼が管理する研究棟にやつてきていた。

「先輩からの呼び出しとか嫌な予感しかしねえ……」

トーナメント中に相棒である鋼を何度も酷い損傷をさせてしまい迷惑を掛けた自覚のあつたレオンはその事についてアレコレ言われるのではないかと思つたが、紫音や優斗からはそういう用件ではないだろうと言われホツとする。

だが、ディアーチエからは何故か同情の視線を向けられたのが上の嫌な予感に繋がっている。

「ようやくきた」

そんなレオンを入口で出迎えたのはカロリナだつた。

「ゼンナーシュタット先輩？」

「名前の方でいい」

「うつす、ならカロリナ先輩で……で、カロリナ先輩が何でここに？」

「師匠に言われて貴方を迎えてきた。ついてきて」

恐る恐るカロリナの後を追つて研究棟の奥へと案内されると、そこには雪兎の他に研究会のメンバーも揃つており、増えレオンは呼び出された理由がわからなくなる。

「おつ、きたか」

「あつ、はい」

「ちょっと待つてくれ、もう少ししたら”コイツ”の調整が済むから」
雪兎のその言葉にレオンが部屋の奥を見ると、そこにはダークグレーの装甲を持つ1体のISがハンガーに鎮座していた。

「このISは……」

「プロジェクトフロンティアは知つてるな？」

「えつ、あつはい！先輩達が立ち上げた新宇宙開発計画ですよね？」

「そのプロジェクトの新型IS開発チームが開発したはいいが、あまりにもじやじや馬過ぎて俺に投げてきたのがコイツ、黒雷だ」

「黒雷……」

「何か開発メンバーに日本のロボットアニメヲタがいたらしくて和名にしたんだとよ」

「は、はあ……」

何故そんな話を自分にするのかわからないレオンはそう返す。

だが、次の雪兎の言葉は意外過ぎるものだった。

「これ、お前の今後の専用機な」

「はあ?! ジャジヤ馬ってさつき言つてましたよね!」

聞けば代表候補生や国家代表レベルでも持て余すじジャジヤ馬というのだからレオンの反応も当然である。

「いやー、加速性能はピカイチなんだが、高過ぎて軽くスピード上げようとしたらトップギアまで上がつちまうような性能でな。なら止まるのはどうするんだつてなつたら慣性制御で強引にスピード落とすとかいう具合でな」

「それって、トップとローしかギアが無いってことじゃ……」

「そういうこつた。だからそこを改良してメインスラスターだったそれを大型のサブスラスターとしてメインスラスターを通常のに取り換えたんだ」

そのおかげか通常の動作なら支障が無い範囲に収まつたものの、やはり戦闘時にサブスラスターを稼働させるとハイ＆ローの極端な出力になつてしまふんだとか。

「何でそんな機体に俺が……」

「お前がトーナメントでやつた個別連続瞬時加速の使い方、あれが決め手だ」

あの無茶苦茶な乙字走行を行えるレオンならばこの黒雷も扱えるのではないか?と目を着けたのだ。

「コアは今の移植するし、武装面も希望がありや少しは聞いてやる」

「俺は……」

その後、レオンは黒雷を受領することを承諾し、今はその試運転の為にアリーナに来ていた。

『一次移行は問題なく済んだな』

一次移行を終えた黒雷はダークグレーだった装甲が漆黒となり、一部のフレームと縁が黄色に変化していた。

「はい、さつきよりも動かし易くなつたというか、俺に最適化されたつて事ですかね?」

『そうなるな』

武装は元から装備されていた実弾とビームの複合ガトリングガンの付いたガトリンギシールドにグレネードランチャー付きビームサブマシンガン、出力が高くて並の慣性制御では反動で自身が後ろに吹つ飛び兼ねない専用ビームガンに加えて、レオンの要望で柄の部分を連結する事で双刃刀になるヒートブレードとアサルトライフルを追加している。

『移行後のデータも取るから出てくるドローンを色々やつて落としてみろ』

「はい!』

アリーナに出現したドローンを次々と落としていくレオンはふとある事を試してみ

ようどローンに向かつて加速し、その目前で急制止しながら回し蹴りでドローンを蹴り碎いたのだが……何故かその蹴りの軌道上に衝撃波の刃のようなものが発生してその先にあつたドローンが両断されてしまう。

『…………おい、今何やつた？』

「えつと…………制止する時の慣性制御で行き場を失くしたエネルギーを変換して衝撃波として放出した？」

『何サラツと“牙の玉璽”の牙みたいな事やつてんだよ、コイツ…………』

その後の検証の結果、牙としてではなく砲弾のようにも飛ばせ、少しの間ならそれを溜めておいて後から放つ事も可能だと判明した。

「牙と角の複合型かよ…………確かに概念的には似たような理論使つてるととはいえ、なんつーもん作つてんだよ…………それにそれを初めて使つてやらかしたコイツもコイツでおかしいし…………」

多少は手を加えたとはいえ、面白半分で世に放つた技術が生み出した想定外の成果とそれを使い熟してしまつたルーキーに流石の雪兔も頭が痛くなる。

「…………レオン」

「はい」

「お前、ウチのプロジェクト預かりにするから」

「は、はい…………つて、えつ!?」

「最初は黒雷をお前にぶん投げてデータだけ取らせてもらうつもりだったが、お前と黒雷放置しどくのは色々ヤバいと判断した。安心しろ、ウチの直轄になれば今より支援金増えつから」

「ええええええ〜〜!?

こうしてレオンは早くも兎一味に取り込まれる事になるのであつた。

番外編 スーパー口ボツト大戦30

○○○○①

これは春休みに起きたとある旅の記録である。

その日、雪兎は先日訪れたとある並行世界で起こつた現象の記録を見返していた。
 「あの時の謎の共鳴現象…………あれを再現出来ればアレも作れそうな気がするんだよ
 なあ」

そこで共闘した人物とのISの共鳴現象によつてお互いの機体を模した武装やパックを使用したのだが、その場限りのものでデータこそ残つたものの、その原因や理論は不明のままなのだ。

「他にも面白い機体のデータも取れたしなあ…………アイツらの機体を再現したの作つて
 データ取るのも面白そうではあるが」

ISやそうでないものまで色々といた全国IS祭と呼ばれていたあのイベントは雪兎からすれば未知のISやその世界の千冬等と戦えた満足いくイベントだった。
 「雪兎～、そろそろ休憩しよ？」

「聖からお菓子もらつてきた」

そこへシャルロットとカロリナの二人がやつてきた。

「もうそんな時間だつたか……」

「またそのデータ見てたの？」

「ああ、機会があればまた行つてみたくはあるな」

「雪兎に眼をつけられるなんて……お気の毒に」

本当にお気の毒な事にあの世界で知り合つた人達はこの兎に眼をつけられたばつか
りに様々な事件で首を突つ込まれる事になるのだが、それはまた別のお話。

「さて、今日の菓子はなんだ？」

「カタストロフィナンシエ（再現）」

「ちゃんとアレ再現したのかよ……地味に再現度高っ!?」

そんな事を話していたその時、突如警報が鳴り響く。

「この警報音、聞いた事無いパターンだけど!?」

「あく、先日追加した時空の歪みとかを検出した時のやつだな。発生地点は…………」

？」

次の瞬間、雪兎達三人は光に呑まれてその世界から姿を消した。

* * *

「…………うつ、一体何が…………」

「ここ、何処だろう？」

「それに、I Sが展開されてる」

強い光に呑まれたかと思えば三人は何故かI Sを纏つた状態で廃墟となつた街にいた。

「状況からいつて何処かの異世界に跳ばされたんだろうけど…………あの残骸からして嫌な予感しかしねえ」

雪兎の視線の先にあつたのはビルに叩きつけられたと思われる地球連邦軍主力M S „ジエガン“の残骸であつた。

「雪兎、それつて…………」

「M S…………宇宙世紀で発展した人型機動兵器だ」

故にここが宇宙世紀世界かと雪兎達が疑つていると、彼らのいる廃墟に何者かが突入していく。

「一旦隠れるぞ」

I Sの小ささを活かして廃ビルに隠れ様子について伺う事にした彼らの目に飛び込んできたのはジエガン全長20.4mを超える巨大な機体だった。

「全長約58m…………あんな機体は俺の知る限り宇宙世紀にはいなかつたはずだが」

「しかもあれ、多分量産型」

そう、カロリナの言う通りその機体は一機ではなく複数機おり、その規格化されたデザインから量産機であるのは明白であった。

現状ISしか戦力の無い雪兎達では勝てなくはないだろうが、手間と時間が掛かる上に、ISをこの世界の住民に見られるという厄難になりそうという問題もある。

なのでISを解除してその場に身を潜める事でやり過ごす事にした。

幸いな事にその機動兵器は1時間もしない内に何処かへと飛び去つていつてしまつた。

「まずは情報収集からだな……可能であれば俺達も何か機体を入手しておくべきだろう」

「賛成」

「うん、それにここには丁度良いのがいる」

そう言つてカロリナが示したのは先程のジェガンの残骸であつた。

「他にも何機がありそうだしな……このままスクラップにしておくよりは俺達が有効活用してやつた方が良さそうだな！」

「うん、私達が仇を撃つてあげるから有効利用」

「そんな事言つて……一人が弄りたいだけだよね？」

「うん！」

「…………似た者師弟だなあ、こんな状況なのに」

結局は実物のジエガンを弄りたくてしようがない二人にシャルロットは溜息をつく。

その後、情報収集の為にライフラインの一部が辛うじて生きていた施設でこの世界について調べたのだが………

「一年戦争にヘル事変、ミケーネ戦役、月面戦争、原種大戦から始まりウルガルの出現、グリップス戦役、第一次ネオジオン抗争、ブラツクリベリオン、キャンベル星人の侵略に第二次ネオジオン抗争、でゼロレクイエムで勝ち取った平和もラプラス事変で政情が崩れて瓦解………」

「奇病アルジャーノンやフォルツォイク事件、火星にヨロイもある」

「で、今はウルガルとザンスカール帝国が活動中…………カオス過ぎないか？この世界」

ここ十年の記録でコレである。

更に古い記録にはMS発展前にスーパーロボット大戦らしきものがあつたと語られているのだ。

過去一カオスなスーパーロボット大戦の世界だろう、この世界は。

「まだ各方面でバラバラに動いてる時期と考えるとゲームで言う主人公やその部隊は登場前つてどこかね？」

ここまでくれば先の機動兵器が今作のオリジナル敵勢力のものだと予想もつく。

「とりあえず回収したジエガンを改造して活動するとするか」

幸いにも回収できたジエガンは多く、何機かのパーツを継ぎ接ぎにすれば修理できそうという事が判り、ちゃんとした機体を建造するまでの繋ぎで使う事にしたのだ。

以前喚ばれた世界で手に入れたアイテムを使えば、別の世界を経由して帰る事もできたのだが、今回喚ばれた理由や原因を突き止めてからでないと今度はもつと大規模な人數で喚ばれかねない。

その為、とりあえずはこの世界の主人公らに接触して原因を突き止めようという事になつたのだ。

* * *

数日後……

「とりあえずジエガンの改修はこんなもんか」

廃墟の施設を勝手に改造して一時拠点とした雪兎達は回収したジエガンをベースに大幅な改修を加えて専用機として完成させた。

見た目はジエガンをベースに肩をジムカスタムタイプとし、脚部をアドヴァンスドハイズルのように改造。

ハイズルの腰のフロントアーマーのサブアームは付けず、サイドアーマーにスラス

ターとサブアームを内蔵したものを取り付け、ジーラインを参考に各部のハードポイントや装甲の付け替えで様々な状況に対応出来る機体に仕上がっている。各員のチューンナップは以下の通り。

【雪兔機】

バツクパツクにスタークジエガンのものを改造した四基スラスターを装備し、肩にフレキシブルスラスター付きのアーマーを装着。

シールドの先端がパンツアーアイゼンのようなアンカークローになつており、敵の拘束や引き寄せ、緊急回避等に使われる。

【シャルロット機】

通常のスタークジエガンのオプションを元にしたアーマーを装着し、シールドにパイルバンカーを内蔵した専用シールドを装備する。

【カラリナ機】

フルアーマーガンダム（TB）のようにバツクパツクからサブアームでシールドを一枚構え、両腕にもシールドガトリングガンを装備した重装仕様。

さて、雪兔達にMSが操縦出来るのか？という問題だが、仮にもIS操縦者の三人が全くの素人という訳もなく、操縦システムのアレンジ等は加えてはいるが少しのシミュレート訓練で操縦はこなせるようにはなった。

「さしづめジエガンカスタムとでもいったところかね」

「これで本命の材料集めが出来る」

「この混沌とした状勢にすっかり適応しちやつてるよ、この二人……」

こうして雪兔達はジャンク屋紛いの活動を開始したのであつた。

スパロボ30②厄ネタ拾つた

ジエガンカスタムが完成して活動を開始した雪兎達だが、その完成前にとあるものを入手しており、その扱いに困っていた。

「どうみても厄ネタの臭いしかしねえ…………」

それは転移された廃墟を探索していた際に発見した水晶片型データ端末。

雪兎は辛うじてそれが何なのか知つていた。

「何でリリカルなのはのアイテムがスパロボ時空にあんだよ」

そう、それはリリカルなのはの劇場版作品である「リリカルなのは REFLECTION」に登場した「イリス」という存在が入つていた端末にそつくりだつたのだ。

実を言えばこのREFLECTIONが雪兎が転生前に見た最後の劇場版作品で、続編のDetonationは見る前に事故に遭い転生してしまっているので地味に続きが気になつていたのだが、転生後の世界にもリリカルなのはシリーズが放映された事があつてその存在を知つた直後に視聴している。

その為、イリスやその内に眠る真の黒幕についても知つており、それ故にこの端末がどれだけ危険なものか判つているのだ。

どうも雪兎達と同時期に跳ばされてきたらしく、その衝撃で機能不全になつていたのは幸いである。

「とりあえず外部との接続してない端末で調べてみるか」

そうして調べてみたところ、この端末はイリス本体に何かあつた際のバックアップとして作られたもので、量産型の姉妹とは違いほぼイリスと遜色ないイリスが保存されていた。

おそらくイリスの中に仕込まれた黒幕のバックアップがいざという時の為に用意したもののが、まさか異世界に吹っ飛ばされるとは想定していなかつただろう。

しかも転移の際に端末の機能不全が起こつた影響でイリスのデータもかなり損傷してしまつており、特に記憶に関するデータが9割失われていた。

これに関しては雪兎が作つたマテリアルズ……特にユーリを見て暴走される危険が無いので一安心ではある。

しかし、黒幕ことファイル＝マクスウェルのデータはかなり深部に保管されていたせいかほぼ無事で、放つておくと厄ネタにしかならないと判断した雪兎は一部の技術データフォーミラ関連技術のみ吸い出して黒幕に関するデータは削除してしまつた。

「茅場といい、大尉戦場のヴァルキュリア3のダハウ大尉のことといい、山寺ボイスのボスキヤラは大抵理不尽だからさつさと始末するに限る」

「すごい実感籠もつてる……」

「で、この娘はどうするの？」

「流石にイリスも問答無用で削除すんのはなあ」

記憶もほぼ失つており、純粹無垢に近い人工知能を消すのは流石の雪兔も躊躇いがある。

「とりあえず別の端末作つてそつちに入れとくか」

未だに目を覚まさないようなのでとりあえずイリスのデータは他の機器に干渉出来ないようスタンドアローンの端末作つてそちらに移しておく事にするのであつた。

活動を開始してから数日が経ち、詳しい状勢や遺棄された機体がそれなりに集まつた。

「やつぱり怪しいのはこの【第30士官学校】だな」

「士官学校？どうしてそこが怪しいの？」

「場所が極東……日本つて言うのが一つ、もう一つは士官学校なのに他の士官学校に比べて資金や物資の流れが多い。十中八九何か裏で造つてる」

「スパロボ時空であるならば極東方面の基地に戦況を開拓する新兵器があるのは珍しい事でもないのでそれが主人公機やそれに類するものだと雪兔は確信している。

という訳で極東に向かう事になつた雪兎達は何処から調達した輸送機を改造して造つたレイディバード級輸送機ネザーランド兎の品種ネザーランドドワーフラビットからで極東へと旅立つ事に。

尚、仮拠点だつた施設は念入りに解体した。

それからまた数日……

「いや、助かつたぜ」

「旅は道連れって言うしな」

ネザーランドの同乗者に一人の男が増えていた。

男の名はエッジ・セインクラウス。

補給に立ち寄つた街で生き倒れていたのを雪兎達に救われ、その縁で同じく極東に向かつているというので同乗することになつたのだ。

話せば雪兎と同様義理の妹がいるらしく、その共通点で親しくなつたのと、（雪兎曰く）声が Sparo ボ常連の『彼』 杉田智和と思われる事から彼が主人公なのではないか？ という点から同行した方が都合が良いと判断したのだ。

それに行き先が同じく極東というのも彼が主人公だと仮定した場合、雪兎達の推測が正しかつたという事になる。

「（主人公が物語の起点となり得る場所に向かうつて事はそろそろ始まるつて事だな）この時、雪兔は単に物語が始まるくらいにしか思つておらず、これがこれから始まる想像以上に混沌とした戦いの幕開けだとは知る由もなかつた。

＊＊＊

極東エリア 大湊

極東エリアに着いた雪兔達は一度エツジと別れ、士官学校のある大湊へと立ち寄つた。

「極東エリアも他と大差無いようだな」

「うん、何処も戦乱で復旧が間に合つて無いみたい」

「機械獣軍団も頻繁に出現してゐるみたい」

「で、噂に聞く士官学校とやらは自治会長様の判断で避難民の受け入れをやつてると……」

士官学校が大湊基地に隣接している為か補給等は受けやすいのだろう。
そう考えるとその自治会長とやらは優秀な人間のようだ。

「エツジもそつちに向かつたみたいだし、俺達も行つてみるか」

そんな事を考へていると警報が鳴り響く。

「どうやらそんな暇はなくなつたみたいだな！」

「機械獸!?」

「シャル、カロリナ。俺達も出るぞ」

「えつ」

「余所の世界だろうが見捨てるのは性に合わねえからな」

「うん！」

「了解」

そうして光学迷彩で隠していたネザーランドに戻るとそれぞれのジエガンカスタムに乗り込む。

「天野雪兎、ジエガンカスタム。出るぞ！」

そうして大湊基地に戻ると基地に襲撃をかけていた機械獸に雪兔達とは別で攻撃を仕掛けた機体がいた。

「この基地のジエガントイチナナ式は全滅したって聞いてたが、まだ機体が残つてたのか？」

「雪兔、あそこ！」

シャルロットが示した先、格納庫から現れた機体は雪兔にとって予想外の機体だつた。

「なつ!? あれはアツシユ?! いや、細部が異なる…………だが、あれは間違いなく、ヒュッケ

バイン”！」

通信を傍受してみればその機体はヒュッケバイン30というらしく、偶々その場に居合わせたエツジが乗っているらしい。

「シャル、こつちも基地側に通信を」

「う、うん！」

『えつ!? 通信!?!』

『あそこにいるジエガン（?）から?』

「あ、俺達は傭兵みたいなもんでな。偶々通り掛かつたら戦闘に出くわしたもんで援護にきてみたんだが、指揮官は誰だ?」

『わ、私ですが……』

「今回はお試しサービスみたいなもんで無料で助太刀させてもらうが構わないか? そつちの機体に乗ってるのもどうも顔見知りっぽいしな」

『お前……雪兔か?』

「ちょっとぶりだな、エツジ。流石にこの数相手に初乗りの機体だと厳しいだろ?』

『助かる』

「つて訳でいくぞ、二人とも。相手は機械獣だ、何の遠慮もいらねえ!』

「うん!』

「ラジャヤー」

基地を襲つていたのはガラセクトV2という機械獸で両腕が斧と盾になつてゐるのが特徴である。

『それが五機程、雪兔からすれば多少物足りないくらいである。
『うそ……あの人達、強い』

『ヒュ～、やるねえ』

改造機といえどジエガンで機械獸を翻弄する雪兔達と初乗りであるはずなのにヒュッケバイン30を乗りこなすエッジ。

そこへ更なる援軍が現れる。

『大丈夫だ、ミツバ君…………じやなくて艦長！援軍が来てくれた』

そこに現れたのは通常とはカラーリングが異なるイチナナ式が一機。

『援軍つてイチナナ式が一機だけかよ』

「いや、ただのイチナナ式じゃないだぜ」

『こちらは新光子力研究所所属の兜甲児だ！要請を受けて救援に來た！』

そう、そのイチナナ式に乗つていたのは兜甲児だつたのだ。

『う、嘘!? マジンガーZの兜甲児さん!?!』

『その兜甲児さんが、どうしてここに!?』

『話は後だ！まずは機械獣を片付ける！』

『ヘル事変とミケーネ戦役の英雄、兜甲児ね……』

「（マジか、生兜甲児かよ……）」

顔には出していないが、生の兜甲児の登場に雪兎は興奮していた。

やはりメカヲタとしては元祖スーパーロボットのマジンガーZは思うところがあり過ぎる。

「（でも、イチナナ式があるってことはINFINITY確定じゃんかよ……あれも割と厄ネタだつたような……）」

そうして兜甲児も加わり有利になつたかと思いきや別方面から増援のガラセクトV2が現れ基地が攻撃を受けてしまう。

「チツ、少し調子にのりすぎたか」

すると、基地から通常の戦艦を遥かに凌駕する巨大戦艦が現れる。

『巨大戦艦だと!?』

『なつ！全長2000超え！軽くゼネラルレビルの倍はあるぞアレ！』

『あれが…………地球の希望…………！』

その戦艦はエツジや雪兎が言うようにあまりにも巨大だった。

尚、ゼネラルレビルが全長630mという事を考えればこの戦艦が如何に巨大である

かお分かり頂けるだろう

『ライストレーガー、回頭！同時に連装砲、発射準備！』

『ライストレーガー、回頭！同時に連装砲、発射準備！』

先程の指揮官と思われる女性と男性の声がするとライストレーガーと呼ばれた巨大戦艦は各部に備えた連装砲で増援として現れた機械獣を一掃してしまう。

「おいおいおい…………なんつう火力してんだ、あの戦艦…………」

『どんでもないものを隠してたもんだぜ』

『ありがとう、エツジに傭兵の皆さん』

『へ…………』

「え？」

『貴方が、貴方達が、ライストレーガーを…………この星の明日を守つたのよ』

『そんな大げさな…………』

『大げさなんかじゃない。私達が、このライストレーガーでそれを証明してみせる』

『そこからはあつという間で、むしろ過剰戦力というレベルで機械獣は殲滅された。

「（ヒュッケバインだけじゃなくオリジナルの超巨大戦艦とか…………この世界、割とヤバイ？）

『やつた…………やつたのね、私達！』

『はい、艦長！任務達成です！』

初陣が勝利に終わった事に喜ぶドライストレーガーの面々だつたが、そうは簡単に事は終わつてくれなかつた。

『喜ぶのは、まだ早いみたいだぜ』

そこに一機の識別不明機が乱入してきた。

「こいつはあの時の…………」

それは雪兎達が跳ばされてきた時に現れた謎の機体だつた。

『そつちのも、やれるな？』

『やりたくないって言つても見逃してくれる相手じやなさそうですよ』

「だろうな』

『各機は攻撃を！相手が何であろうとドライストレーガーは負けるわけにはいかないわ！』

そこから謎の機体を相手にする事となつたのだが、機械獣とは違つたタイプの機体で、機体サイズも違つたので少し苦戦したもののが何とか撃破に成功する。

『アンノウン、全滅しました』

『その正体は不明のまま…………わかっている事は…………』

『高い戦闘力…………それもとてつもないほど高い戦闘力を持つてるつて事か』

『ありがとうございました、甲児さん。直接、お礼を申し上げたいので、こちらに着艦してください。傭兵の皆さんもどうぞ』

『了解だ、艦長。その艦には、俺も興味がある』
「こちらも了解だ。乗ってきた輸送機があるからそいつも持ってきていいか?』

『構いません』

「シャル、カロリナ、先に着艦してくれ、ネザーランドを取つたら俺も直ぐに合流する」

「わかった」

その後、艦長と呼ばれた女性はエッジに声を掛ける。

『それとエッジ……』

『礼なんていいぜ。俺は人間として、当然の事をしたまでだ』

『ううん…………あなたのおかげでドライストレーガーはこうして発進できた。それにはお礼を言わせて』

『悪いが、そんなガラじやないんだ』

『こまではいい話つぽかつたのだが…………』

『でも、逃げようとするなら攻撃するわよ』

『へ…………』

『軍の機体の無断使用……エッジ・セインクラウス、あなたを拘束します』
「（まあ、 そうなるわなあ……仮にもあの機体は軍事機密っぽいし）」
こうして物語は幕を開けたのだつた。

スパロボ30③旅立ちの日

ドライストレーガー格納庫

「エッジ・セインクラウス君……無駄な抵抗はやめたまえ。こちらの指示に従わない場合は発砲も辞さないぞ」

副長のレイノルドに銃を向けられつつもエッジは無抵抗に機体を降り指示に従っていた。

「力むのはいいがよ……誰も抵抗なんてしてないだろうが」

「意外ね……ヒュッケバイン30を捨てて逃げるかと思つたのに」

「俺は悪い事をしたつもりはないんでな。だから、逃げる必要なんてない。軍のルールではNGだとしても俺のルールではGJだつたと思つている」

確かにあの場でエッジがヒュッケバインを動かしていなければドライストレーガーが無事に出航できたかは怪しい。

そうなれば基地がどうなつていたと考えればエッジの言い分もわからなくはない。

「こいつの言う通りだぜ、自治会会长……じゃなくて、艦長！」

「そうですよ。エッジさんが戦つてくれたおかげでドライストレーガーは発進できたん

ですし

それを支持するようにツナギ姿の青年ジークンやオペレーターをしていた女性のリアンがエッジの擁護に入る。

「(若い艦長だとは思つてたが、この艦長さんが例の自治会会長だつたのか…………となるとホワイトベースやアークエンジエルみたいに本来の艦長ではなく、何らかの理由で艦長にならざるえなかつたつてどこかね?)」

「それはそうだけど…………」

「みんなの気持ちはわからなくもない。だが我々は、もう任官を受けた軍人なんだ。軍人は軍人としてそのルールにしたがわなければならない」

「俺は軍人じやないぜ」

「君は黙つていたまえ!」

「黙つてられるかよ。そつちのルールを押しつけてくるならこっちにも考えがあるつてもんだ」

「や、やつぱり、抵抗するのか!」

「(この副長、微妙に頼りねえ…………)」

「ピリピリとした空気になつたところで二人の間に甲児が割つて入る。

「まあ落ち着けよ、二人共。事情はだいたいわかつた。俺からも彼を弁護させてもらう」

「甲児さん……」

「非常時に民間人が軍の新型に乗り込んで敵を撃墜する……過去にもそういった事例がなかつたわけじやないしな」

「そいつはどうなつたんです？」

「その後も軍に協力する事で事態を有耶無耶にしたよ。本人は渋々だつたけどな」

「アムロ・レイ、ですね？」

「一年戦争の英雄の!?」

「そつちの傭兵君は色々詳しいみたいだな」

「まあ、あの人は有名ですからね…………貴方と同様に」

雪兎がそう返すと甲児は苦笑する。

そんな中、やはりというか艦長のミツバは甲児の言葉に反発する。

「連邦の白き流星とこんな風来坊を一緒にはできません！」

「（連邦の過去のアムロ・レイの扱いを知つてんのかね？この艦長さん）」

一年戦争で發揮したその能力を恐れた連邦軍に軟禁状態にされたり、厄介事を押し付けたりと実はあんまり扱いが良くなかつたりするのはガンダムファンの常識とも言える知識である。

「悪かつたな。宿無し、ロクデナシ、甲斐性なしで」

「そこまでは言つてないけど……」

「そこからはとりあえず上位の人間に判断を仰ごうということになつたのだが……」

「その必要はない」

「この声は！」

「総員に告ぐ。私はドライストレーガー建造計画責任者のファイクス・ブラツクウツド准将だ」

「准将とはまた大物が出てきたもんだ」

通信と思われるその声の主は地球連邦軍准将と名乗つた。

「まずはドライストレーガーを無事に発進させた諸君等の健闘を讃えよう」

これには士官学校の生徒だつた現ドライストレーガーのクルーも驚いている。

「状況については報告を受けている。ヒュッケバイン30を無断使用した民間人についてもだ」

「……」

その声にエッジの表情は鋭さを見せているが事を起こす気はないようだ。

「諸君等も認識している通り、地球連邦軍は現在、未曾有の危機を迎えている。ドライストレーガーはそれを打破するための存在であり、その慣熟は我々にとつて最優先事項である」

おそらく新光子力研究所に協力要請を行つたのはこの准将だろうと雪兎と甲児は推測する。

「まだ学生であつた諸君を特例で乗員に任官したのもその一つだ」

「(この准将、絶対只者じやねえぞ)」

いくら最新鋭艦の為とはいえ、学生を動員させる程の強権を振るつたとなればその影響力はとてつもないものだ。

「ファイクス准将……我々の今後の作戦行動についてお聞かせください」

「ドライストレーガーは万能戦闘母艦であり、本艦を中心とする部隊は独立部隊としての運用を前提とする。別の言い方をすれば、既存の指令体系に本艦は組み込まれるべきではない」

「では……」

「諸君等は、当面は極東地区にてドライストレーガーの慣熟を目的とする行動を命じる」「具体的には何をすればいいのでしょうか?」

「それを考え、最善の道を模索する事こそが諸君等に求められる事だ。ドライストレーガーに関する資料、各セクションの機能その他についての情報はメインコンピュータに送つておく」

要は「自分で考えろ」という身も蓋もない言葉に再びクルーが騒ぎ出だが、「もう学生

ではなく軍人だ」と言われてしまい沈黙する。

そんな中、艦長のミツバは再びファイクスに問う。

「准将……ヒュッケバイン30を無断使用した民間人についてはいかがします?」

「ミツバ中佐……まずは君の見解を聞かせてもらおう」

「本艦の慣熟……それによる現状の打破こそが地球連邦軍における最優先事項と先程お聞きしました。事後承諾の形となります。ヒュッケバイン30により本艦を護衛した彼の行動もそれに則るものとして……特例により不間に処すべきだと判断します」

「(へえ……)」

このミツバの判断に雪兎は感心する。

「理屈としては間違いではない。だが、ヒュッケバイン30も計画の一端であり、軍機に属するものだ。それに触れた民間人を放免するわけにはいかない」

「了解しました。では、彼を私の監視下に置きます」

「は!」

「学内には他に適性な人材もいませんので彼にはヒュッケバイン30のパイロットを務めてもらいます」

「彼はそれに値する人間なのか?」

「それは、これから見極めるつもりです」

という訳でエツジの処遇はヒュッケバイン30のパイロットとしてミツバの監視下に置かれる事となつたのであつた。

＊＊＊

「では、改めてお礼を言おうと思つたのだけれど…………」

「自分達より歳下で驚いたか？」

「正直な事を言えば」

あれから雪兔達は艦長室に呼ばれ改めてミツバからお礼を言われていたのだが、彼らからしたら歳下に当たる雪兔達に驚いていた。

「傭兵を始めたのは割と最近だが、腕はさつき見た通りだ」

「カスタム機とはいえ、機械獣相手にあれだけ戦えるのであれば大したものだ」

同席した甲児から見てもその実力は十分のようだ。

「しかし、あのジエガンは何処から…………」

「戦場でスクラップになつてたのを数機分集めてレストアしたものをカスタムしたものだが？」

「えつ？」

サラツと言われた言葉にミツバとレイノルドは言葉を失う。

「別に基地から機体を盗んだ訳じやないんだから問題あるまい」

「いやいやいや!? そういう問題じゃなくて! それを自分達だけで! ?」

「こう見えて一技術者なんでな。素性はちと訳有りで話せないが」

「レイノルドはやはり何処か頼り無い。

「エッジとの関係は?」

「それは単に途中で生き倒れてたのを助けた縁で極東まで一緒に来たつてだけだ

「ああ、ソイツの言う通りだ……つてか、生き倒れてたとか言うなよ!」

「生き倒れ……」

ミツバのエッジを見る眼が少し厳しくなった気がする。

「で、あんたちはこれからどうするんだ?あの准将さんの話ではしばらく極東を回つて艦の慣熟を行うみたいだが」

「その事なのだけど……: 雪兎君達は傭兵なのよね?」

「一応な」

「なら、私に雇われてみる気はない?」

「ほう」

「ドライストレーガーの艦外戦力は甲兎さんとエッジの二人だけ。出来ればもう少し戦力が欲しいの」

「慣熟とは言つてもこの状勢じや何処で襲撃を受けるかわかつたもんじやないものな

……あのアンノウンみたいのがいるとなれば尚更に

雪兔としてもドライストレーガーが今後の物語の中心になると踏んでおり、それに関与できるとなればミツバの提案は好都合とも言える。

シャルロットとカロリナが黙っているのもそんな雪兔の考えがわかつてているからである。

「准将には私から話をつけておきます。だからお願ひできなかな？」

「そういう事なら雇われよう。これから世話になる、ミツバ艦長」

「ええ、よろしくお願ひするわ」

こうして雪兔達はまんまとドライストレーガーに滞在する権利を得たのであつた。
「あつ、そうだ。なら艦の設備を少し借りてもいいか？」

「というと？」

「実は今使つてるジエガンカスタムは仮の機体でな。本命の機体を建造中なんだわ」

「…………えつ？」

これには再びミツバ達が固まる。

「いや、せつかく最新の設備があるんだからそつち使つた方が造るの早いかなって」「へえ、面白そうじやないか。俺もその機体見せてもらつても？」

「甲児さんならむしろ歓迎するよ。というかジエガンみたいな改造じゃなくて完全な新

造だから他の技術者の意見も聞きたいと思つてたんだ」

「すみません、雪兎は技術者としては優秀なんんですけど、ちょっと発想がぶつ飛んではどうですか……」

「うちのマイヴィーみたいなタイプって事ですね……」

その後、許可を貰つた雪兎は輸送機に載せてあつた未完成の機体を降ろし、甲児と意見交換を始める。

更には話を聞きつけたジークンやマイヴィーも駆けつけあつという間に意気投合してしまうのであつた。

スパロボ30④凶鳥と勇者の系譜

あれから数日……ドライストレーガーは極東エリアを巡回しつつ慣熟航行を続けていた。

「にしてもコ^{ヒュッケバイン₃₀}イツ、どうもおかしな造りしてんなあ」

その格納庫にて雪兎はヒュッケバイン30を見上げながら呟く。

ベースは初代ヒュッケバインのようだが、最新鋭機のはずなのにパッチ・アーマーとADテープで補強・補修が行われているエクスバイン・アツシユと似たその外装もだが、ブラック・ホールエンジンと思われる主機が封印されており、補機のプラズマジェネレーターのみで稼働している点やリープスラッシュヤーの取り付け方法が同じヒュッケバインの系譜に当たるガリルナガンのそれに近い事等、過去のヒュッケバインシリーズをごちゃ混ぜにしたかのような妙な機体なのだ。

「分類もこの世界だと他にないP^{バーソナルトルーパー}T……絶対何か隠してゐるよな、これ」

この戦艦ドライストレーガーもゼネラルレビルの事を踏まえてこれだけの巨大戦艦を一から建造していたとは考えにくく、何かしら“元となつた何か”かヴァルストークのように“前文明が遺した設計図”が存在するのでは?と雪兎は考える。

そんな事を考えていると……

「こんなとこにいたのか」

「ジークンか」

ドライストレーガーの整備班のチーフメカニックであるジークン・リューが声を掛けてきた。

ジークンとは同じメカニックという事で割と直ぐに意気投合し、雪兔達の新型の開発にも手を借りている。

「艦長が集まれってさ」

「招集つてことは何かしらの任務かね？」

「さあ？ 詳しい話はブリーフィングに出ればわかるさ」

まだ戦力の整っていないドライストレーガーがどのような任務に参加するのかは不明だが、雪兔にはそろそろ新しい戦力が加わる頃なのではないかと予想する。

「そういや、次の出撃では、アレに乗るのか？」

「一応テストでは問題無しつて出たし、実戦テストもしておきたいからな」

“アレ”とは雪兔達の新型の事で、甲児達の意見等も取り入れて微修正はしたが、元々設計は済んでおり、基礎フレームも完成していたため、この短期間で完成までいくことができたのだ。それでも普通と比べておかしい速度なのだが

ただ、シャルロットの機体は専用のサポートメカが未完成の為、完成度は六割といつたところだろう。

とりあえず雪兎はジークンに連れられてブリーフィングルームへと向かつた。

ドライストレーガーブリーフィングルーム

集められた面々は主要クルーと甲児……エッジは各所で雑用をしているようだ。

そこでミツバは各所から有望な戦力を搔き集めて独自の部隊を結成しようとしている旨を雪兎達に明かし、今回はその一環として東京へ向かう事を教えられた。

「伊豆じやなくて東京ですか？」

「伊豆なら南原コネクションがある……：コンバトラーVの力を借りるならその選択肢もありだろうな」

「やつぱりコンバトラーについても知っていたか」

それを放つておいて東京に向かうからには何かしらの戦力があるのだろう。

「そう思うのも無理はないですね」

「『ブレイブポリスプロジェクト』は今日まで水面下で進められていたからな」

「ブレイブ、ポリス？」

シャルロットはピンとこないようだが、一方で雪兎とカロリナはその言葉に顔に驚き

を露わにしないよう必死だつた。

「（プレイブポリスだと!?つまりこの世界じゃガオガイガーの超A-I搭載ロボの後輩がプレイブポリスになんのか!？）

プレイブポリス、それは勇者ロボシリーズ第五作目に当たる「勇者警察ジエイデッカー」の組織名で、ロボット等のハイテク犯罪に対抗すべく超A-Iを搭載したロボット 刑事が活躍する物語で、そのボスは何と小学四年生の少年の友永勇太。

彼と勇者ロボ達の絆と戦いを描いた作品である。

「彼等と会う事が、私達が東京に行く目的です」

「（機体のOS独自仕様にしどいて良かつたあ…………）」

このジエイデッカーの世界のA-Iコンピュータにはフォルツォイクロンというものが採用されており、これにはハーメルンシステムというバックドアのようなものが仕込までおり、これを開発したエヴァ・フォルツォイクというジエイデッカーにおけるラスボスはハーメルンシステムを使う事でシステムの仕掛けられたロボットを自分の配下にしてしまうとかいうやべーやつなのである。

まあ、元々研究の行き過ぎで非合法な人体実験やつて冷凍刑にされるような人物なのではあるが…………

そのハーメルンシステムは原作では超A-I等の搭載ロボだけしか操つていなかつた

が、スパロボ時空の彼女が超A.I.だけをターゲットにするとは考え難いので対策は必須となるだろう。

雪兔達のジエガンカスタムや完成した新型には独自OSを搭載しているのでハーメルンシステムの影響は無いと思われる。

「(GGGも再編されてるみたいだが、ガオガイガーとジエイデッカーの世代逆転コラボ……スパロボだからあり得るこれがどう作用するやら)」

ちなみにGGGの勇者ロボ達はまだ三重連太陽系から帰還していないようでガオガイガーフィナルで起こつたGGG追放の影響からか新型は造られていないらしい。

「次世代の勇者ロボか……会うのが楽しみだ」

そんなこんなはさておき、雪兔は生勇者ロボと会えるとあつて喜色円満の笑みを浮かべていた。

＊＊＊

そんな勇者警察をスカウトすべく東京へとやつてきた彼らだつたが……

「敵機体のステルスにより、発見が遅れました！」

「識別信号は出でていませんが、軍の機体ではないようです！おそらくですが、日本周辺で多発しているロボット犯罪と思われます！」

突如ドライストレーガーの近辺に謎のロボ軍団が現れたのだ。

「その鎮圧も私達の任務です。各機に発進指示を！」
そして、それを待ちわびている人物がいた。

「さあて、コイツの初陣だ！」

「師匠、笑みが邪悪になつてる」

「カロリナもだよ……」

そう、雪兎達だ。

「天野雪兎、『ラフトクランズ・ブラン』。出るぞ！」

「シャルロット・デュノア、『ジュヴァリエール』。出ます！」

「カロリナ・ゼンナーシュタット、『ハイペリオンGC』出る！」

雪兎の機体はダウンサイジングとサイトロン技術を代替技術で開発した白いラフトクランズ。

シャルロット専用パックのアンジュルグのビームエネルギーの物質化^(マテリアライズ)を応用し、オルゴンの代わりにビームを物質化するという方法でソードライフルを再現し、シールドクローラーはクローラー部分をパンツアーアイゼンのようにワイヤー式のアンカーハングにしており、ソードライフルと合わせて左右にそれらを装備している。

頭部は下級仕様のラフトクランズのようにツインアイの上にバイザーゴーグルを装着し、FAのバーゼラルドのような頭部の後ろに伸びた二本のアンテナを追加しており、

何処か兎を連想させるデザインとなつてゐる。

他にも胸部のキヤノン等はオミットしており、バツクパツクにはトールギスのような
バニニアスラスターが追加されているとかいう地味にやべー機体。

ブランは白を意味するフランス語から。

シャルロットの機体は見た目はカラーリングがシャルロットカラーのオレンジになつたベルゼルート2号機のシユヴァリエール。

名前から判る通りエール・シユヴァリアー やブランネージュ等の機構を取り込んだ機体で、本来のショートガンの代わりにサイファーガン／ソードを小型化したサイファーエッジを腰の両サイドにマウントしている。

本来ならバスター キヤノンやアルス・ノーヴァに該当するサポートメカがあるのだが、今回は間に合わなかつたようだ。

最後にカロリナのハイペリオンGCはその名の通りハイペリオンGをベースにした魔改造機。

動力源はプラズマジェネレーター二基で、エネルギー問題をクリアしたアルミニュー・リュミエールをバツクパツクから伸びるサブアームで保持したシールドに搭載し、フォルファントリーや発生装置から分離させたものをバツクパツクから二門備える。

両腕に五連装ビーム砲とパンツアーアイゼンⅢを搭載した多目的シールド「ゴルゴネ

イオン】を装備している。

他にもビームナイフを取り外してアーマーシュナイダーとビームソードを組み合わせたマルチシュナイダーを腰のサイドアーマーに内蔵しているというスーパーハイペリオンの上位互換機に仕上がっている。

「行くぞ、皆！準備はいいな！」

「やる気はばつちりです。つまみ食いをさせてもらつて、ヘマするわけにはいきませんから」

「あつ、今日は食堂の手伝いしてたんですね」

「あの設備なら腕を振るい甲斐がありそうだな」

そんな事を話してゐ間にミツバから号令が掛かる。

「各機、攻撃開始！犯罪者口ボットから、東京を守ります！」

そこからは各機散開して敵口ボットを相手にする。

「（コイツはデスマグネか…………確か、ドクトル・ガウスが造つた口ボだつたはず。スペロボらしく量産されてはいるが…………）ブランの敵じやねえな…………雑魚は雑魚らしく糧になりやがれ！」

両手に展開したマテリアライズソードライフルを持ち、数発牽制で撃ち込んでからマテリアライズしたビームソードで斬りつけ胸部のメインコイルを叩き斬る。

「メインコイルがなきや鈍足な的だからな！」

そのまま壊れて剥き出しの胸部にビームを撃ち込んで撃破する。

「そ、こ、つ！」

シャルロットもオルゴンライフルを元にしたマテリアライズライフルでデスマグネを撃ち抜いている。

「ヒュ～、やるねえ」

しかし、そこでトラブルが発生する。

「このエリアに輸送機が接近！どうやら追われているようです！」

「（来たか）」

リアンの言葉通り、戦闘中域に一機の輸送機とそれを追つてきたデスマグネが現れる。

「あの機体だけ動きが良い…………となれば有人機か」

その有人機と思われるデスマグネの磁力ビームが輸送機に被弾し、輸送機は不時着を余儀なくされる。

そして、ガウスが勇者ロボの引き渡しを要求するも同乗していた冴島総監に拒否され、ガウスは街を攻撃し始める。

「各機は輸送機の救出を！急いで！」

そう指示を飛ばすミツバだつたが、ガウスは各機をその場に釘付けにしようと攻撃を仕掛けてくる。

「艦はやらせない！」

だが、ドライストレーガーの近くにはカロリナが控えており、アルミニューレ・リュミールを開いてそれを阻む。

雪兎はデスマグネを振り切ろうと思えば出来たのだが、これから開発を予想して最悪の場合は駆けつけるようにしつつ事態を静観する。

そして、その予想通り、『彼』は現れた。

「やめろ！」

輸送機とデスマグネの間に立ち塞がつたのは一人の少年だつた。

「子供だと？」

「（来たか、友永勇太）」

「あれは……友永勇太君か！」

友永勇太。後のブレイブポリスのボスになる人物にして、主役ロボのデッカードに心を教えた少年である。

「デッカードは僕が渡さないぞ！」

「笑わせてくれる！子供が、このデスマグネに向かってくるか！」

「こ、怖くなんてあるものか！僕は……僕は勇気を持つて強く生きていくんだ！」
 「（そう、その勇氣こそが勇者の何よりも力…………ああ、この名場面に立ち合えて感激
 だぜ！）」

そんな勇太に内心感激しつつ、雪兎はこつそり輸送機へと機体を近付ける。
 ベストポジションでその光景を撮る為ではなく、勇太をいつでも守れるように……
 のはずである。

「デツカード！僕だ……勇太だ！僕の声が聞こえるだろう！その飛行機に乗ってるん
 だろ、デツカード！まだ眠っているのか！」

既にデツカードはメモリを初期化され勇太の事は覚えていないはず…………しかし、勇
 太は呼び掛ける。

「目を覚ますんだ、デツカード！目を覚まして戦うんだ！」

「うるさい奴め！痛い目に遭いたいようだな！」

そんな勇太にガウスはデスマグネを接近させて叩き潰そうとする。

「（チツ、そろそろ動かないと不味いか？）

「デツカード…………デツカード…………デツカード！デツカードオオオオ！」

「うおおおおお！！」

その時である。輸送機の中から一体のロボットが飛び出してきてデスマグネを突き

飛ばしてしまう。

「ホールドアップ！ブレイブポリス、デッカードだ！」

そう、それは勇太の呼び声に応じて目を覚ましたデッカードだった。

「デッカード！」

「勇太……君の声が私を目覚めさせてくれた」

「そんなバカな！シーケンスを無視してデッカードが起動した！」

「あの少年のためにか……」

「おまけにデッカードは彼の事を覚えている……再フォーマットしたはずなのに

……」

更に言えばデッカードのスペックは想定されたものを大きく上回る数値を叩き出している。

「心つてのはメモリを消したくらいじゃ消えやしないって事か」

だがガウスはデッカードを再び攻撃を再開する。

その攻撃はデッカードの後ろにいる勇太にも及びそうになるが、透かさず雪兔がシリードを構えて勇太の前に現れブロックする。

「デッカードとか言つたな！この子の事は俺に任せろ！」

「感謝します！」

そこへ冴島の判断でデツカードの真の力を発揮する為のサポートメカ、ジェイローダーが発進させられる。

「（えつ!?ここでジェイローダー!?二話の合体もここで見させてくれんの!?）」

死んでも治らなかつたメカラタ、まさかのサプライズに表情を隠せなくなつてゐる。

しかし、デツカードは心を得たせいで超A-Iのプログラムを呼び出す機能がバグを起こしており、正常な合体ができなくなつていたのだ。

それによるクラッシュを恐れ、それによつて勇太や冴島達を守れない事をデツカードは何よりも危惧していたのだ。

「失敗を恐れるな！デツカード！」

そこへ雪兎は堪らず口を挟む。

「お兄さん？」

「生まれたばかりのお前が失敗を恐れるのはよくわかる。だがな！この場でこの子やあの輸送機を守るのはお前だろ、デツカード！」

「…………!?」

「お前も勇者の名を受け継ぐ者なら…………このくらいの困難、足りない部分は勇気で補つてみせろっ！」

「先に言われちまつたな…………そうだ、デツカード。お前が勇者なら乗り越えてみせろ

！足りない分は勇気で補え！」

先代の勇者を知る甲児は雪兎の啖呵に苦笑しつつも同意する。

「勇気……勇気……私の超A-Iに刻まれた言葉……」

その間に勇太に冴島は専用の警察手帳型デバイスを手渡す。

「勇太君！君がデツカードを合体させるんだ！キーワードは……」

そして、そのキーワードを託された勇太はデツカードを励まし合体を決行させる。

「ブレイブアップ！ジェイデツカー！」

その勇太の掛け声と共にデツカードはパトカーモードとなり飛び上がり、変形したジエイローダーの胸部へと合体……ジエイデツカーへの合体を成功させる。

「あれが、ジェイデツカー……」

「勇気ある者……新たな勇者の誕生か」

「兜甲児さん、それからそこの貴方」

「雪兎、天野雪兎だ」

「天野雪兎さん……あなた達の言葉にも感謝します」

「俺の力じやない。お前の先輩達の言葉さ……なつ、雪兎？」

「あ、ああ……」

実は割と勢いで言つてしまつたとは言い出せず、甲児の助け舟に乗ることにする。

「先輩……」

「ぬうう…………！依頼主の求めていたのはこれの事だつたのか…………」

ガウスは乗機を一度下げて態勢を立て直そうとするが、雪兎がそれを逃さない。

「逃がすかっての！」

シールドに内蔵したシールドハングでデスマグネの足を掴んでそれを引き戻す事で転倒させてしまつたのだ。

「なつ!?あのサイズで何てパワーだ！」

「今だ！やれ、ジェイデッカー！」

「はい！」

「ジェイデッカー！勝負を決めるんだ！」

「ジェイ、バスターッ！」

そこへジェイデッカーがジェイバスターを発射しデスマグネを破壊する。
「首謀者は脱出したようです！」

「大丈夫よ」

リアンがガウスが逃げるのを危惧するが、ミツバはそれも大丈夫だと諭す。

そのミツバの言葉通り、脱出したガウスの元にジェイデッカーが立ち塞がる。
「ドクトル・ガウス！器物破損、強盗、脅迫、騒乱罪の現行犯で逮捕する！」

そう、ジエイ・デツカーは勇者“警察”なのだから。
こうして新たな勇者のデビュー戦は幕を閉じたのであつた。

スパロボ30⑤超電磁と電腦超人

あの戦いの後、ガウスは無事に逮捕され、勇太は原作通りデツカード達ブレイブボリスのボスである最年少刑事階級は警部となり、ミツバの要請でドライストレーガーの協力者となつた。

「よろしくな、勇太、デツカード」

「雪兎兄ちゃんもよろしくね」

「雪兎さん、改めて感謝を…………あの時、勇太を守つていただいた上に叱咤激励してくださいつてありがとうございます」

「うつ…………今思うと小つ恥ずかしい事言つた気がする」

「そんな事無いぜ、雪兎。実際、あの雪兎の言葉があつたからデツカードは一皮剥けたようなんだからな」

「甲兎さん…………」

雪兎が勇太やデツカードと話していると甲兎がやつてくる。

そして、勇太には聞こえないように雪兎に耳打ちする。

「まあ、何で雪兎があの言葉を知つてたのかは気になるがな」

「うつ…………」

「別に疑つてる訳じやないさ…………隠し事の一つや二つあるのはおかしい事じやないしな」

追求はされるだろうとは思つていたが、幸いこのことに気付いたのは甲兎だけだつたため深く追求する気は無いらしい。

「いつかちゃんと説明しますから」

「そうか」

この話はここまでとなり、ミツバ達も交えて交流を深める事になつた。

そのいつかは割と早くに訪れる事になる。

話は変わつてドライストレーガーの次の目的地は伊豆で、今度はコンバトラーヴを味方に引き入れようという事なのだが、雪兎には一つ疑問があつた。

「南原コネクションはあるのにビッグファルコンが無いってどういうことだ？」

そう、スパロボではコンバトラーヴとセットで登場するのがお馴染みのボルテスVの存在がこの世界には影も形もなかつたのだ。

具体的な名前は出さずに皆に探りを入れてもボルテスVどころかビッグファルコンの名すら出てこなかつたのでこの世界にはボルテスVは存在しないという確証しか得られなかつた。

他にわかっているのはキヤンベル星人との戦いは去年……ゼロレクイエム前に終結している事くらいである。

「キヤンベル星人との戦いの後となると戦力としては頼もしいだろうな」
雪兎はゲームでは他に使いたいユニットが多くてコンバトラーを二軍扱いしていたが、リアルとなればきっと頼もしい味方となってくれるだろう。

そう信じて一行は伊豆へと向かったのだが……南原コネクションが襲撃を受けていると聞き現場へ急行する事となつた。

現場に到着すると、当初南原コネクションを襲撃していたというネオジオン残党はコンバトラーヴに撃退されており、代わりにまたも機械獣が襲撃を仕掛けていた。
「また機械獣か」

「だが、あの機械獣は…………」

「タイターンG9…………」

過去に倒されたはずのワンオフタイプの機械獣の出現に皆は動搖を隠せない。
コンバトラーヴと協力することでその為の機械獣は倒す事ができたが、タイターンG9には逃げられてしまう。

「タイターンG9クラスの機械獣がいるって事は…………」

「最悪を想定しておいた方が良さそうだな」

その後、南原コネクションにて四ツ谷博士らと面会を経てミツバは無事にバトルチームの勧誘に成功したのであつた。

「バトルチームか……」

「よつ、あんたがあの白いのに乗つてた人だな?」

「ああ、天野雪兎だ。よろしく」

「葵豹馬だ。よろしくな、雪兎!」

「いきなり呼び捨てかよ…………まあいいけど」

割と単純な性格をしてはいるが、バトルチームをまとめていたリーダーなだけはあり、あつさり雪兎と打ち解ける豹馬。

「あ、あの!」

そこへバトルチームの頭脳である北小介もやつてくる。

「小介もきたのか」

「あの機体…………雪兎さん自身が設計開発をしたと聞いたのですが!」

「そうなのか!?」

「ああ、ブラン達は俺が設計してドライストレーガーの施設を借りてついこの間完成させたんだ」

「すげえんだな、雪兎つて」

「小介だつけるか、君もアメリカで飛び級で大学に留学してた天才だつて聞いたぜ」

「そ、そんな…………」

「そこからは三人でロボットについて語り始める。

「シャルロットも苦労してるのね」

「ちずるも彼とは苦労したつて聞いてるよ？」

「そうなのよ、豹馬つたらね！」

「一方でシャルロットとちずるはお互いのパートナーとの苦労話で盛り上がっていた。

「青春だね！」

「甲児さんは甲児さんでさやかさんとどうなの？」

「へ？ そ、それはだな…………」

そんな様子を他人事のように見ていた甲児もカロリナにさやかとの仲を指摘されるとあたふたとし始める。

こうしてバトルチームとも無事に打ち解けたのだつた。

* * *

太平洋沖

メインコンピュータの指示した座標へと向かつていたライストレーガーだが、突如

として艦のコントロールが効かなくなり、ドライストレーガーは勝手に進み出してしまった。

そして、霧に包まれたかと思えば見知らぬ街へとやつてきてしまった。
更にはドライストレーガーが突如航行不能になってしまい、外部とも連絡が取れなくなってしまったのだ。

判っているのはその地名がネリマ市ツツジ台という事だけ。

調査の為に各員が手分けして街を回つてみたものの、空に浮かんでいるドライストレーガーには住民は反応を示さず、街の至る所から見える怪獣と思われる存在も見えていないという有様であった。

「昨日はボロボロになつてたのに朝には元通りになつてる……」

「まるでファイクサービームだな」

「ファイクサービーム？」

「昔の特撮番組であつた破壊されたものを復元するビームでな…………でもあれは電腦空間だから出来た芸当だし」

雪兔達も調査に赴いたが、これといった収穫はなかつた。
が、雪兔は一つだけ気になるものを見かけていた。

「ジャンクショッピング、絢？」

その響きが何か引っかかりを感じるも、街に怪獣が現れてしまったのでその引っかかりを解消出来ぬままドライストレー ガーへと戻る事になつたのだが、未だにドライストレー ガーは機能不全で格納庫のハツチも開かない。

なのでハツチを爆破してでも出撃しようとしたのだが……

「何だあの巨人は……」

「まるで特撮ヒーローだな」

「(ちょっととまで!微妙にデザインは違うがあれは間違いなくグリッドマン!?)」

そう、その巨人は雪兎が知る“電腦超人グリッドマン”に酷似していたのだ。

「(という事はここは…………現実世界じゃない?)」

そうこうしている間にグリッドマンと思われる巨人は街に現れた怪獣を倒してしまふ。

しかし、新たな怪獣が現れ、グリッドマンのビームを無効化してピンチに陥つてしまふ。

その時、何処からともなく飛来した剣を手にしたグリッドマンの反撃を受け怪獣は後退し、先程倒したのと同じタイプの怪獣が複数出現する。
「(あの剣、やっぱりグリッドマンソードに似てやがる)」

そこでドライストレー ガーのシステムが突然復旧したため出撃することになる。

「行くぞ、みんな！巨人を援護して、怪獣退治だ！」

「あのような巨大なバイオ兵器が存在しているとは……」

「……多分アレはそういうものじやない」

「どういう事ですか？」

「すまん、混乱させるような事を言つた……みんな、あの銀色のやつにはビーム兵器は使わないように」

「あの巨人のビームだけじゃなくて俺達の武器も効かない可能性があると？」

「ああ、多分アレはそういうコンセプトの怪獣だ」

「わかつた。皆もある怪獣にはなるべく物理攻撃を仕掛けてくれ！」

こうして怪獣達との戦いになつたのだが、最初に現れたタイプの怪獣は首が脆いようでそこを突くことで撃破していくのだが、雪兎は怪獣から感じる違和感からその正体について察し始める。

「（首の強度不足……各所の針金みたいな突起や爪……間違いねえ、コイツの正体はフイギュアだ！）」

特撮のグリッドマンの時は藤堂武史という少年のデザインしたプログラムをカーンデジファーが怪獣へと変貌させていたが、おそらくこの世界では誰かが造つた怪獣フィギュアを実体化させていいのだろう。

「（だとすればグリッドマンのビームに対するメタな怪獣を出してきたのにも説明がつく）」

結局、銀色の怪獣はグリッドマンの剣で両断され撃破されてしまった。

「終わつたみたいだな」

「巨人は消えてしましましたが」

その後、グリッドマンは姿を消してしまい、ミツバの要望でこの街についてもう一度調査をする事となつた。

その際、勇太と雪兎の意見が一致し、ジャングクショップ絢を訪れると雪兎が知る『ジャングク』に酷似したコンピュータの前に三人の少年少女がおり、その画面に映つていたグリッドマンの姿から彼らが今回の協力者なのだと知る。

しかも、ミツバはグリッドマンに部隊に協力してもらえるよう要請し始めた。

その後、三人はグリッドマンとの連絡要員という形でドライストレーガーに乗り込む事となり、もう一人キャリバーと名乗る人物も協力者として同行する事になつた。

また、グリッドマンの入つたジャングクは軍の予算で買い上げてドライストレーガーに持ち込まれる事となる。

「（まさかグリッドマンまで参戦するとか今回のは一体どうなつてんだか……）」

響裕太、内海将、宝多六花の三人とメカニックを名乗るキャリバーなる人物。

おそらく裕太という少年がグリッドマンの合体しているのだと雪兎は予測しているが、もう一つ内海という少年がウルトラシリーズについて随分と詳しかったのが印象的ではあつた。

「行動範囲制限もなくなるみたいだし、これからが本番つてどこか？」

戦力も集まり出した事から本格的に物語が始まる予感を感じ、雪兎も気を引き締めるのであつた。

スパロボ30⑥ドライクロイツと異世界のロボット

行動範囲制限が解除になるにあたり、ミツバは部隊名を【ドライクロイツ】と命名し、その目的を【地球統一】だと語った。

それは現状の地球の内乱状態では侵略者から地球を守るという目標が達成できない。ならば地球圏の各勢力を統一させ、外なる敵に立ち向かう体制を築くのが重要なのだと言う。

その為ならは世界征服も辞さないというその覚悟に雪兔は改めてミツバへの協力を誓う事にする。

「俺もその方針を支持させてもらう。内ゲバしてゐる間に地球が滅ぼされました、じゃ困るからな」

「ありがとう」

「で、とりあえずは地球上で戦力集めを続行か?」

「ええ、まだ宇宙に上がるには不安要素が多いもの」

聞けばブレイブポリスの新たなメンバーの合流もあるのだという。

「(次のメンバーとなるとビルドチームか)」

そんな時、ラサの辺りでD-B-Dが発生したとの方向があり、そこで戦闘が起こつていると聞いて現場へと向かう事となつたのだが、そこにいたのは雪兎にとつて驚愕する存在だつた。

「サ、サイバスターだと!?」

そこにいたのは“風の魔装機神サイバスター”だつたのだ。

「雪兎君、あの機体を知つているの?」

「あつ…………えつと…………詳しい事は彼にも一緒に説明したいので、とりあえず艦に収容してあげて下さい。あつ!あの機体には近付き過ぎないように通達しておいて下さい」

「どうして?」

「近付き過ぎると倒れるんで……下手すると命に関わるレベルで」

「…………わかったわ」

という事で収容したサイバスターのところへ向かうと雪兎の予想した通りの人物がそこにいた。

「やつぱマサキ・アンドーかよ…………」

「俺の事を知つてるのか?」

「それなりにな…………ところで、この中で聞き覚えのある単語はあるか?」

雪兎がマサキに告げた単語は過去の彼が参戦したスーパーロボット大戦に纏わるもので、その聞き取り調査の結果、このマサキは α シリーズと呼ばれるシリーズからやつてきた事が判明した。

「どうか、何でお前がそんな事知つてやがるんだ？」

「サイバスター・マサキさんについても事前に知つていたようですし……」

「前に言つてた話せない事が関係してますのか？」

「もしかして、雪兎兄ちゃん達も異世界人、とか？」

マサキだけでなくミツバや甲兎からも理由を問われ、勇太の言葉がトドメとなつた。

「そんなばかなことが…………」

「そんなばかなことがあつたんだよ……勇太、正解だ。やつぱお前の洞察力は警察向きだよ」

「え、ええええええええええ！」

こうして雪兎達は自分達がマサキと同様にD B Dの影響でこの世界にやつてきた事、そこから今日に至るまでの経緯を説明した。

尚、彼らが雪兎の知るアニメやゲーム等の二次元作品で知り得た知識という話は雪兎なりに「並行世界の事を何らかの影響で受信した人が無意識に創作したのではないか？」という推論を立てて何とか納得してもらつた。

「…………という訳だ」

「マジか…………」

「なるほどな…………俺達の事を色々知つてたのはそういう理由だつたのか」

「とはいえそれらがこの世界の皆と完璧に合致するかと言えばそうではないし、さつきマサキがあちらの甲児と知り合いだつたって話してたに聞いたように同じ人物でも複数の可能性が存在するんだ。だからある程度は予測できる事もあれば全く知らないのも存在するつて事は覚えておいてほしい」

「ふーん」

「では、雪兔君達も元の世界に帰る方法を探す為に？」

「いや、そつちに関しては宛てはあるんだが」

「あるんだ……」

「俺達がこの世界に喚ばれたのには何か意味があるはずだと思つてな。それを解決しない内にハイさようならつてのは違うかなつて」

「これは奇しくもミツバがツツジ台で取つた行動と似ていた。

「では…………」

「原因を突き止めるまではこのままドライクロイツの一員でいさせてほしい」

「ええ、改めてよろしくね、雪兔君」

こうしてマサキの加入と雪兎達の正体の暴露が行われたのだが、転移してきたのは彼らだけで終わらなかつた。

「グレンガストにヴァンアインまで……」

しかもイルムは若い頃第四次スーパー・ロボット大戦ときたもんだから雪兎は頭を抱える。

「グレンガストはまだわかる……でも、ヴァンアインつておい！」

グレンガストは過去にも別パイロットで追加ユニットとして存在したことはあつた。

しかし、ヴァンアインはアプリ版のXΩの主人公機で雪兎もそこまで詳しいシリーズではなかつた事とヴァンアイン自体が火星の遺跡発掘された未知の機体とあつて色々と未知数なのだ。

「あつ、イルムさん、ウチのシャルに粉かけたら容赦しないんによろしく」

「えつ!?俺の印象どうなつてんの!?」

「防塵装置二重で付けても叩けばホコリが出てくるプレイボーイ?」スパロボアンソロジー・ネタ

その後もD.B.D.は多数観測され、ほとんどは空振りに終わつたものの、跳ばされてきた面々からの聞き取り調査でやはり何者かの意思を感じることだ。

ソウルにて見つかったのはアルトアイゼン・リーゼとキヨウスケで、聞けばライン・

ヴァイスリッターに乗っていたエクセレンも巻き込まれたというのでそのうち遭遇するかもしれない。

尚、彼はCOMPACTシリーズからの参加のようで、豹馬の事を知っていた。

「キョウスケ・ナンブだ。よろしく頼む」

次に台北で龍虎王とクスハにブリッドの二人。

彼らは α シリーズから来たようでマサキとは面識があるようだが、キョウスケとは初対面のようだ。

「OGシリーズやつてた身としては面白いような複雑な感じだな」

聞けば強い念動力者であるクスハは跳ばされてきた直後の戦闘では何か強い気配に観られているような感じがした言つていた。

「で、次は何処へ向かうんだ?」

「豪州のアリススプリングス。例の異世界軍に接触するんだつて」

「ブルーホールか…… α 3やOGのクロスゲートみたいなもんっぽいからなあ。気にはなつてたんだ」

「魔法を使う口ボットもいたみたいだし、楽しみ」

「サイバスターは俺らが触れたらプラーク吸われちまうからなあ……にしても魔法を使う口ボットか。いくつか心当たりはあるが……」

聞いた限りでは黒い騎士のような姿をした背にマウントされた杖のようなものから魔法を撃つてくるのだという。

「(どう考へても幻晶騎士シリエットナイトだよな、それ……)」

雪兔が知る限り、そんな特徴を持つ機体はナイツ&マジックという『小説家になろう』から書籍化した作品に出てくる機体であり、その中でもジャロウデク王国が使用していたティラントーという機体なのだ。

ミツバは対話による解決を試みようとしているが、ジャロウデクにそれが通じるとは雪兔は思えなかつた。

「まあ、これも経験つてことかね」

そうこうしている間に異世界軍ジャロウデクと接触しているという連邦軍の部隊との干渉地区に向かつた。

* * *

現場に到着するとやはりそこにいたのはジャロウデク軍のティラントー。

しかも連邦軍へ攻撃を仕掛けているようだ。

とりあえず連邦軍を下がらせてミツバが敵指揮官に対話を試みるのだが、相手はジャロウデク軍銅牙騎士団のケルヒルトであり、彼女は対話等するつもりはなく先制攻撃を仕掛けてきた。

「こ、攻撃してきた！」

「やつぱこうなつたか」

結局迎撃することになり各機がティラントーへと向かう。

レイノルド曰く、幻晶騎士は射撃攻撃に耐性があるらしく、近接攻撃の方が有効なのが、近付くにはあの独特な魔法攻撃を掻い潜る必要がある。

「くらえ！」

「パワーはあるようだが、動きに柔軟性がないな！」

向かつてくるティラントーのメイスをあつさり躱した雪兎はソードライフルをソードモードにし、すれ違いざまに左腕を斬り飛ばし、バランスを崩してつんのめつたところを背面に回つて背面武装を破壊する。

「しぶといね！こっちの世界にここまで骨がある連中がいるとは思わなかつたよ！」

これまでジエガンやイチナナ式を相手にしていたようで、ドライクロイツのような多種混成部隊との交戦経験は無いようだ。

「だが、状況はこちらが有利！初手をミスつたのが致命的だつたね！」

射撃攻撃が有効でなく、先手を許してしまつたのが悪かつたのか、迫りくるティラントーの数にこちらが押されそうになつたその時、ケルヒルトのティラントーに魔導法撃が襲いかかる。

「法撃!? ということは……『お前』もやつぱいたか、御同輩」

そこに現れたのは蒼い鬼武者のような空を飛ぶ幻晶騎士と四足歩行のケンタウロスのようないわゆる異形の幻晶騎士だつた。

すると、鬼武者のような幻晶騎士はケルヒルトのティラントーへと一気に距離を詰めて斬りつける。

そして、何やら興奮した様子でその鬼武者……イカルガのパイロットであるエルネステイはミツバに協力を申し出た。

そんなエルネステイにケンタウロス型のツエンドルグのパイロットである双子のアーキッドとアーテルトルートの二人が大丈夫なのかと問うが、エルネステイの答えは單純明快だつた。

「あんなにかつこいいロボットを動かしてゐる人達が悪であるわけがありません!」
「雪兔…………あの子つて」

「言つたろ、御同輩だつて」

そう、このエルネステイという少年は雪兔と色んな意味で同類で、死んでも治らなかつたメカラタク”なのである。

そして、彼が興奮しているのもスープアロボット大戦という彼からしたら楽園のような世界に来れたからである。

「やっぱ生で見ると迫力がダンチだよなあ」

「そこの貴方！」

「うん？俺か？」

そんな中、エルネスティは雪兔へと通信を繋いできた。

「中々に良い機体をお持ちのようですね！」

「そちらさんもいいセンスしてやがるじゃんかよ」

「ありがとうございます！後で思う存分語り合いませんか!?」

「ノッた！」

この時、ドライクロイツの面々は思つた「あれ？この二人つて出会わせちゃいけなかつたような気がするんだが？」と。

「エルネスティ、ついて来い！さつさと片付けるぞ！」

「エルで構いませんよ、雪兔さん！」

あつという間に意気投合し、自己紹介も済ませた二人は初対面とは思えないコンビネーションでジャロウデク軍のティラントーを解体し始める。

「その機体！」

「僕達がもらひ受けます！」

「うわあ……エルが二人になつたみたいだ」

「ズルい！私達も行くよ、キッド！」

「はいはい」

「僕達も援護するよ、カロリナ」

「合点承知」

そんな二人にアーキッドとアデルトルート、シャルロットにカロリナも追従する。

「何なんだよ、こいつらは!?」

「だ、脱出する！」

「馬鹿な！馬鹿なああああ！」

そうしてジャロウデク軍を削つていると、ツツジ台で遭遇した怪獣達が突如現れてドライストレーガーを攻撃してくる。

「魔獸!?」

「あれはどうちらかというとウルトラシリーズの怪獣に似ていますね」

「やはりお前もそう思うか、エル」

「ええ……なるほど、雪兔さんは別の意味でも話し合いが必要ですね」

「その為にもさっさとこいつらを片付けるぞ」

「はい！」

「くつ……フレメヴィーラの鬼神と同レベルの動きをする白い幻晶騎士だと!?」

その連携攻撃に流石のケルヒルトも押され気味となり、エルネステイ率いる銀凰騎士団とドライクロイツが合流した事を本隊に報告すべく撤退していった。

残つた怪獣軍団はグリッドマンやグルンガストや龍虎王といった特機スーパー口ボットが蹴散らしてくれた。

その後、ホクホク顔でティラントーの残骸を回収した雪兔とエルはそのままドライストレーガーへと戻るのであつた。

「ああ…………！格納庫に並ぶロボット達！これぞ僕が夢に見た光景！なんという僥倖！なんという幸運！天国はここにあつたのですね！」

「わかる、わかるぞ、エル！」

「うわあ…………実際並ぶとエルそつくりだな、あのお兄さん」

「うう、エル君…………」

「アデルトルートちゃんだけ？ごめんね、ウチの雪兔が…………雪兔、多分エルネステイ君と同じ大のロボット好きだから」

「ああ、やっぱエルの同類だつたか…………」

ドライストレーガーの格納庫に並ぶ数多のロボット達に興奮を隠せないエルとそれには深く同意する雪兔。

並んでいるその姿は白と銀という髪色の違いはあれど、同じようにロボット達に青い瞳を輝かせるその姿はまるで兄弟のようですらあつた。

尚、エル達の他に彼らの幻晶騎士を整備しているダーヴィドとバトソンもドライストレーガーに合流し、事情を聞けばジャロウデクはやはりクシエペルカへ侵攻をしており、その救援として銀鳳騎士団がフレメヴィーラから派遣されたのだが、ジャロウデクが他の勢力と協力してブルーホールのあちら側で何かをしているのを調べていたらこちらに跳ばされたのだという。

それからエル達銀鳳騎士団もドライクロイツに協力してくれる事となつた。

「となればまずは宇宙戦闘に対応できるように幻晶騎士を改修する必要があるな」

「ですね！親方！バトソン！こちらのメカニックの方々から色々教えてもらい幻晶騎士を改造しましょう！」

「あ、また始まりやがった…………」

「ということではまず始まつたのは幻晶騎士の宇宙戦闘対応改修である。

「エル君、楽しそう…………」

「アディちゃん、苦労してるんだね」

「シャルロットさん…………」

楽しそうに幻晶騎士を弄りだした雪兔とエルに除け者にされたアディをシャルロッ

トが慰め、お互にメカヲタクのパートナーを持つ者同士とあって二人もすぐに仲良くなるのであつた。

スパロボ30⑦新たな勇者王と地雷国

「なるほど、雪兔先輩も転生者でしたか」

「いや、こつちからしたらそつちが転生モノの先輩になるんだが？」

ドライストレーガーの雪兔に与えられた一室にて雪兔とエルはお互いが転生者である事を明かしていた。

「あく、やっぱり雪兔先輩は覚えてないんですね」

「どういう事だ？」

「こう言えばわかりますか？　“雪人”　先輩」

「!?　ちょっと待て、って事はお前…………俺の高校の後輩の倉田なのか!?」

「あつ、覚えててくれたんですね！　先輩」

「あそこまで口ボで語り合える後輩をわすれられつかよ」

どうやら雪兔の前世である村上雪人とエルの前世である倉田翼は高校時代の先輩後輩に当たるらしい。

雪人は高校時代はロボ研に所属していたのだが、三年時に入ってきた新入部員だったのがエルこと倉田翼だったのだ。

「うわあ…………あの世界、リアルで未来に起こつてた事も異世界転生モノなら作品化しちまつてたのかよ」

「みたいですね…………まさか先輩もＩＳの世界に転生していたとは！」

「俺としては倉田がナイツマのエルだつた事の方が衝撃なんだが…………」

雪兎からすると高校卒業後は疎遠になつてしまつたので今の今まで忘れていたが、エルの方はちゃんと覚えていたようだ。

「ところでナイツマとは？」

「うん？ お前もしかしてナイツマ知らないのか？」

そこから聞き取り調査を行なつた結果。

エルは因果律でも働いたのか、それとも不都合な記憶が消えたのかナイツ＆マジックに関する知識はなく、ブルーホールの向こう側はどうもレイアースの舞台でもあるセフィーロとも隣国関係にあるらしく、レイアースについても知識を持つていないうだつた。

「となると、ナイツマに関しては俺の知識も半分はあてにならねえつて事か」

「出来れば今後の楽しみの為にもネタバレは無しでお願いします」

「安心しろ、俺も西方諸国戦争の辺りまでしか原作読んでねえから…………むしろレイアースとかいう厄ネタがあんのが問題だわ」

「それは炎の魔神の名前でしたよね？」

「作品名にもなつてゐる主人公の魔神だ……原作かアニメ版かでも展開は変わるが、アニメ版だろうなあ」

スパロボではどのようなシナリオになるかは不明ではあるが、原作やアニメの展開からして過酷なものであるのは間違ひなさそうだ。

「それについても先輩がシャルロットさんとお付き合いしているとは……専用機のリヴァイヴも含めて先輩の好きそうなタイプではありましたけど」

「お前は俺を何だと思ってんだよ…………」

「無類のパイルバンカー好きでしたよね？先輩。ロボゲーだとパイルバンカー装備の機体使う事多かつたですし」

「うつ」

「ちなみにシャルロットさん達は先輩が転生者なこともご存知で？」

「ああ、シャルには福音の一件の時に明かしたし、他の連中にも後で明かしたんだが、『まあ、雪兔だし』で納得された」

「あ～」

「お前もそれで納得するんかい！」

その後はお互に転生してからの経緯を語り合い、ジャロウデク軍やザガート一派へ

の対策やロボットについて話し合うのであつた。

エルとの密会の後、ミツバから招集を受けた面々はブリーフィングルームにて次の任務について説明を受けていた。

「GGGからの協力要請?」

「はい、バイオネットの拠点の捜索に手を貸してほしいとの事です」

バイオネットとはガオガイガーシリーズに登場した国際犯罪組織の一つでGGG以外で多くのハイテク技術を有している。

かなりの組織力を持つており、何度もGGGと相対しているが、スパロボシリーズだとそのエージェントの一人であるギムレットくらいしか登場したことがなかつたせいで影が薄かつたりする。

聞けば疑似ゾンダーメタルまで開発しているらしく、疑似ゾンダーロボまでいるんだとか。

現GGGも本腰を入れて制圧に動きたいが、現GGGの戦力は新たな勇者王達しかいなうで超A-Iや勇者ロボの構造等でブレイブポリスにも手を貸していた伝手で連絡をしてきたという。

「超A-Iの勇者ロボが他にいないとなれば拠点制圧の戦力が足りないの無理はないか

(新たな勇者王か……会うのが楽しみだな)』

ということでローマに向かつたドライクロイツの面々だつたが、内海らが勇太に小学生だからとドライストレーガーの中から捜査指揮を取るよう言い聞かせようとして反発され、勇太は単独でローマ市内へと捜査に出てしまつた。

「お前らなあ、そんな言い方したら反発されるのは当然だ。お前らだつて学生だからとか言われて除け者にされたら反発するだろうが……アホなのか?」

「う…………」

そんな内海にお説教をする雪兎。

一方で勇太は現バイオネットの総帥であるタナトスにわざと拐われ、勇太の持つ警察手帳の信号から拠点の特定に成功し、新GGGの機動部隊隊長となつた天海護と副隊長の戒道幾巳はバイオネットの拠点へと強襲を仕掛ける。

「勇太君は天海さんと戒道さんが他に囚われた人達と一緒に保護したつて

「それにしても雑過ぎるな…………最近の活動記録を見るとやつている事がめちゃくちゃ過ぎる」

「まるで自滅しようとしてるみたい…………」

先行したデッカードに合流すると、既にジェイデッカーに合体を終えており、隣には

新たな勇者王ガオガイゴーがいた。

「あれがガオガイゴー……」

「今はGGGの長官になつた阿嘉松社長が建造したコアマシンに既存のガオーマシンを組み合わせて誕生した勇者王か」

敵はE I — 15 予備のガオーマシンを素材に誕生したゾンダーロボの模倣品で、疑似ゾンダーメタルで稼働しているが人は取り込まれていないとのこと。

「なら容赦は要らねえな！」

「あつ、雪兎さんズルいです！」

「俺もいくぜ！」

機動力のあるメンバーが先行してガオガイゴーとジェイデッカーのフォローに回る。特にスピードに秀でた雪兎とエルとマサキが即座に疑似ゾンダーロボと交戦に入る。

「そこつ！」

「ありがとうございます…………えつと」

「天野雪兎だ……会えて光榮だ、天海護さんに戒道幾日さん」

「僕らの事を知つてるんですか？」

「そつちの方が年上だし、敬語じやなくともいいですよ?」

「二人とも、話は後だ！」

そうして疑似ゾンダーロボを減らしているとデスマグネと追加のゾンダーロボが現れる。

護と幾已によればあの疑似ゾンダーロボにはコアとなつた人がいるらしく、能力は他の疑似ゾンダーロボより高いとの事。

「となると、コア持ちはガオガイゴーに任せて残りの雑魚を片付けるとしますかね！」その後、ガオガイゴーのヘルアンドヘブンでコアを摘出すると、護がコアの浄解を行う。

「クーラティオーネ・ネリタース・セクティオーネ・サルース……コクトウーラ！」

「生浄解を見るのは嬉しいが…………なんか嫌な予感がする」

その雪兔の勘は的中した。

「あひやひや」

「こいつは…………バイオネット総帥、ドクター・タナトス！」

普通なら総帥自らがコアになつていてもおかしな点ではあるが、アニメでお馴染みの浄解後のストレスをなくしやつた事を後悔する素振りが見えない。

タナトスを捕らえようとした護だが、逆にタナトスが護に襲い掛かろうとしたその時、何者かがタナトスを気絶させる。

「あれは…………ベターマン・ラミア!?」

〈この者はいただいていく〉

そしてガオガイゴーからタナトスを搔つ攫つていく。

「今のはリミピッドチャンネルか！」

「タナトスを奪つて、どうするつもりなの!?」

〈来るべき対決のために……〉

そう言い残しラミアは去つていき、ガオガイゴーはラミアを追つていく。

「ちつ！艦長、俺も追う！」

「は、はい！」

そのガオガイゴーを追つて雪兎もラミアを追跡するとラミアと護達の他にも七人のベターマン……ソムニウムがいた。

〈ほう、お前もきたか、輪廻を超えし者〉

「俺の事も知つているだと？」

〈シャーラ、このタナトスというヒトに咲いたアニムスはどうだ？〉

そこでラミアはシャーラというソムニウムにタナトスに咲いたアニムスの実を見せ る。

「あれはアニムスの実!?タナトスがおかしかったのはアルジャーノンを発症していたからか！」

アルジヤーノン、それはベターマンにて登場する奇病の一種で、発症すると破滅的な言動をする性格になつてしまふというもので、最終的にはアニムスの花から実をつけソムニウムらを呼び出す。

これはソムニウムらがアニムスの実からしか接種できないD型アミノ酸を糧としている事から、地球が危機に際してソムニウムらを呼び出す免疫行動なのだが、この世界では知つている者はいない。

また、実の種類によつては接種する事で特殊な能力を使える形態に変身する事も可能で、ラミアが求めているのはシャーラというソムニウムに適合する特殊な実なのだ。

〈間違いない…………これはソキウスの実…………これで私は、ソキウスの路を開く事が出来る…………〉

タナトスから生成された実は御眼鏡に叶う実だつたようで、ラミア達はタナトスを連れE.S.ウインドウを開き、"ヒトが正しき生命の選択を望むならば、覇界王と戦うのだ。生命の宝石によつて導かれし空へ向かえ"とだけ言い残し去つていつてしまう。

「覇界王…………」

「それに雪兎さん、輪廻を超える者は…………」

「ここだけのオフレコで頼む」

雪兎は護と幾日だけには自身が転生者である事を明かす。

ついでに他の皆にも行なつた説明も行ない、先程の疑惑を晴らしておく。

「アルジャーノンや二人の事を知つていたのはそういう訳さ」

「なるほど、それで……」

「つて事は雪兎さんは僕らより年上なんだ」

「ややこしいし、お互い対等つて事にしないか？」

「そうだな、雪兎と呼ばせてもらうよ」

「僕も護でいいよ」

「よろしくな、護、幾巳」

こうして新たな勇者王をメンバーに迎えたライクロイツだったが、直ぐに新たな火種と遭遇することとなる。

* * *

今やナナリーを代表とする国家へと生まれ変わったブリタニア。

そのナナリーが難民キャンプを視察中に襲撃を受け、護衛をしていたゼロも謎のKMFに敗れて囚われたとの事。

そのKMFを製造可能な国としてジルクスタンという国が疑われる事となつたのだが、ジルクスタンはその査察として入国申請を行なつたライクロイツを拒絶したといふ。

「あのゼロ^{スザク}が敗けた!?!」

ゼロレクイエム以降のゼロは死を偽りゼロに扮した枢木スザクであり、作中でもどんでもない実力を有していた彼が敗れたというのが雪兎には衝撃だつた。

「（となると、相手は最低限カレンレベルか……にしても、今更ナナリーを攫うつて事は考えうる限り“Cの世界”絡みだらうな……）」

ミツバは潜入捜査を潜入してもバレ難いエッジと傭兵をしていた雪兎とシャルロット・シャルロットが一緒にいくときかなかつたのでに依頼し、先行で潜入しているというチームと合流する。

「…………あんた達がドライクロイツから派遣されたエージェント?」

「まあ、そんな所だ」

そこで待つっていたのは大学生となつていた紅月カレンと篠崎咲世子の二人だつた。

「（うわあ…………これ、絶対アフター系の劇場版か何かだろ!?)」

思いつきりコードギアス関連のメンバーで雪兎は少しだけ依頼を受けた事を後悔していた。

「そつちのは…………」

「天野雪兎…………一応傭兵つて事になつてる」

「その声…………どつかの誰かにそつくりね」

「あ、確かに似てるかもな」雪兎のイメージC.Vがスザクと同じなせい
「……皆様、何者かが包囲の輪を狭めています」

「えっ!?」

「余程探られたくないくらい真つ黒つて事かね、この国の腹ん中は」
ジルクスタンの兵と思われる一団に襲われた雪兎達は咄嗟に宿の一室に飛び込んだ
のだが、そこにいたのはまさかのC.C.だつた。

「ハイ確定！更に奥にも気配あるけど、まずは敵の対処からかね！」

カレンとC.C.が話しているところに隊長と思しき男が現れC.C.を撃ち抜く。

雪兎はC.C.が死んではいないのを知っていたのでシャルロットにC.C.を任せ、カレンや咲世子とジルクスタン兵を伴つてそこから外に飛び出し隊長以外の兵を全滅させる。

「ほう……私の部下が、ほぼ全滅とはやるもんだな」

「明らかに俺らが一般人じやないつてわかつた対応だな？」

「地球連邦の犬に余程の手練が混ざつていたようだな」

「それなりに修羅場は潜つてるんでな」

そして、雪兎が隊長に仕掛けようとしたその時、隊長の右眼に赤いVのような紋様が浮かび上がる。

「(ギアスユーヴーかよ!?)」

「雪兔!?!」

隊長のギアスを受けてしまった雪兔を心配してシャルロットが飛び出してきたのが、雪兔にはその姿が隊長の男に視えてしまう。

「(ちつ、認識阻害……いや、認識置換系のギアスかよ!)」

そう、隊長の男ことクジャバットのギアスは自身と他人の見た目をすり替えるギアス。

すり替えたシャルロットの姿で雪兔に近付こうとするクジャバットだつたが……

彼は気付いていなかつた。

自分が踏んだのはとんでもない虎の尾であるという事に……。

「…………そこ」

「なつ!?!」

近付いたシャルロットの姿のクジャバットに雪兔はなんの躊躇いもなく鋭い蹴りを叩き込んだのだ。

「な、何故!? ギアスは確実に掛かつたはず!?!」

「俺がその程度でシャルを見誤るとでも?」
何とこの兔、クジャバットのギアスで認識が置換されようが、その動きの癖でシャル

ロットではないと見抜き容赦の無い一撃をお見舞いしたのである。

「な、何なんだコイツは!?!」

「ギアスユーラーって事は饗団関係者か?まあいい、捕らえて尋問すりや済む…………先に面倒なギアスは封じておくべきか?多分右眼が起点の視覚型認識置換だろう…………起点の右眼を潰せばそのギアスは使えねえよな?」

「ひつ!?

完全に己のギアスが見破られた事と雪兎が発する視覚化できそうなレベルの怒りのオーラに恐怖するクジャパツト。

即座に逃げに回るが…………

「丁度いい、私もソイツには聞きたい事がある」

復活したC. C. が追い詰め。

「…………逃げられると思ってんのか?」

「ギィヤアアアアアア!?

雪兎に右眼を細い釘の投擲で射貫かれてしまう。

痛みでのたうち回るクジャパツトの頭を雪兎は容赦無く踏み压さえ、そのまま我に返ったカレンに拘束され気絶させられる。

「アイツ、やるな…………」

それを見ていたタキシードの男がいたのだが、彼は仲間と思われる者達に連れられて去つてしまつた。

「今のは…………まあいい、用があるのはこの野郎だからな」

「…………あんた、思つたより過激なんだね」

そんな雪兎にカレンはドン引きだつた。

とりあえずクジヤパットを簾巻きにして拘束すると、死なず右眼が使えない程度に治療してエッジに見張りをさせておき、別の問題の対処をしていた。

「…………まさかルルーシュが生きてるとはなあ」

そう、雪兎が察知していたC.C.の連れの正体は心を失つた状態で生きながらえてしまつたルルーシュだつたのだ。

C.C.が言うにはコードの継承が未確定状態でギアスを行使可能なままゼロレクイエムが行われ、その後にシャーリーがジエレミアの確保していた場所にルルーシュの身体を運び込み、コード継承者の特権であるCの世界での再構築を行なつたのだが、Cの世界の神をルルーシュが殺していた影響か不完全な状態での復活となり、今の心だけを失つた抜け殻状態になつてしまつたのだという。

そこでC.C.はルルーシュの状態を何とかするべく現存するCの世界へのアクセ

スシステムであるアラムの門を求めて旅をしており、ギアス饗団から分派したファルラフという組織が管理する門を求めてジルクスタンを訪れたのだという。

その門があるという場所は嘆きの大監獄と呼ばれるところにある。そこで、ドライストレーガーには陽動を行なつてもらっている間に潜入する事となつた。クジャパットはドライストレーガーの牢屋に放り込んできた

なし崩しに潜入メンバーに加わつてしまつた雪兎は門までの護衛を務めたのだが、騒ぎを起こさせる為に脱獄させた囚人が実は獄長だつたり、カギ爪の男の一派が現れたり、それを追つてきたタキシードの男ことヴァンやレイが乱入してきたりとめちゃくちゃな事になる。

「うわあ、なにこれ……」

「今之内に逃げるよ！」

その騒動に紛れてC.C.、カレンと逃走を図るも、C.C.が撃たれ身動きを封じられてしまう。

「ここで行き止まりか……」

そこでC.C.は旅の終わりを覚悟するも……
「間違つてゐるぞ、それは」

「！」

「この声…………！」

「あくあ、終わつたな、これ」
あの男が甦つた。

「ナリタを思い出すな。あの時もお前は俺を庇つて傷ついた……不死身だからとはい
え、簡単に血を流しすぎだ」

ルルーシュという一発逆転の一手を持つ男が。

『ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる！俺の敵よ、今すぐこの場にて死ぬがよい！』

『ナム・ジヤラ・ラタック！』

ルルーシュのギアスによつてルルーシュの眼を見てしまつたジルクスタン兵達は
次々にジルクスタン特有の権力者への礼をとりながらこめかみに銃を当て自害してい
く。

「（うわあ…………両眼ともギアスのマーク浮かんでる上に完全に制御下じやんかよ
…………）」

カギ爪の男一派はルルーシュに敵対していなかつたせいか無事だつたが、形勢が不利
と判断し撤退していき、ヴァンとレイは一派を追つていく。
「どりあえず情報を得たい…………そこのお前」

「天野雪兎だ。必要なのはこの監獄の構造と……コイツの居場所、だろ?」

「ほう、手間が省けたな」

「あ、この二人、組ませたらマズインじゃ……」

短い付き合いではあつたが、なんとなく雪兎がどういう人間なのかわかつてきたカレンは雪兎とルルーシュは会わせてはいけなかつたような気がした。

その後、ドライクロイツにいちやもんをつけていた親衛隊隊長シェスター・フォーグナーをルルーシュは話術に嵌め、監獄に仕掛けられていた仕掛けを利用して崖崩れを起こし一網打尽にしてしまう。

「うつわあ…………ここまで鮮やかに決まるとは…………流石はゼロ」

そこにヨロイの軍勢が現れ、ドライクロイツと監獄にあつたKMFで出撃したカレンが迎撃しようとするが、それに呼応するようにヴァンのダン・オブ・サーズディが現れる。

「なら…………カロリナ、俺のブランをこつちに射出しき」

「ラジヤ」

雪兎もドライストレーガーのカタパルトで監獄の前に射出したブランに乗り込み戦線に加わる。

「そんなKMFでよくやるわ」

「あんたこそ、そんな機体持つてたのね」

「そつちのはあん時の……」

「雪兔だ。よろしくな、ヴァンさんよ」

「あんたの声、知り合いにそつくりなんだが？」

「最近よく言われる」レイのCVもスザクや雪兔と同じ

そのままヨロイを率いていたジヨーとの交戦の最中、スザクを破ったKMFがジルクスタンの部隊を率いてやつてきた。

その機体に乗る国王シャリオはナナリーは國賓として招いたと詭弁を告げ、カレンと交戦するも、本来の機体でないカレンが不利…………そう思われていたが、そこへもう一人の潜入班のロイドがカレンのKMFである紅蓮を持つて現れた。

その紅蓮への乗り換えを阻もうとするシャリオだったが、ヴァンの「最強を目指す男がポンコツを甚振つて喜んでんじゃねえよ！」という言葉で隙を見せてしまう。
そして、その隙をこの男も見逃さない。

「乗り換えイベントを邪魔するのは無粋つてもんだろうがよつ！」

「くっ!? 何だこの機体は!? 僕のナギド・シユ・メインが押されているだと!?」
「ナイスアシスト！ 恩に着るよ、『夜明けのヴァン』！ 雪兔！」

そうして現れたのは聖天八極式を超える新たな紅蓮……

「やるよ、紅蓮特式！」

カレンの紅蓮と雪兎のブランがシャリオのナギド・シユ・メインを襲う。

「ふうん、ゼロレクイエム以降の技術のこつた煮か……カレンの特式よりは唆られない。こんなのでほんとにゼロに勝つたのか？」

「こ、こいつ！」

「あんたの相手は雪兎だけじやないよ！」

「くつ……姉さんの予言さえあれば！」

「姉さん姉さんとシスコンかよ、シスコンキング」

「お前えええええ！」

どうも雪兎はジルクスタンという国そのものを敵と見なしたようで、先程からシャリオを的確に煽る。

「師匠、的確にあの子に挑発してる……」

「ほんと怒ってるね、雪兎」

クジャパットのギアスにも、シャリオのやり方にも、闘争の中でしか生きようとできない國の在り方にも、ジルクスタンという國そのものが雪兎からしたら不愉快でしかなかつたのだ。

「その姉さんとやらに伝えておけ……その予言とかいう化けの皮、引っ剥がしてやるから覚悟しておけとな！」

「いっけえ！」

カレンとの即興のコンビネーション攻撃でナギド・シユ・メインに大ダメージを与えたが、完全撃破はせずあえて逃走させる雪兎。

しかし、シャリオは連邦軍がジルクスタンに手出しができないと負け惜しみを告げ去っていく。

一方で、ジョーはヴァンが倒すも、最後には自爆されてしまい、ヴァンは目的のカギ爪の男について知る事は叶わなくなってしまった。

「とりあえず今回はここまでか……だが、覚えておけよ、ジルクスタン……お前らが求めるような世界は決して成立しないって事を」

そして、雪兎はジルクスタンという国そのものを敵と認定した。

その後、ヴァンはルルーシュにカギ爪の男について調べてもらう見返りにドライクロイツに加わり、カレンと監獄に囚われていたスザクはルルーシュがC.C.と共にジルクスタンについて探り、色々と判明したら手を貸す代わりに加入する事となる。

その後……

「雪兎と言つたな」

「ああ、ルルーシュか……何か用か?」

雪兎はルルーシュと二人きりで話す機会を得た。

「お前はギアスについて知つていたそうだな?」

「まあ、俺も訳ありなんでな……お得意のギアスとやらで聞き出すか? そんな事しなくても話すけどな」

そして、護や幾巳に話したのと同じ事をルルーシュにも話す。

「なるほどな……それを与太話と片付けるのは簡単だが、似たようなのような事例は知つているからな」

「マリアンヌのギアスか」

「そうだ」

ルルーシュの母マリアンヌが持つっていたのは他者に乗り移るギアス。

それを使いラウンズの一人に潜伏していたのだ。

「しかし、今回の一件は知らないとなると」

「おそらく俺の死後に語られた続編のシナリオだろうな、これは」

「そうか……しかし、お前と話すと違和感があるな」

「今後もなんか言われそうな気がするんだよなあ、それ」

それから雪兎は情報収集に使えそうなツールをいくつかルルーシュに貸し出す等の

個人的な協力をするのを誓うのであつた。

スパロボ30⑧ 勇者の心

ジルクスタンを後にしたドライクロイツはアフリカ・カイロに進路を取っていた。

これは機械獣の拠点を叩きに向かつた剣鉄也と兜シローが率いる第5次機械獣調査隊と合流し、拠点を叩いた後に一人をドライクロイツにスカウトする為である。

「機械獣の生産プラントか……」

「どうしたの？ 雪兎」

「それが再起動しただけってのはおかしいと思つてな」

INFINITYは雪兎も生前に一度見ただけでそこまで詳しく覚えてる訳ではなく、ほとんど知識が無いに等しい作品であり、少しずつ記憶を辿つてはいるものの、詳細を思い出せずにいた。

だが、Dr. ヘルが復活してINFINITYと呼ばれる遺産で何かしようとしているのだけは覚えている。

「雪兎、やはりヤツが？」

「ああ、それは間違いない…………だが、詳しくは思い出せないんだ。すまない」

「気にするな。本来なら判るはずのない事がある程度知れるだけでも十分助かつてゐん

だから

甲児にそう言われ雪兔は気を取り直し状況把握を続ける。

元々量産型機械獣等というのは存在しておらず、量産型は過去の機械獣より高性能化している点や南原コネクションにて遭遇したタイターンG9もかなりの強化が施されていた事から機械獣を作った張本人であるDr.ヘルが生存しているのは確定事項。問題はその戦力がどれほどのものになつてているかなのだが……

「警報!？」

「敵さんもプラントは攻撃されたくないと見える」

「いくぞ、皆！」

各機が出撃すると、生産プラントの近くというのもあつてかなりの数の機械獣がおり、その後方にはやはり復活したと思われるジエイサーJ1の姿があつた。

「ジエイサーJ1は交戦経験のある俺が抑える。皆はその間に他の機械獣を頼む」「マジンガーじゃないんだから無茶はしないで下さいよ?」

「わーつてるよ」

そうして機械獣軍団と交戦になるが、そこに新たな機影が現れる。

「あれはジエットファイヤーP1！いや、違う！」

「そう……ジエットファイヤーP1は、Dr.ヘル様が私を偲んで造られた機械獣

……だが、このアシユラーピーはこの私のために造られた超機械獣だ』

「お前は…………！」

「我こそは、あしゅら男爵！」

それはヘル事変で倒れたはずの甲児とマジンガーZの宿敵であるあしゅら男爵とそれを模したアシユラーピーだつた。

そこから甲児はあしゅら男爵の誘いに乗ったフリをして密かに近付いていた鉄也のグレートマジンガーのサンダーブレーキの間合いに誘き出し、その直撃を食らわせる事に成功する。

その兄弟機の連携にエルが感激し、グレートマジンガーと共にやつてきたイチナナ式に乗るシローは護と幾日との再会を喜ぶ。

「サンダーブレーキの直撃を食らつてまだ動くとは…………超機械獣というのも伊達じやないらしい」

「関心するのはそこなんだ…………」

「とりあえず量産型を片付けるぞ」

量産型を片付けたあとはジェイサーJ-1とアシユラーピーに向けて戦力を分けて攻撃する。

雪兔達は雪兔はアシユラーピー、ジェイサーJ-1にはシャルロットとカロリナが割り

振られた。

「あんたがあしゅら男爵か…………ほんとに左右半分ずつなんだな」

「な、なんだこの男は…………このあしゅらの攻撃がかすりもしないだと!?」

「左右の機体バランスから攻撃モーションの癖があるのは把握させてもらった。左右に分かれる攻撃も似たようなのを知ってるんでね！」

「ぬう」

「今だ、三人とも！」

「おう！ いくぜ、鉄也！ シロー！」

「わかつた！」

「OKだアニキ！」

「ブレストファイヤー!!」

「ブレストバアアアン!!」

雪兔に翻弄されている間に甲児達に囲まれたアシユラーピーはブレストファイヤーとバーンの連携攻撃を受ける。

「終わりだ、あしゅら！」

「フ……フフフ……ハハハハハ！ ハハハハハハ！」

「何がおかしい!?」

「これが笑わずにいられるか！終わりではない！始まるのだ！このあしゅらが闇から陽の光の下に出てきた事の意味を理解しろ！今、この時より世界は動き始める！恐怖で彩られ、真実が剥き出しになるのだ！」

そう言い残し、あしゅらはジェイサーJ-1を連れて撤退していく。

「逃したか……」

「ごめん、こつちも逃げられちゃった」

「大きさの割に逃げ足は速かつた」

「流石にここで倒せるとは思つてなかつたが、これで機械獣の一件の黒幕は確定だな……」

その後、着艦した鉄也とシローは調査隊での任務を終えたという事でドライクロイツに合流する事となつた。

そして、顔馴染みとの交流が済んだ鉄也は雪兎のところへやつてくる。
「あんたがさつきの白い機体のパイロットか」

「天野雪兎です。よろしく頼みます、鉄也さん」

「ああ、よろしく頼む。先程の援護は見事だつた」

「あのあしゅら相手にあれだけ立ち回るのはスゲーよーあつ、俺はアニキ……兜甲児の弟の兜シローだ。よろしくな！」

そこへシローもやつてきて自己紹介を済ませる。

「二人共ここにいたのか」

「あ、アニキ」

「甲児もきたか」

更に甲児も加わり、雪兔はマジンガーブラザーズと交流を深めるのであつた。

アフリカを後にしたドライクロイツは一度日本へと戻ろうとしたのだが、航路に問題が発生した為にオーストラリア方面へと迂回する事となり、その際にブルーホールの近くで戦闘が発生していると知り、そちらへ向かう事に。

「ブルーホールって事はまさか」

「おそらくはジャロウデクとザガート一派……そして、彼女達でしょう」

現場に到着すれば、そこには赤、青、緑の魔神とジャロウデク軍、そしてゴーレムを率いるイノーバという構図。

直ぐ様出撃して魔神の援護に入るドライクロイツ。

「光！海、風！大丈夫！」

「銀凰騎士団のみんな！」

「エル達も、ここに跳ばされてきたんだね！」

顔馴染みの銀凰騎士団の面々と再会して喜ぶ魔法騎士^{マジックナイト}三人だつたが、グレートマジンガーの存在を見て自分達が跳ばされてきたのはセフィーロに召喚される前の自分達の世界であると気付く。

それをイノーバも肯定し、ブルーホールで繋がつた二つの世界は表裏一体であると明かす。

「（イノーバ……既にあの姿なのか、というかデカくね？）つてか、魔法騎士の三人はこの世界出身なのかよ……」

魔法騎士の三人と協力してジャロウデク軍とザガート一派を迎撃する事となつたドライクロイツ。

セフィーロの魔神の戦闘は幻晶騎士の魔法よりも一般的にイメージされる魔法と剣を使うド派手なもので、初見の皆は啞然としている。

「まあ、普通そうなるわな」

「ですね」

ジャロウデク軍はエルがケルヒルトを退けると撤退していき、残つたゴーレムとイノーバの相手をすることに。

「所詮は土塊……ブランの相手には不足つてな！」

「凄い……魔物の相手は初めてのはずなのに」

「的確にゴーレムのコアを攻撃して倒しています」

「私達も負けてられないわ！」

雪兎がゴーレムを簡単に蹴散らすと魔法騎士の三人も負けてはいられないとゴーレムを撃破していく。

「団に乗るなよ、人間ども！」

ゴーレムを全滅させると稻妻を纏つたイノーバが突撃してくる。

「速くはあるが、ブランで躲せない程じゃねえ！」

イノーバの突撃を躊躇すとそれ違いざまにソードライフルで数発を叩き込み隙を作る。

「はあ！」

そこへ魔法騎士達が切り込み……

「これはオマケです！」

エルがソーデツドカノンを撃ち込みイノーバを撃退する。

そこで戦闘終了かと思えば、光がアルシオーネというザガート一派の一人を見つけ、魔法騎士達とアルシオーネが生身でぶつかる。

「ザガート一派までこっちに来るとはな……狙いはやはり」

その後、ドライストレーガーにやつてきた魔法騎士、獅堂光、龍咲海、鳳凰寺風の三

人はこのままドライクロイツに協力する事となるのだが、どうも勇太の姉であるくるみと光がクラスメイトらしく、勇太と光には面識があつたという事実が発覚する。

「世の中つて狭いんだね…………」

「…………そうだな」

「雪兎？」

だが、雪兎の魔法騎士達…………特に光を見る視線はどこか厳しいものであつた。

* * *

ブルーホールでの一件の後、日本近海へと戻つたドライクロイツに冴島総監より新たなブレイブポリスであるビルドチームの完成が告げられ、彼らと合流すべく合流地点の金沢へと移動を開始する。

「ビルドチームか」

「勇者ロボシリーズの定番三体合体二号ロボ」

「追加でもう一体増えるのもお約束ですね」

いつものように集まつている雪兎達に加えて雪兎と縁の深いエルを混じえた対策会議。

これはそれぞれが覚えている原作知識を共有する事で知識に抜けが無いか確認する場でもあつた。

「おそらく登場回と合体回の複合回だろう……となればシャドウ丸とカゲロウのエピソードもまとめてくるだろうな」

「やはり先輩はスパロボ特有の救済を狙うんですか？」

「カゲロウか……俺個人としては助かつてほしいもんだ。 アイツの原作エピソードは……」

カゲロウというのはシャドウ丸のプロトタイプ兼シャドウ丸の教導役となるB P - 500番代のロボで、教導終了後にA I をリセットして再配備される自身の処遇に異議を申し立てた事で離反したロボなのだ。

その後、敵組織にいいように利用された挙句に別のボディに移されて使い捨てられたという悲しい運命を辿った。

「とりあえずカゲロウについては後にしよう。 ビルドチームは原作通りの人員に任せた方がいい彼らの人格形成には良いだろうしな」

という事で今回は原作とは違うイレギュラーが発生した場合のフォローするということで対策会議は終了した。

* * *

金沢試験場

「とりあえずお披露目は順調と」

エルが知つてはいても生での新型のお披露目とあつて興奮していたが、ビルチームのお披露目は順調そうだ。

「うん？ あれはあつちの裕太と……」

ふと見るとグリッドマン同盟の方の裕太に一人の少女が親しげに話しかけていた。

「響、その娘、知り合いか？」

「何よ、今は私が響君と話してるんだけど？」

そこへ声を掛けると、少女の方は不満そうな顔をする。

「えっと、こつちは僕らのクラスメイトの新庄茜さん…………で、こつちは」

「こいつらと同じ艦に乗つてる天野だ」

「ふくん」

明らかに「どうでもいいからあつちいけ！」という顔をしている茜だが、雪兎も色々と茜に疑いを懷いていた。

「（こいつが藤堂武史桿か）」

そんな時、警報が鳴り響き、デッカードとビルドチームが迎撃に出るもパワーが足らず、やはり冴島総監から合体指示が飛ぶも息が合わずに失敗してしまった。

「やつぱり失敗したか…………」

ボットもドライストレーガーが到着してすぐに撤退していく。

「超A.Iのメンタルケアは専門外だし、ビルドチームのメンタル問題は適任者に任せること……」

翌日、ビルドチームの提案で合体のお披露目を囮にカゲロウや敵ロボット軍団を誘き出す作戦が結構され、狙い通りロボット軍団は釣れたのだが、カゲロウの姿は見えない。とりあえずロボット軍団の迎撃にビルドチームは再び合体を試みるも、やはり失敗してしまう。

仕方なくビルドチームを下げ、ドライクロイツが迎撃に出るとカゲロウが姿を現す。やはり記憶を消されるのは死ぬのと同義と新庄健を通じて敵になつたようだ。

「ロボットだつて生きてるんだ……造つた人間だからつて、その生命を好きにしていいなんて事はないんだ……」

カゲロウの言い分に豹馬はかつての敵であつたガルーダを思い出しているようだ。

結局、カゲロウとシャドウ丸がぶつかる事になり、それをグリッドマンが止めに入ろうとするのだが、そこへロボット軍団とは別で現れた怪獣と思われる存在に阻まれてしまふ。

「グリッドマン！貴様は俺が倒す！」

「か、怪獣がしゃべった！」

〔対グリッドマン用に調整された怪獣つてどこか……やつぱりあの小娘が造ったんだろうな〕

新庄茜の関与の疑いを深めた雪兎はとりあえず怪獣への嫌がらせを敢行する。

「おらよつと！」

「こんなもの！」

雪兎が放つたグレネードを怪獣は爪を伸ばして切り払うも、中に詰まっていたのはトリモチネットで、それによつて怪獣は身動きが取れなくなつてしまふ。

「くつ、なんだこれは!?」

「特製のトリモチ弾だ。少し大人しくしてな」

追加で闪光弾まで浴びせて雪兎は怪獣を飛び越えてカゲロウとシャドウ丸のところへと飛ぶ。

「邪魔するぜ！」

「何!?」

「助太刀は無用！」

「俺が用あんのはカゲロウの方でね！」

「俺に用だと？」

二体の間に割つて入つた雪兎はカゲロウへ言いたい事をぶちまける。

「守りたいのはシャドウ丸との思い出なんだろ！なのに敵対なんぞして本末転倒な事してんじゃねえよ！」

「!?」

「それがシャドウ丸を苦しめるとは何故思わない!?」

「そ、それは…………だが、記憶を奪われるのは死ぬのと変わらない！」

そう言つてカゲロウは抵抗するが、雪兎の言葉で動搖したのかシャドウ丸に押され気味となつてしまふ。

「投降しろ、カゲロウ」

「ダメだ……それは俺の死を意味する」

「冴島総監達は既にお前への記憶消去に關しては反省してるんだ。それにお前の記憶を守る手段はある！」

「そうだよカゲロウ！僕がカゲロウの記憶を守つてみせるから！そして、僕達と一緒にブレイブポリスで…………ドライクロイツで戦おうよ！」

そう、ブレイブポリス外部にカゲロウの記憶が流失するのが問題なのであつて、ブレイブポリスやそれに関連するドライクロイツへ所属となればカゲロウの記憶を消去する必要はない。

シャドウ丸も説得に加わり、カゲロウへ投降を呼び掛けるが、カゲロウは犯した罪は

償わなければならぬとそれを断ろうとする。

「そこへ……」

「その必要はない」

ブレイブポリスの超A-Iの開発者にしてカゲロウをロボット軍団に引き込んだ張本人である新庄健が現れ、カゲロウを整備する際に取り付けた服従回路によつてカゲロウのコントロールを奪う。

そして、カゲロウの戦闘データをコピーしたアビスガードと超A-Iを外部から書き換えられリミッターを外されたカゲロウがドライブロイツに立ちはだかる。

だが、新庄健は怒らせてはならない者達を怒らせた。

「…………んな」

「ん？」

「巫山戯んなつて言つたんだよ！このクソ眼鏡エ！」

「ええ許せませんとも！心を持ったロボットの心を強引に書き換えるなど僕の美学に反します！」

「そう、雪兎とエルである。

「ひ、ヒエ！？」

「僕達だつて許しはしない！」

「ああ、気分の良いものじゃないな！」

そして超A-Iの勇者達と絆を育んでいた護と幾巳も同様である。

「シャドウ丸！」

「はい！」

「クソ眼鏡と雑魚共は俺達に任せてカゲロウを止めろ！超A-Iのユニットさえ残つてりや俺が何とかしてやる！だから何としてでもテメエの兄弟を止めろ！」

「雪兎兄ちゃん…………シャドウ丸！カゲロウを止めるんだ！」

「了解です、チビボス！」

雪兔達がカゲロウの量産仕様ともいえるアビスガードを止めていると、ビルドチームが自分達にもやれることをと飛び出していくが、それを不快に思つた新庄健によつてカゲロウが観客達へと攻撃を仕掛けようとする。

それをビルドチームは自身を盾にして守る。

そこで「守りたい人達がいる」という気持ちを一つにした事でビルドチームはビルドタイガーへの合体を成功させる。

「やるじやねえか、ビルドタイガー！」

ビルドタイガーも戦線に加わり、アビスガード軍団は押されていきシャドウ丸とカゲロウの一騎打ちが成立する。

その間にグリッドマンもキャリバーを使い怪獣を退ける。

「カゲロウ！」

「アヒヤヒヤヒヤ！」

「必ずお前を止めてみせる！」

シャドウ丸の多段変形攻撃が決めてとなり、ついにカゲロウは倒れる。

だが、シャドウ丸の最後の一撃はカゲロウがわざと攻撃を受けたような気がした。

「これで……いいんだ……シャドウ丸」

「お前…………やはり、意識が戻っていたんだな」

「途切れ…………途切れだつた…………がな」

ビルドチームの勇気にカゲロウの超A-Iが揺さぶられ、それがカゲロウの意識を呼び覚ましたようだ。

その薄い意識の中、カゲロウはビルドチームの合体を促し、シャドウ丸の攻撃をわざと食らつたのだ。

「あの程度、で…………俺の…………罪が、許されるはずも…………ないがな」

それはカゲロウなりの償いだつたのだろう。

しかし……

「カゲロウ……」

「こんな…………俺を、ブレイブポリスに…………誘つてくれた、あなたの言葉…………嬉しかった…………生まれ変わつたら…………あなたの事を…………ボスと、呼びた…………い…………」

自身を守ると、仲間に誘つてくれた勇太に感謝を告げ、カゲロウは機能停止する。

「カゲロウ…………」

「カロリナ！カゲロウを収容しろ！」

「ガツテン！」

「生まれ変わつたら?!絶対に生まれ変わらせてやる!」こんな最後、俺は認めねえ!」

その後、新庄健はシャドウ丸に現行犯逮捕される事となり…………

「こうして直接会うのは初めてかな?天野雪兎君」

「お会い出来て光栄です、冴島総監」

「で、どうだつたかね?」

「この通りですよ」

雪兎の処置の速さが幸いしてカゲロウの超A-Iは無事に回収が出来た。

「すまないね…………元は我々がカゲロウの事をもう少し考えていれば良かつた事だとい

うのに

「過ぎた事は仕方ありません。今は次の教訓としましよう」

「そうだな」

「それでこれなんですけど」

「ほう、これは……」

「なるほど…………そういう事か」

カゲロウの超A-Iのコアユニットの他に雪兎が差し出したものを冴島と藤堂は興味深そうに見る。

「どうせ生まれ変わるなら強くしてやつた方がいいでしょ？」

「よくもまあこの短時間にこれだけのプランを練られたものだ」

「超A-Iの回収がてらカゲロウの構造は把握させてもらいましたから」

こうして密かな兎の企みが進行するのだつた。

スパロボ30⑨ ゲッターと宇宙

そろそろ宇宙にも活動の場を拡げようという事になつたドライクロイツ。

ドライストレーガー自身に大気圏突破能力があるのだが、ドライストレーガー計画の責任者であるファイクス准将と会う為にジブラルタルを経由するという事らしい。

その前にブラジリアにて反連邦思想のテロリストやゲリラ組織の掃討活動中のゲッターチームをスカウトする事となり、ブラジリアに向かう。

一部からは鬼のような三人組と認識されているが、ある意味間違つてはいないので否定する者はいなかつた。

特に豹馬はやはり彼らに扱かれた経験があるようで好き勝手言つているが、雪兎はそれをちゃつかりボイスレコーダーに録音していたりする。

ブラジリアに到着したドライクロイツが見たのは真ゲッターではない未知のゲッターロボ・真ゲッタードラゴンでメタルビーストと戦う流竜馬の姿であつた。

どうやら神隼人や車弁慶は真ゲッターでの戦闘中に負傷してしまつたらしく、竜馬単独で操縦しているとのこと。

その後、メタルビースト等を撃退して話を聞くと、メタルビーストの攻撃でピンチに

陥った真ゲッターの元に突然現れたのだと言う。

「見た目からして真ドラゴンにくつづいてた上半身に通常の下半身をくつつけたようなデザインをしてるな……それに、真ドラゴンを圧縮して無理矢理このサイズにしたような密度を感じる」

「おそらくゲッターロボ大戦の真ゲッタードラゴンも元になつてるのでしようね」「ゲッターロボ大戦つて、お前そんなのまでやつてたのかよ」

「そういえば雪兔さんは昔のハードはあまり持つていなかつたんでしたね」

「あの頃は色々と余裕が無かつたからな」

エルと真ゲッタードラゴンを見上げてそんな会話をしていると、そのパイロットである竜馬がやつてくる。

「お前らはあの白いのと蒼いのに乗つてたやつか」

「白いのことラフトクランズ・ブランに乗つてる天野雪兔です」

「蒼いのことイガルガに乗つていますエルネステイ・エチエバルリアです」

「おう、流竜馬だ。よろしく頼む」

隼人と弁慶は結局負傷が酷く入院する事になつたそうで、しばらくは竜馬のみがドライクロイツに加入すること。

そうしてようやく宇宙に上がるべくドライクロイツはジブラルタルへと進路を取つ

た。

ジブラルタルはイベリア半島南東端にある小半島でイギリスの海外領土だった土地で、宇宙世紀世界ではマスドライバーを保有する基地の一つとして登場し、Vガンダムではシユラク隊の二名が戦死する事になつたが、この世界ではどうなつていることやら……

「あれがジブラルタルのマスドライバーか…………」

宇宙への打ち上げ施設とあつて雪兎も少しばかりテンションが上がつていて。

ジブラルタルに入港するとドライストレーガーにファイクス准将がやつてきて労いの言葉を告げた後、ミツバを連れマスドライバー施設へと向かつていった。

「あれがファイクス准将か…………まあ、これだけの艦を独立部隊として好き勝手させるだけの権力と頑固さはありそうだな」

「でも、きつとそれだけじゃない」

「ああ、このドライストレーガーやあのヒュッケバイン30にはきつと秘密があるんだろうな」

「すると、エッジがジークンやメイヴィー達と揉めているのが目に入った。

「どうしたんだよ?」

「いや、エツジがファイクス准将に話があるとか言い出してな」

「その態度がちょっとアレだつたし、身体検査がまだだから後にしろつて話してたのさ」

「まだ検査やつてなかつたのか？ エツジ」

「だから俺は検査つてのは嫌いなんだよ」

結局は手早く検査を済ませるという事に落ち着きエツジはメイヴィーを連れて去つていった。

「やつぱりエツジにも何かあるみたいだな……それもファイクス准将に関係のある何かが」

エツジがマスドライバー施設に向かつてしまふとマスドライバー施設に敵襲の警報が鳴り響き、ドライクロイツはその迎撃に出撃する。

先日もザンスカールがリガ・ミリティアと一戦交えたというのに再びマスドライバー施設を襲撃しに来た敵に皆怒りを露わにするが、一際キレイている者がいた。

「な、なあ……雪兎のやつ、いつも増してキレイでねえか？」

「そういえば、彼マスドライバー見るの物凄く楽しみにしてたもんね……」

「元の世界で宇宙進出を目標に色々やつてるつて言つてたしな……」

「そう、宇宙大好き兎こと雪兎である。」

「ネオジオン残党に機械獣か……機械獣は兎も角、ネオジオン残党は余程死にたいみ

たいだな?」

「師匠、やつちやう?」

最近ではすっかり雪兔の影響を受けてしまつてゐるカロリナも同様であつた。

「艦長、ご指示を」

「……」

「艦長……」

それとは対照的にミツバは何処か心ここにあらずといつた様子。

「しつかりしろ、ミツバ! 出来る事を精一杯だ!」

だが、エツジの喝で何とか正気になり指揮を取る。

「ギラ・ドーガでこのプランの相手が務まるかよ!」

「う、うわあ!?」

機械獣は特機タイプの面々に任せ、ネオジオン残党の方へと向かつた雪兔はすれ違ひざまに一機をソードライフルで切り裂く。

「こ、この!」

「おつと

「なつ!?

そこへ別のギラ・ドーガがビームアックスで攻撃を仕掛けるも、シールドのアンカー

ハングで切り捨てたギラ・ドーガを拾いそれを盾にするという浅倉式ガードベントで受け止め、そのギラ・ドーガのパイロットが動搖した隙にライフルモードでコックピットを容赦無く穿く。

「あ、あいつは血も涙もないのか?!」

「マスドライバーという人類の財産に仕掛けておいてそれは身勝手過ぎ」
「ンギヤアアアアア!?!」

カロリナは両腕のパンツアーアイゼンⅢで別のギラ・ドーガを掴まえ、引き戻す勢いと自機の加速で一気に距離を詰め、アルミニューレ・リュミエールを展開してぶつけるというエゲツない攻撃を敢行する。

「…………あいつらが敵でなくて良かつた」

その後、ネオジオン残党と機械獣は始末出来たのだが、そこへ例のアンノウン達が現れ、ライストレーガーを集中攻撃し始める。

エツジのヒュッケバイン30がカバーに入り何とか体勢を整えると、ライストレーガーは事前にファイクス准将から承認を得て開放された主砲を放ちその半数を焼き払う。

「威力が桁外れ過ぎる…………」

そんな中、敵の指揮官機と思われる腕の付いた機体からオープンチャンネルで通信が

入る。

『ほう…………私が出て来た意味があつたようだよ』

『有人機、だと?』

『いい機会だ。君達の力を試そう』

その上から目線な発言にドライクロイツの面々は苛立つ。

当然雪兎もその一人である。

「何様か知らねえが、ネオジオン残党相手じや不完全燃焼だつたんだ……少しは楽しませろよな!」

無人機の方はドライクロイツの面々には大した事はなかつたが、有人機の方は手練が乗つていてるのか動きが違つた。

更には腕からビームの刃を伸ばしたスパイク攻撃等のこれまでの機体とは別の動きもしてくる点が厄介だつた。

「コイツ…………強い」

『ほう、私についてこれるのか』

それからしばらくしてアンノウン・リーダーと呼称された機体は一度ドライクロイツの面々から距離を取る。

『なるほど…………有意義な結果が得られたよ。では、また会おう』

「逃がすかよ！」

撤退していくアンノウン・リーダーをエッジが単独で追う。

「一人で行かせて良かったのか？」

「エッジならきっと大丈夫です」

その後、エッジは少し機体にダメージを負つてはいたものの無事に帰還した。

戦闘ログからこれまで使えなかつた武装が使えるようになつていたりとドライストレーガーと似たような状態で雪兔は両者にある秘密について疑念を深める。

「アンノウンか…………やはり鍵を握つてるのはファイクス准将、あんたなんだろうな」
個人的に話す機会はなかつたが、ファイクス准将がドライストレーガーやヒュッケバイン30の秘密の鍵を握つていると確信する。

そんな想いを懐きつつ、雪兔はドライクロイツの面々と共に宇宙へと上がる。

「宇宙か…………聖剣の時の一件以来になるが…………何が待つてゐるんだろうな」

スパロボ30編⑩ ゲリラとザンネン兎

宇宙に上がったドライクロイツはまず宇宙でザンスカール帝国と戦いを繰り広げているL3エライア宙域にて活動中のゲリラ組織であるリガ・ミリティアと接触を試みた。

リガ・ミリティアとは火星よりも外側から侵攻してくるウルガルやネオ・ジオン残党、地上で暗躍する機械獣やそれに便乗するジオン共和国への睨みを続ける地球連邦軍の隙を突いて台頭したザンスカール帝国に対抗するゲリラ組織ではあるが、ただのゲリラ組織ではなく大口のスポンサーを持ち、元アナハイムや元サナリイの技術者を有し独自にMSを開発出来るくらいには力を持つた組織だ。

その創始者にして指導者のジン・ジャハナムは複数の幹部が名乗るコードネームのようなもので、これは組織のリーダーの暗殺を防ぐという目的がある。

実働部隊にいるジン・ジャハナムを名乗る人物は姿を知られていないのを良いことに用意された影武者のような人物だ。

その真のジン・ジャハナムとされる人物はハンゲルグ・エヴィン。

これから接触予定のリガ・ミリティアの実働部隊に所属するウツソ・エヴィンの父親

だつたりするのだが実は親子揃つて同じリガ・ミリティアに所属している事すら再会するまで知らなかつたりする、それを知るのは我らが兎一行とエルだけ。

「ザンスカールはほつとくところにならんからなあ」

「ギロチン、地球クリーン作戦、エンジェル・ハイロウ……どれも放置は危険」

ザンスカール帝国はマリア主義という飴とギロチンによる恐怖政治という鞭を使い分ける人類統治を目的とする勢力で、独自のMSや装備によつて地球連邦やリガ・ミリティアを苦しめた。

地球クリーン作戦という巨大なタイヤを持つ戦艦やMAによつて地球を真つ平らに整地するという正気を疑う作戦を実行しようとしたり、エンジェル・ハイロウと多数の超能力者を使つたサイコウェーブで地球人の精神を幼児退行させてその隙に侵略しようとかヤバい事を平然とやるような連中なのでほんとに質が悪い。

「なのにザンスカール以外にもウルガルやネオ・ジオン残党にあのアンノウンを率いてるらしき奴らもいるとかほんと勘弁してほしいよ」

そんな事をブリーフィングルームの端っこで話していると、そのリガ・ミリティアとザンスカールが交戦していると判り、ミツバの判断でその戦闘に介入する事となつた。

戦闘宙域に辿り着くとそこにはV、ガンダムとV、ガンダムヘキサ、数機のガンブラ

スターがコンティオとゾロアットの部隊と交戦していた。

更にはネオ・ジオン残党までもザンスカールと組んでいると判明する。

「コンティオに乗つてるのはクロノクルにピピニーデンか、それにあつちはルペ・シノまでいんのかよ……クロノクルの方はウツソにお熱のようだし、ピピニーデンの方はこつちで抑えるか。シャルはルペ、カロリナはネオ・ジオンの方を頼む」

潔癖シスコンのクロノクルに小者のピピニーデンはともかく、ルペ・シノは後にウツソに色々と厄介なちょつかいを出す人物である為、雪兎からは他の二人よりも警戒対象になつてたりする。

というかVガンダムの敵女性パイロットはルペ以外にもカテジナやファラ等軒並み厄介な人物が多いので警戒するのも無理はないのだが……

「というわけでお邪魔させてもらうぞ！」

「なつ、敵の援軍だと!?」

仕掛けた雪兎に対しピピニーデンは両肩に搭載されたショットクロード迎撃を試みるが、容易く回避された拳銃、有線コントロール用のワイヤーを切断されてしまう。

そのまま切り込む雪兎だったが、ピピニーデンは左腕のビームシールド発生装置で防御され、ビームシールドを貫通したソードライフルによつて左腕を切り落としたものの、本体にはダメージを与えられなかつた。

「ちつ、腐つても部隊指揮官つて訳か」

その後、クロノクルもウツソに撃退され、ザンスカール軍は撤退していった。
「ここで仕留めても後々の状況が変わってしまうおそれもあるし、撤退してくれたのは
ある意味助かつたかな」

そうは言いつつも切り落としたコンティオの左腕とワイヤーの切れたショットク
ローはちやつかり回収している雪兔。

「ん？ あそこにあるのは…………」

そんな時、雪兔はスペースデブリの中からあるものを見つける。

「これって…………」

それは今となつてはレア物となつているMSの残骸だった。

「大分破損してるが、直せば使えそうだな…………どうせなら『アレ』に改造するのもア
リだな」

というわけで、雪兔はその残骸を持ち帰る事にしたのであつた。

* * * * *

戦闘後に合流したりガ・ミリティアのメンバーはドライクロイツに編入される事と
なつた。

しかし、Vガンダムの重要人物の1人であるシャクティ・カリントーがスージィ、カルル

マンの2人と密航しており、その痕跡がリーンホースの損傷した移住brookで確認された。

ノーマルスースは着用していたようなのもしかしたら生存して宇宙を漂流しているかもしれないトリガ・ミリティアのメンバーが話していたが……

「無事は無事なんだが、なあ…………」

「ですね」

実はシャクティはザンスカールの女王であるマリアの娘であり、高いニュータイプ能力を有しているのだ。

その為、ザンスカールで保護されはするのだが…………

「まあ、合流前の事じや、俺にはどうしようもねえがな」

* * * * *

続けてドライクロイツはファイクス准将の依頼で地球圏最外縁部であるコロンブス宇宙域へとやってきた。

聞けば連邦軍、ザンスカールの両軍の機体の残骸が多数発見されたとの事で、その調査となつてゐるが…………

「まあ、ウルガルだろうな…………となるとMJP…………チームラビッツか」

何の因果か兎の名を冠した者同士が遭遇する事となる。

その後、GDFのシモン大佐の救援要請を受けて指定宙域に向かえばやはりウルガルとそれに対峙するアツシユに搭乗したチームラビッツがいた。

「あれがウルガル……」

「こんな形で初めての異星文明と接触する事になつたのは不本意だが、ウルガル相手なら容赦は要らないな！」

ウルガルは他の文明惑星を相手に“狩り”と称した侵攻を行なう厄介な異星人で、それを疑問視した一部の者が地球に亡命し技術提供を行つて完成したのがチームラビッツの操るアツシユである。

「あのピンクの大きな機体、私と戦闘スタイルが似てる？」

「あの大きさに惑星間航行用の大型ブースターだから威力は向こうの方が上だろうな」

「負けない」

「カロリナが対抗意識燃やしてる……」

何故かローズスリーに対抗意識を持つカロリナ。

途中に民間船が迷い込むというハプニングもありながらなんとかウルガルを撃退したドライクロイツとチームラビッツ。

更にそのままチームラビッツはドライクロイツ預かりとなり、部隊はまた賑やかとなつた。

「実際に見るとほんと普段はザンネンだな、こいつら……」

「あつ、君があの白い機体の」

「ヒタチ・イズルか。まあ、よろしく頼むわ」

「う、うん……」

雪兎はチームラビッツとは最低限の挨拶を交わしてその場を去る。

「何か気に障る事をしたかな?」

「単にあいつも『兎』だから一緒にされたくなかったんじやねえか?」

「あり得る……」

「(それだけとは思えないけどね……MJPは色々きな臭い噂もあるし、情報通の彼らその辺詳しそうだものね)」

皆が茶化す中、メイヴィーだけは雪兎の態度に心当たりがあるようではあつた。

* * * * *

それからファイクス准将からの通信で火星のデウテロニクス海に突如未確認の建造物が確認されたとのことで、その調査も兼ねて太陽系圏内までの行動許可が降りたとのこと。

この世界では火星も既にテラフォーミングが済んでおり、ガン?ソードの主な舞台も惑星エンドレスイリュージョンから火星に置き換えられているらしく、ヴァン達も火星

が気掛かりな様子である。

そんな中、ドライクロイツは火星の艦船と思われる謎の建造物調査の前にもう少し戦力を集めようと、ルオ商会からとある依頼によりとある“ガンダム”を受け入れる事になるのだが……。

スパロボ30編 中断メッセージ集①

①兔達の労い
雪兎「おつ、ここで中断するのか？まあ、そろそろ疲れてくる頃だし、ゆっくり休めよ」

シャル「うんうん、ちゃんとした休息を取らないと効率が悪くなっちゃうもんね」
カロリナ「シャルロット、師匠の影響大分受けてる？」

シャル「はっ！」

雪兎「悪影響みたいに言わんとくれるかな？ともあれ、プレイヤー諸君はしつかり休息を取つてから戦線に復帰してほしい」

カロリナ「またね」

②兎と銀凰

エル「はあ、スーパーロボット大戦……夢にまでみた舞台に僕も参戦出来るとは思いました」

雪兎「ほんと嬉しそうだな、エル」

エル「先輩は嬉しくないんですか？」

雪兎「夢の舞台というのは同感だが、何か思惑があつて巻き込まれた身としては素直に喜びにくくてな」

エル「あ、そうでしたね」

雪兎「まあ、お前とこんな形で再会するとは夢にも思わなかつたがな」

エル「そこはお互い様ということで」

③兎とザンネン兎達

イズル「雪兎も名前に兎つて入つてるし、ある意味チームラビツツの一員だね！」

アタル「二つ名も『兎の皮を被つた災害』だもんな」

雪兎「チームザンネンの一員とか御免被るんだが!?」

タマキ「失礼なのら！」

ケイ「そうよ！」

イズル「色は白いからホワイト6かな？」

雪兎「勝手に話進めんな！それにホワイトは0だろ」

チームラビツツ「？」

雪兎「あつ、言わん方が良かつたな、これ」

イズル「えっ!?」

アタル「他にも何か知つてそうだな」

雪兎「ちなみに6は黒な」アンジュ参戦前

ケイ「6人目、ほんとにいるのね……」

雪兎「更に言えばまだいるんだが……」

タマキ「ハイ!パイロットはイケメンですか!?」

アサギ「現状で手一杯なのにまだ増えるのか……胃が痛い」

④中の人、その1

エル「そういうえば先輩の声ってよく似た人が多いですね」

雪兎「この作品だと俺含めて4人はいるからな」CV：櫻井孝宏

エル「多いですね」

雪兎「そういうお前は前世の声がウツソそつくりだろうに……今の声は某盾後輩だ
が」阪口大助と高橋李依

エル「あ、確かに少し複雑ですね」

雪兎「他にも同じ声の連中はいるが」

エル「エツジさんとブリットさんやマサキさんとグリッドマンとかですね」杉田智和

と緑川光

雪兎「まあ、これは俺達特有の問題だわな」

エル「ですね~」

⑤ そういうえば……

シャル「そういえば、雪兎」

雪兎「ん？」

シャル「冴島総監達と色々話してたみたいだけど、何を話してたの？」

雪兎「ああ、それか…………それは今後のお楽しみってやつさ」

シャル「え~」

雪兎「まあ、直にわかるさ…………早く知りたいならジェイデッカーとビルドタイガー、

それとグリッドマンを活躍させてみるといい」

シャル「プレイヤーの皆さん、是非とも雪兎の言う条件を頑張つてみて下さいね！」